第三十四回郷土先人展

真宗の説教者たち

砺波市立
砺波郷土資料館

はじめに

富山県内にある宗教法人のうち、実に七割は浄土真宗の寺院であり、富山県は「真宗王国」と呼ばれています。なかでも、砺波地方は八割以上が浄土真宗の寺院です。昭和戦前生まれの人なら、毎朝家族そろって仏壇の前にすわって手を合わせ、ご飯のときは「いただきます」と言ってはじめて箸をつけ、食事が終われば「ごちそうさまでした」と言って箸をおく。そんな生活があたりまえでした。日常生活の隅々まで、「なむあみだぶつ」と「おかげさま」という感謝の心が浸透していたといえるでしょう。

親鸞聖人が浄土真宗を創始したのは今からおよそ八〇〇年前のことです。蓮如上人が福井の吉崎御坊を建立して、北陸の地に念仏の声がこだまするようになったのは五五〇年前のことです。以来、長い年月をかけて真宗の教えは徐々に私たちの生活の中へ染み込んでいたのです。そこに大きな役割を果たしたのが、今回の展示でとりあげる「説教者（せっきょうじゃ）」と呼ばれる人たちです。説教者とは、各村の寺や宿に集まった人々に、親しみのある話を交えながら、わかりやすく真宗の教えを説く人のことです。彼らの中には、京都の大学で学問をおさめて、故郷へ帰った人もあります。小さいころから近所のお寺へ役僧としてはいり、日々のお勤めをしながら自らを鍛え上げていった人もいます。師と仰ぐ人のもとへ弟子入りし、師と寝起きを共にしながら、教義についてはもちろんのこと、生活全般について教えを受けて一人前に成長した人もいます。さまざまな過程を経ながらも、だれもが情熱をもって民衆一人一人にお念仏の心を説いてまわりました。

娯楽の少なかった当時の村人たちは、村外から訪れる説教者を待ちわびていました。自分の家を宿にして「お座」をすることは名誉なことでもありました。説教者の語る言葉の一言一言に、手を合わせて大きくうなずき、口元からは、知らず知らず「なまんだぶ」の念仏があふれ出る、そんな光景がどこの村でも見られました。

昭和三〇年代後半からの高度経済成長により日本社会は大きく変貌しました。各町にあった常設の説教所は閉じられ、村での「お講」や「お座」も姿を消しつつあります。しかしながら、今でもワカイショボンコ（若衆報恩講）やアマオコウ（尼御講）などが行われている村も多くあり、信仰心は今も受け継がれています。

今回の展示で、砺波の風土をつくりあげることに大きな役割を果たしてきたと思われる真宗の説教者たちのはたらきを振り返り、穏やかで思いやりのある砺波人の心と、共に育んできた砺波の文化の良さを再認識するよすがにしていただければ幸いです。

最後になりましたが、このたびの秋の先人展を開催するにあたり、多くの方々にご指導とご協力をいただきました。心よりお礼申し上げます。

平成二十二年十月

砺波郷土資料館

「第34回郷土先人展　真宗の説教者たち」図録目次

はじめに

目次

一　真宗王国　砺波 …… 1
二　砺波地方への真宗の広まり …… 2
三　行徳寺と赤尾の道宗 …… 4
四　ある説教者の足跡 ―行徳寺文書より― …… 5
五　行徳寺文書と説教 …… 6
六　砺波地方の常説教場 …… 7
七　出町の常説教場　真寿寺 …… 8
八　善光寺如来をかついでまわった矢木の伝四郎 …… 9
九　鹿島祥雲寺の名説教者　土屋豊成 …… 13
十　高宮善念寺の名説教者　寶性實成 …… 15
十一　聖徳太子の絵解き僧　吉澤孝譽 …… 18
十二　能登の節談説教 …… 20
十三　能登の節談説教師　範浄文雄 …… 22
十四　聖徳太子絵伝 …… 24
十五　親鸞聖人絵伝 …… 28
十六　地獄極楽図 …… 30
十七　説教本 …… 32
十八　御示談問答 …… 34
十九　チョンガレ台本 …… 35

資料編

一　説教

㈠　大原談義（または大原問答） …… 36
①　大原談義とは
②　大原問答　範浄文雄説教
③　大原問答（写本）

㈡　二河白道 …… 39
①　『二河白道講話』
②　二河白道　範浄文雄説教
③　加典兄妹　範浄文雄説教

二　法話

㈠　本山御焼失再建引立座法話　文政十年（一八二七） …… 43
㈡　本山講師演説集　文政十二年（一八二九） …… 45
㈢　御遠忌法話　大正十三年（一九二四） …… 47
三　御示談問答 …… 48
四　越中の妙好人 …… 49
五　聖徳太子絵伝

㈠　讃文 …… 49
㈡　裏書 …… 50
六　真寿寺を訪れた説教者一覧（昭和年代） …… 52
七　説教テープ・CD・DVD一覧 …… 60

展示品目録 …… 61

※表紙と裏表紙写真は、昭和五十二年砺波市荒高屋での若衆報恩講のようす（小西竹文氏撮影）

凡例

一、本書は、砺波郷土資料館において平成二十二年十月十五日から十一月二十八日まで開催した「第三十四回郷土先人展　真宗の説教者たち」の展示図録である。

二、本文中の資料番号は出品目録の番号と一致する。

三、本展の企画・本書の編集については安ヵ川恵子が担当した。総括的な指導および写真撮影などは高原徹館長・杉森貢砺波散村地域研究所事務局長、参考文献の検索、紹介、手配などは平木恭子、真寿寺記録の解読・入力、善光寺縁起絵巻・聖徳太子絵伝・地獄極楽図などの解説は学芸員渡辺礼子、範浄文雄説教のテープ起こしをはじめとするさまざまな資料の入力は片田春美、展示作業の補助は般林雅子・重原佐代子が担当した。なお、寶性實成の石碑解読は、学芸員実習生として当館へ実習に来ていた金岡寛子の補助を受けた。

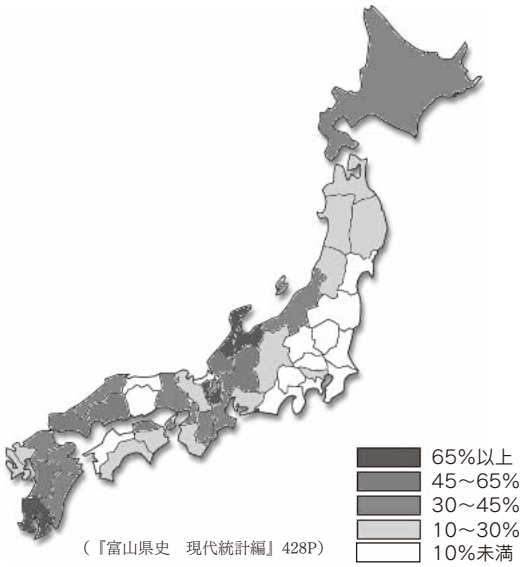
一　真宗王国　砺波

越中は「真宗王国」といわれています。図1でわかるように、浄土真宗系寺院が全寺院数の65パーセント以上の割合であるのは富山・石川・滋賀・鹿児島の四県にすぎません。その中でも富山県は70.8%[1]で全国一の比率です。全国平均は約28%[2]（図2）にすぎないので、いかに富山県に浄土真宗系寺院が多いかわかります。さらに、その内訳をみると（図3）、浄土真宗本願寺派（お西）がわずかに真宗大谷派（お東）を上回っています。

一方、砺波地域（ほぼ旧東西砺波郡）をみると（図4）[3]、浄土真宗系寺院の割合は83%となります。「真宗王国越中」の中でももっとも真宗系寺院の数が多く、まさに「真宗王国　砺波」といえます。そしてその内訳は、お西が25%であるのに対して、お東は58%で、お東の方が圧倒的に多くなります。江戸時代に加賀藩の触頭（ふれがしら）（寺社奉行のお触れを配下の寺社へ伝達したり、配下の寺社からの訴えなどを奉行へ取り次ぐ役割の寺）であったお東の井波瑞泉寺・城端善徳寺の影響があるのでしょう。

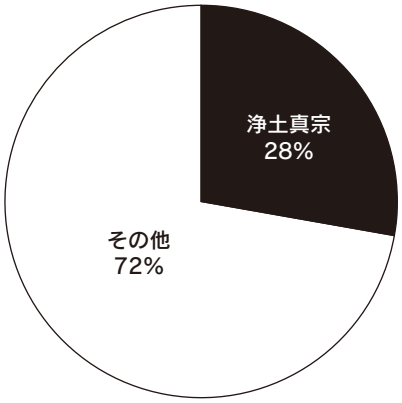
(1)(2)『富山県史　現代統計編』429P「全国都道府県別仏教系寺院数および浄土真宗系寺院数（昭和43年）」
(3)『富山県史　現代統計編』428・429P「昭和54年県下の市町村別、宗教・宗派別、宗教法人数」から砺波市・小矢部市・城端町・平村・上平村・利賀村・庄川町・井波町・井口村・福野町・福光町・福岡町の数を合計したもの

図1　全仏教寺院中の浄土真宗系寺院の割合（昭和43年）



（『富山県史　現代統計編』428P）

図2　全国の仏教寺院中における浄土真宗系寺院の割合（昭和43年）



（「全国都道府県別仏教系寺院数および浄土真宗系寺院数」（昭和43年）
『富山県史　現代統計編』429Pより作成）

全仏教寺院中における浄土真宗系寺院の割合（昭和54年）

図3　富山県

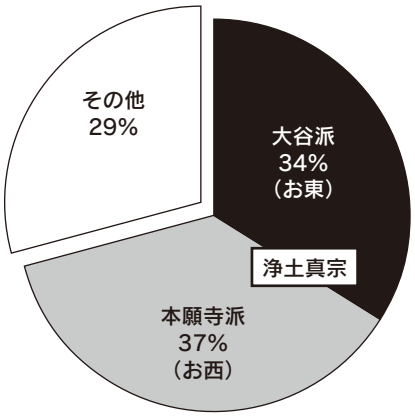
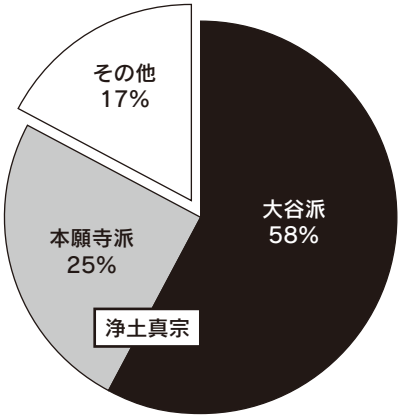


図4　砺波地域



（「昭和54年県下の市町村別、宗教・宗派別、宗教法人数」
『富山県史　現代統計編』428・429Pより作成）

二　砺波地方への真宗の広まり

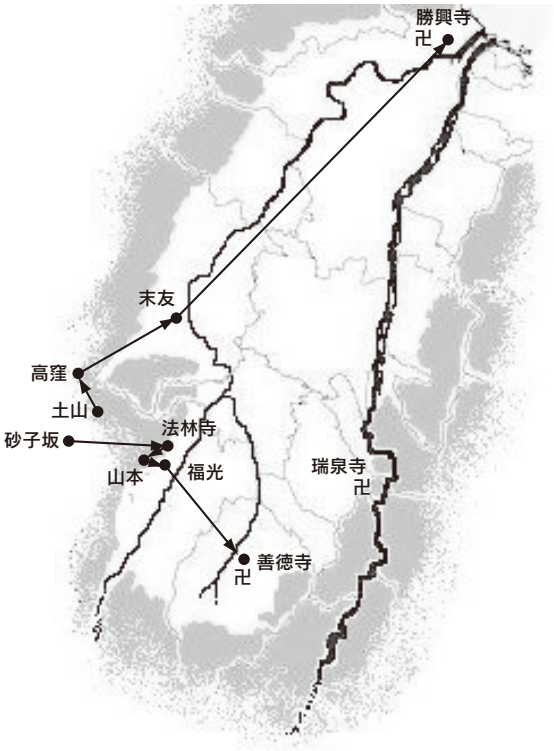
越中三大御坊

井波　瑞泉寺

伏木　勝興寺

城端　善徳寺

図５　越中三大御坊の足跡



砺波地方の真宗年表

今から750年前　700年前　600年前　500年前　400年前

（西暦）1300　1400　1500　1600

鎌倉時代　（南北朝時代）　室町時代　（戦国時代）　安土桃山時代

砺波地方関係事項

本山・全国の動き

1230 浄土真宗の開祖　親鸞、「教行信証」を著す ①

1262 浄土真宗の開祖　親鸞没す ②

1390 本願寺5世綽如、井波瑞泉寺創建の勧進状を書く ②

○土山坊（のちの勝興寺）できる

1471 蓮如、越前吉崎に坊舎を建立 ②

1475 蓮如、越前吉崎を去る ②

1481 ○このころ砂子坂に善徳寺創建 ④

越中において一向一揆始まる（田屋河原の戦い）③

○このころ五箇山赤尾村の道宗が蓮如から教化を受ける

1499 蓮如没す ②

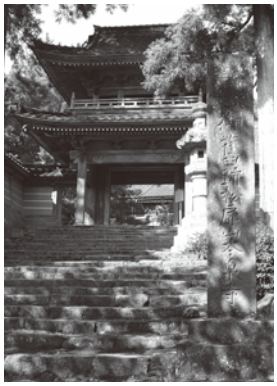
1501 赤尾道宗が信心の心得21ヶ条を記す ③

1506 越中の一揆勢、越後の長尾能景を芹谷合戦で破る ③

1571 本願寺、織田信長と戦う（石山合戦）②

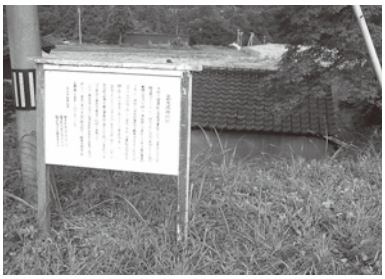
1602 教如、東本願寺を創立す（東西分派）①

吉崎御坊



二俣　本泉寺

土　山



高　窪

末　友

砂子坂

山　本

福　光

現在　100年前　200年前　300年前

2000　1900　1800　1700

平成時代　昭和時代　大正時代　明治時代　江戸時代

○瑞泉寺で聖徳太子の絵解きが始まる⑤

○このころ、説教者菅原智洞・粟津義圭が活躍する⑥

1788 京都に大火、東本願寺、御影堂・阿弥陀堂焼失②

○越中門徒、東本願寺御影堂の修復講を結成する

1823 東本願寺、御影堂・阿弥陀堂・諸殿焼失②

1858 東本願寺、御影堂・阿弥陀堂・諸殿焼失②

1864 禁門の変により東本願寺、御影堂・阿弥陀堂・諸堂・学寮、西本願寺総門・学林・総会所焼失②

1879 瑞泉寺、本堂・太子堂焼失⑤

○法宝物・太子像などの巡回が始まる⑤

1885 善徳寺に本山相続講が興される④

1895 1年間に90箇所で説教を行った記録が五箇山の行徳寺にある

○このころ説教者木村徹量・宮部円成が活躍する⑥

○善徳寺で虫干法会始まる④

○善徳寺で盤持大会始まる④

○昭和30年代、砺波各地でまだ盛んに説教が行われていた

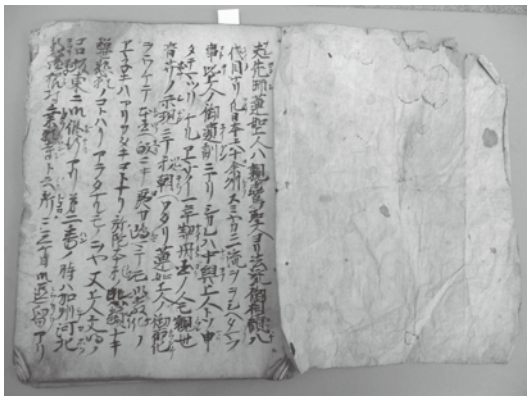
①『日本史年表』岩波書店
②『真宗年表』大谷大学編
③『富山県史年表』
④『善徳寺史』1999　城端別院善徳寺
⑤『真宗大谷派井波別院瑞泉寺史』2009　井波別院瑞泉寺
⑥　関山和夫『説教の歴史』岩波新書

三　行徳寺（ぎょうとくじ）と赤尾の道宗（どうしゅう）

行　徳　寺

越中への浄土真宗の浸透は、文明三年（一四七一）に本願寺八世蓮如が越前吉崎に坊舎を建てて、「御文（おふみ）」を中心に教化活動を活発に展開したことによる。蓮如が吉崎に滞在していたのは五年間にすぎないが、その間教化を受けた一人に五箇山の赤尾道宗（寛正三～永正十三）（一四六二～一五一六）がいる。

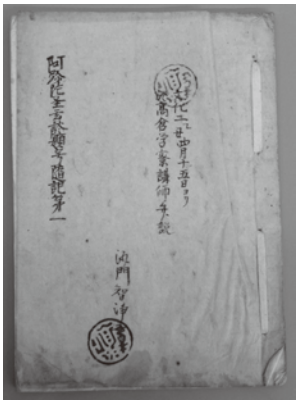
道宗は行徳寺の祖とされ、行徳寺には、道宗が蓮如から受けたとされる蓮如筆の御文集や「御文」、十字名号、六字名号など、当地方への真宗の広がりを考える上で非常に貴重な文書が多く収蔵されている。その中に説教に関する文書も多く保存され、うち11点を今回展示させていただいた。



6（延宝５年（1677）５月）「（蓮如上人）御物語」（行徳寺文書702）

南砺市西赤尾　行徳寺蔵

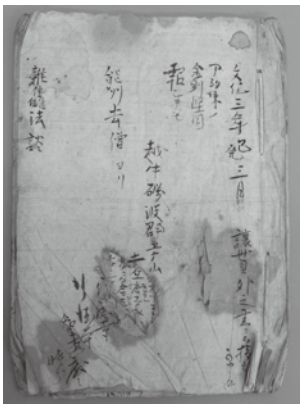
「一、越中赤尾ノ弥七入道道宗、御文ヲ申請度由申上ラレケレバ、仰ラレ候、文ハ取ヲトス事モアルベシ、タダ信ヲダニ取テ下国アラバ、ソレガ肝要タルベキ由仰ラレテ、翌年（アクルトシ）御文ヲクダサレケル」



7　文化２年（1805）４月15日「阿弥陀経玄談題号随記第一　沙門智浄」（行徳寺文書724）

南砺市西赤尾　行徳寺蔵

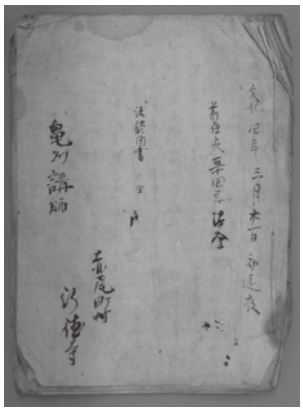
表紙に「高倉学寮講師弁説」とある。京都大谷大学の前身である高倉学寮での講演の記録である。行徳寺12世智浄が実際に京都へ行って受講したものか、だれかのものを写させてもらったものか。



8　文化３年（1806）３月「雑集法談　越中砺波郡五ヶ山赤尾町村角淵山行徳寺　智秀殿之時分」（行徳寺文書727）

南砺市西赤尾　行徳寺蔵

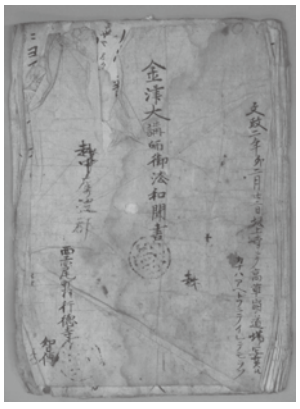
表紙に「能州去僧ヨリ譲貰外之書ニテ指替可申候」とある。朱の書き込みや点、△印などがある説教集。



9　文化４年（1807）３月21日「亀州講師法談聞書　行徳寺」（行徳寺文書730）

南砺市西赤尾　行徳寺蔵

表紙に「前住上人五十回忌法会」とある。



10　文政２年（1819）２月22日「金津大講師御法話聞書　越中砺波郡西赤尾町行徳寺　智伝」（行徳寺文書738）

南砺市西赤尾　行徳寺蔵

表紙に「文政二年卯二月廿二日坂上寺ニテ高草嶺道場写貰候、カナハアヘトフ（相答）ニテイレテモラフ」とある。

四　ある説教者の足跡 ―行徳寺文書より―

明治28年

5月30日～6月6日	砺波郡東石黒村大字桐木　教応寺　臨時説教
6月9日～15日	石川郡吉野谷村字下吉野　願慶貴寺
6月17日	中島　辻三次郎
6月18日	中島　南惣兵衛
6月20日～26日	石川郡鶴来町　良源寺　臨時説教
6月27日	石川郡河内村字中島　嶋源兵衛
6月28日～7月7日	能美郡宮内村字長滝　宗誓寺　祠堂会
7月9日～22日	砺波郡元桐木村　教応貴寺　祠堂会
8月1日～6日朝	越中城端別院
8月6日昼1座～11日朝	砺波郡東石黒村大字下吉江　教西寺　臨時説教　村元浄真
8月12日～21日朝	砺波郡広塚村大字八塚　西源貴寺　盆会説教
8月11日晩	桐木　兵蔵
8月16日晩	桐木　教応寺
8月22日～24日	砺波郡広塚村大字石田　空泉寺　祠堂会説教
9月10日夕～15日朝	城端別院茶所
9月15日夕	城端別院より依頼に付五ヶ山へ巡回　砺波郡荒山村　野村三郎平・太一郎　戸数5
9月16日昼	栃原村　松永五平　29戸
9月16日晩	下原村　横山九兵衛　18戸
9月17日昼	長崎　野村一郎
9月17日晩	大牧村　酒井市兵衛
9月18日御立寄り	北原　源六宿
9月18日昼	仙納原村　助六郎
9月18日晩	脇谷　山本久米次郎
9月19日昼	高沼村　嶋田六太郎
9月19日晩	草嶺倉　高畑市三郎
9月20日御寄	押場村　区長万吉
9月20日昼	北大豆谷村　嘉兵衛
9月20日御泊	南大豆谷村　大塚市松
9月21日昼	下百瀬川村　平田甚五郎
9月21日御立寄	中村　大野権兵衛
9月21日御泊	上百瀬川村　宮崎喜兵衛
9月22日御昼	下利賀　坂井助一
9月22日御泊	岩淵村　高藤覚三郎
9月23日御立寄	北嶋村　　悪病流行につき説教中止
9月23日御立寄	細島村　　〃
9月23日御昼	上畑村　　〃
9月23日御泊	坂上　西勝寺
9月24日御立寄	中口村　栄蔵
9月24日御昼	千足村　権兵衛
9月24日御泊	大勘場村　道場惣八
9月25日御立寄	カツラ尾村　南藤蔵
9月25日御昼	田ノ嶋村　高桑与兵衛
9月25日御泊	阿部当村　平野庄平
9月26日御昼	平村大字入谷　山本源六
9月26日晩	平村大字高草嶺　藤井伝蔵
9月27日御立寄	平村大字寿川　区長
9月27日御昼	平村大字大崩嶋　中村万吉
9月27日御泊	平村大字祖山　岡部金次郎
9月28日御昼	平村大字中江村　宮本三六
9月28日御泊	平村大字下出　高田八郎
9月29日御昼	籠渡村　高見五兵衛
9月29日御泊	大嶋村　道場　池田昇導
9月30日御昼	田向村　旧道場
9月30日・10月1日御泊　地蔵祭軍人追弔会	上平村大字猪谷　図書格平
10月2・3日	平村大字赤尾　行徳寺　同村　岩瀬八郎宿
10月5・6日	城端別院へ用向きの為め茶所ニテ泊ス
10月7・8日	上平村大字猪谷　大井弥平泊
9日より14日まで病気にて大嶋昇導氏宅に於て養生す15日より足痛も全治に運びそれより16日昼まで説教す	
10月15日朝より16日昼まで	池田昇道道場ニテ弁ジタリ
10月16日より21日まで	猪谷　総報恩講説教
10月21日夕	下出村　道場　高田八郎
10月22日	利賀村　荒井与十郎
10月23日	利賀村草嶺倉　高畑市三郎
10月24日より28日まで	大牧へ入湯のため酒井市兵衛方に滞留
10月28日29日	祖山　岡部金次郎
10月30日	荒山村　野村太一郎
10月31日	栃原村　松長五平泊　同斎藤太郎左衛門
11月2日3日	下原村　斎藤与一郎
11月13日より24日朝まで	福野町　教願寺
11月24日昼より29日朝まで	八塚　西源寺
12月3日より21日朝	福野町　教願寺
12月21日より29日まで	高堀　善證寺

明治29年

1月1日より11日朝	広塚大字八塚　西源寺
1月11日より17日朝まで	北山田村大字在房　専徳寺舎弟　藤野曠雲
1月20日より29日朝まで	種田村大字五ヶ村　法正寺　天川見正
2月11日	八塚村　役田仁十郎方にて大橋八三郎兄の追弔会
2月14日晩より23日朝まで	山野村大字飛騨屋村　円光寺　住道元利夫
2月24日より3月1日昼まで	広塚大字田屋　本山助成　永念寺方にて
3月4日5日	高瀬村大字江田　中嶋与一郎
3月8日より15日昼まで	山野村大字専勝寺村　西岸寺　住職浅井恵照
3月15日夕より22日	青嶋村大字青嶋　勧喜寺　住職堀金静念
3月23日より25日まで	広塚村大字八塚　西源貴寺
3月26日より4月2日朝まで	林村大字小杉　常徳寺　住職近藤法照
4月2日昼より10日朝まで	東山見村大字金屋岩黒村　伝教寺　住職吉江勇猛
4月10日晩より12日昼まで	山野村大字飛騨屋　円光寺　住職道元利夫
4月18日	桐木村　兵蔵
4月20日より23日まで	野尻村　徳仁寺　報恩講
5月30日より6月2日昼まで	桐木　教応寺　蓮如上人御忌説教
6月10日晩	青嶋村　柴田与右衛門方にて御講
6月11日より14日昼まで	青嶋村　勧帰寺　無縁経説教
6月14日晩より15日朝まで	野尻村　斎藤甚兵衛　御講説教
6月15日より21日	広塚村大字田屋村　永念寺住　永生令行　永代経説教
6月23日晩より25日まで	東石黒村大字下吉江　教西寺　村元浄真
7月1日より31日まで	桐木村　教応貴寺　祠堂経説教
8月7日晩	三ツ井林蔵御講
8月8日晩	水木仁十郎御講
8月10日晩	水木利吉御講
8月12日晩	丹羽佐吉御講
8月地蔵祭晩	堀池万蔵
8月15日より20日まで	桐木　教応貴寺　盆会説教
9月1日	南蟹田村大字蔵ヶ原村　安田清蔵　中田次郎八
9月2日	南蟹田村大字湯谷　長谷川久四郎
9月24日	大牧　酒井市兵衛
9月25日26日昼まで	栃原　松三郎
9月26日	下原　小嶋与一郎
9月27日	荒山　野村太平
9月28日	栃原　斎藤太郎右衛門
9月29日	長崎　岡部平九郎
9月30日	下原　五平

15　明治28年（1895）5月「説教不忘記」
（行徳寺文書796）
南砺市西赤尾　行徳寺蔵
明治28年5月から翌年9月まで、109箇所で巡回説教をした話の内容と場所の記録。行徳寺16世鳳静の代。

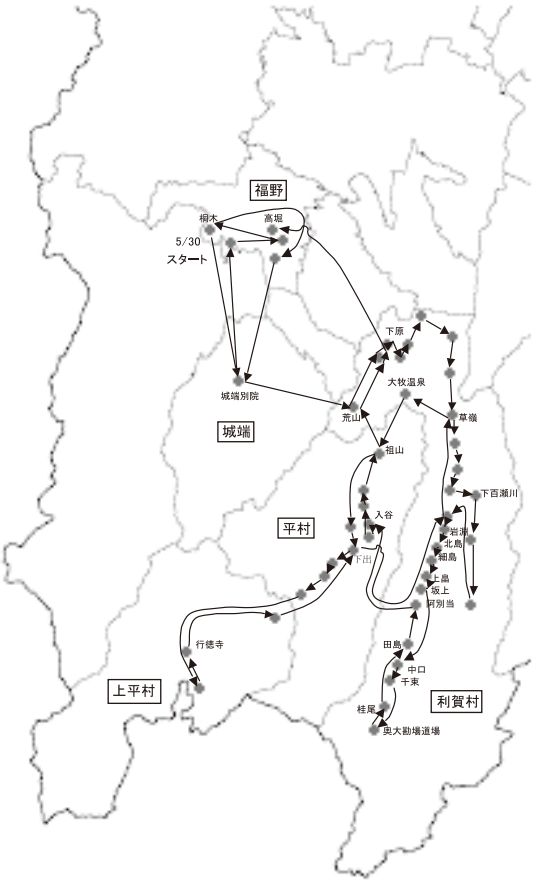
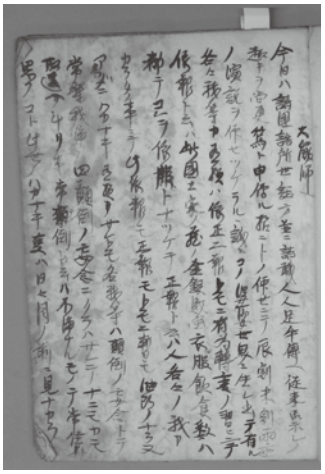
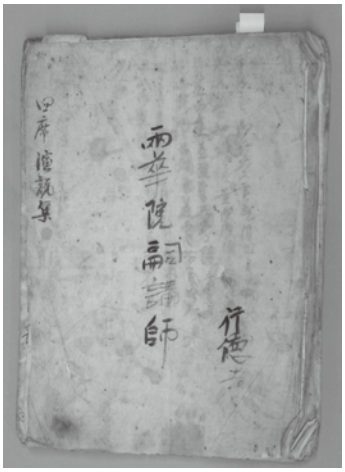


図6　明治28年　布教ルート地図

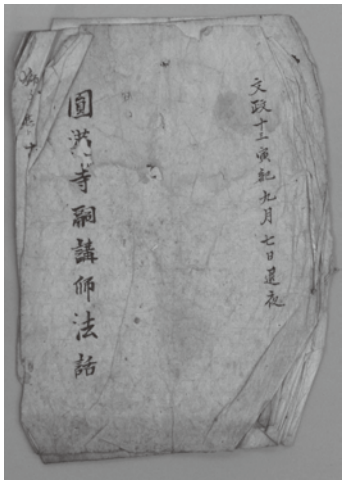
五　行徳寺文書と説教





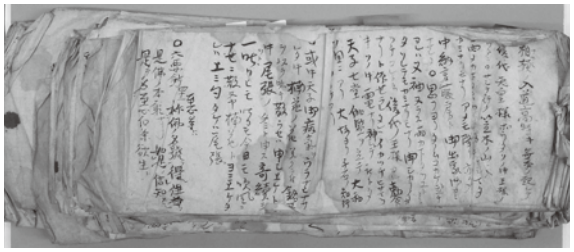
11　文政12年(1829)9月26日
「両華院嗣四席演説集　行徳寺」（行徳寺文書749）　南砺市西赤尾　行徳寺蔵

総会所において、諸国詰所世話方や諸職人・人足・手伝いなどの人々に対して行われた説教の内容を記録したもの。東本願寺は文政６年に焼失しているが、その再建のために全国各地から門信徒の人々が京都へ集まってきていたのであろう。（全文は45頁に採録）



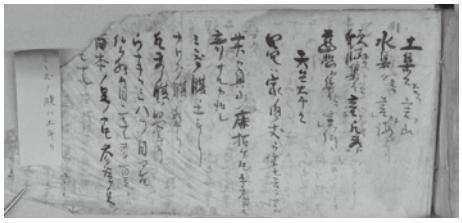
12　文政13年（1830）９月７日
「円満寺嗣講師法話」（行徳寺文書752）
南砺市西赤尾　行徳寺蔵

円満寺の講師が井波御坊で演説したものを高岡の法慜が筆記したもの。

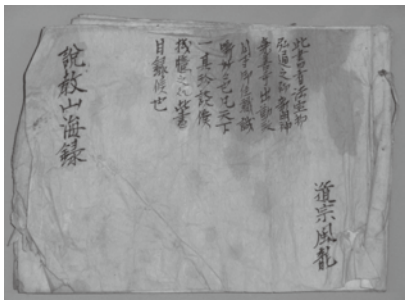


13　（嘉永3年(1850)）「説教本」（行徳寺文書768）
南砺市西赤尾　行徳寺蔵

むつかしい真宗の教義から身近な嫁と姑の話まで、さまざまな話題が書かれている。

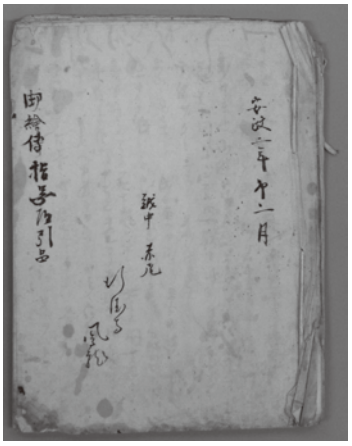


ミミズノ腹ハ土バカリ
カワズノ腹ハ水バカリ
凡夫ノ腹ハ愚痴バカリ
ウナギニハ、八ツノ目アレドモ　仏ヲ拝ム目ハ一モナシ
マタ百足ニハ百本ノ足アレドモ　参詣ノ足ハ一モナシ



16（年未詳）「説教山海録　道宗風龍」
（行徳寺文書846）
南砺市西赤尾　行徳寺蔵

表紙「此書者法宝物弘通之砌、新明神乗善寺出勤致、同寺御住職誠嘶妙々也、凡天下一其珍談僕機憶之処、此書目録候也」



14　安政２年（1855）２月「御絵伝指図道引品
行徳寺鳳龍」（行徳寺文書776）
南砺市西赤尾　行徳寺蔵

親鸞聖人御絵伝を絵解きするときの手引き書。

17（年未詳）（法話）（行徳寺文書886）　南砺市西赤尾　行徳寺蔵

六　砺波地方の常説教場（じょうせつきょうじょう）

説教者による説教は、現在では城端善徳寺だけで行われているが、かつての砺波地方の各町では、毎日必ず行われていた。そこでは、十日ごとに次々と説教者が入れ替わりに訪れていた。説教者は一つの場での説教が終わると次の町の説教場へと宿を移し、また新しい聴衆を前に説教を語った。熱心な信者は次の場へもついていって、二度でも三度でもその説教者の語る説教に耳を傾けたものだという。

そうした説教者は地元の僧侶たちだけではなかった。能登・加賀・福井などの近県をはじめ、愛知・滋賀・岐阜などからも多くの説教者が訪れた。中でも能登の上野慶宗、範浄文雄（のりきよぶんゆう）、福井の山本龍音などの名説教ぶりは今も古老たちの語り草になっている。彼らの語る言葉は節（抑揚）をつけた音楽性をもつ「節談説教（ふしだんせっきょう）」とよばれる。その独特の節回しは、「能登節」「加賀節」という地域名で呼ばれたり、大成させた個人の名を取り、亀田千巌の「亀田節」、範浄文雄の「範浄節」などとも称された。

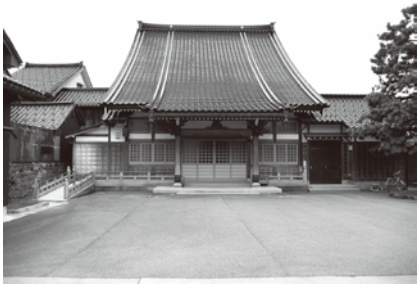
説教者の修業の方法は「随行（ずいこう）」と呼ばれる。若いころから師である説教者に常に付き従い、師と寝食を共にすることによって、説教はもとより、日常の立ち居ふるまいから生活規範まできびしくしつけられ、一人前の説教者として育っていったのである。

図７　砺波地方の常説教場

戸出　光林寺

高岡　光楽寺

石動　称名寺


津沢　正安寺

福野　本福寺

福光　西別院

福光　知源寺

福光　願全寺

七　出町の常説教場　真寿寺（しんじゅじ）

当寺は、慶安二年（一六四九）の出町開町と同時に創設され、寺伝では出町（当時杉木新）を立てた二郎兵衛が、町のまんなかに寺域を定めたという。出町は砺波平野の中央部に位置し交通の要衝として便利なことから、当寺は、いつでも真宗の説教を聞くことができる常説教場として、出町地域および周辺村部の人々の信仰によって支えられてきた。

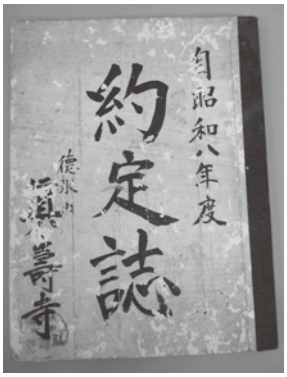
なお、当寺は出町の都市開発事業により、昭和五十五年に永福町の現在地に移転した。

27　出町の常設教場　真寿寺（移転前）

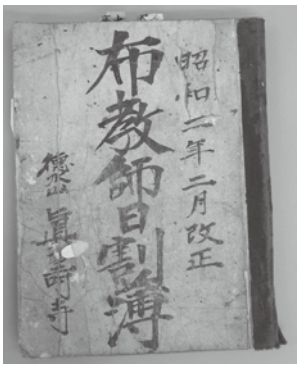
説教のようす（昭和40年頃）

31　昭和31年～昭和40年
御芳名

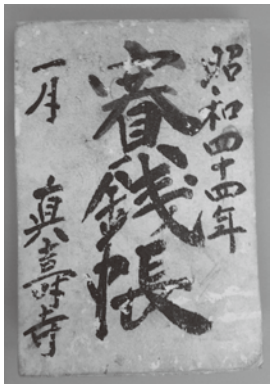
30　昭和18年度
約定帳



29　自昭和８年度
約定誌



28　昭和２年２月改正
布教師日割簿



32　昭和44年１月
賽銭帳

説教者の記録　砺波市永福町　真寿寺蔵

真寿寺には昭和２年から平成22年まで、当寺を訪れた説教者の記録が保存されている。かつては、砺波周辺だけでなく、能登や加賀からの説教者が多く訪れていたことがわかる貴重な資料である。

（個々の人名は52頁以降に採録）

八　善光寺如来をかついでまわった矢木の伝四郎

55　善光寺式三尊仏
砺波市矢木　飛地弘旧蔵　砺波市太田　専念寺蔵

１つの光背に三尊（阿弥陀如来、観音菩薩、勢至菩薩）が並んでおり、信濃の善光寺三尊像を模して作られたものである。

善光寺如来の絵解き　矢木の伝四郎

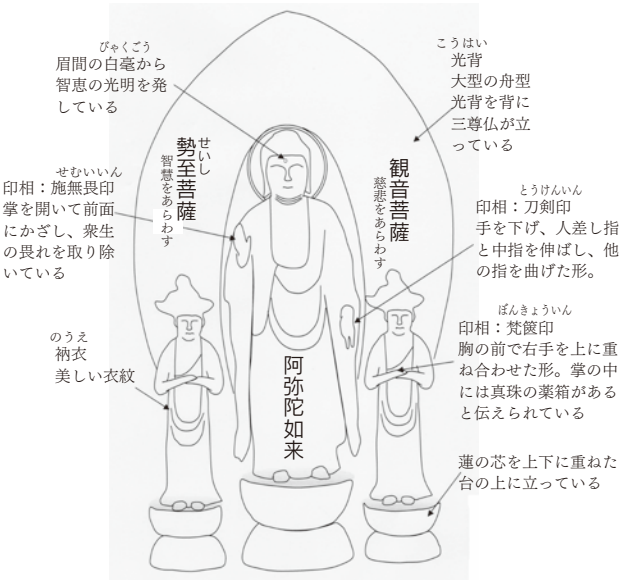
文政年間頃（十九世紀初期）、砺波郡矢木村（現砺波市矢木）の小百姓の長男に生まれた伝四郎は、当時農家の長男としては当然であった百姓仕事をきらい、どこからか善光寺三尊仏と善光寺縁起三幅の絵巻を手に入れ、絵解きしながら付近の村々をまわっていた。

娯楽の少なかった当時の農村では、人気者の田舎役者として、拍手喝采で各村から迎えられたという。

善光寺縁起讃文

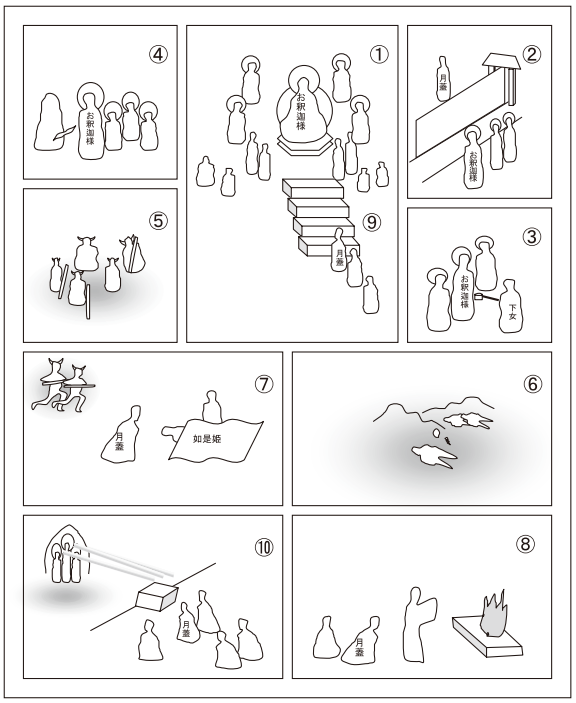
初段　釈尊六十歳にして天竺毘舎離国大林精舎におひ（て）、御説法の図
二段　釈尊、月蓋を済度に行給へど、長（者）米壱粒も上ざるの図
三段　長者の下女、如来御帰りの時、御教化をうけ、御礼に白水を供養し奉る図
四段　如来、右の白水を精舎にもち帰、諸の菩薩・天人に施し給うに水足るほどなし、是によりて大凡の卒都婆に、女の都卒天に（の）内院に生ることをしるし、白水を石にかけ給ふ図
五段　天竺の諸けんどんに付、五種の疫人出て諸人も（を）なやます図
六段　五種の疫病、諸人命をはりてかくのごとし、徒し野に捨たる五（九）相国（の）図
七段　長者娘如是姫を五種の疫神、熱病をうけさするの図、疫神陀天台軍提という
八段　長者の娘難病に付、天神地祇をいのる図
九段　長者娘の病気を釈尊へ願ひに、さし上る図
十段　長者、釈（尊）の仰せにしたがひ、わが家に帰り、西方の弥陀を念じけるに、西の楼門より三尊来迎し給、このとき疫神皆にげさる図
十一段　長者の願ひにより、目連尊者を龍宮へ遣し、閻浮檀金を所望の図
十二段　閻浮檀金を三千七百両を以て、釈迦・弥陀二尊の光明にて、三尊の新佛出現の図
十三段　長者、如来を生替り、五百歳の間、安置し奉る図
十四段　如来、百済国の聖明王の前生をわすれ給ハず、金殿に来り給ふに、たちまち宿善をおこし拝し奉る図
十五段　聖明王七宝の金堂を立、二時の勤行おこたりなく、後に至るまで千百十二年の間安置し給ふ図
十六段　如来、推明王御代に及び、日本国信濃ノ国善光が前生をしたい給ひ和朝に来り給て、然るにきさき如来の別れをかなしみ給ふ図
十七段　人皇三十代欽明天皇十三年申十月十三日、難波の浦へ御着船の図
十八段　内裏は大和国山部斯島の金ざしの宮へ如来をうつし奉る図
十九段　守屋悪行によりて、やかたをかまへ、如来をたたらにかけて焼奉る図
二十段　如来を焼くたくといへども、そんじ給はず、仍て難波の堀江にしづみ奉る図
この時青色の鬼あらはれ、口より火をふき出し、御所を焼奉るとなり
二十一段　太子十六歳にして、河内の国、しき島の郡流川の御所におひて軍勢を集め守屋を誅し給ふの図
二十二段　太子、四天王并に諸の神祇に御加勢を願ひ給ひ、稲村城におひて守屋を打止め給ふ図
二十三段　善光、難波の堀江を通りけるに、過去の前生をたづねて、如来善光をおひ奉る図
二十四段　善光、如来をわが家に御とも申と、臼を台にして安ちし奉図
ともし火の油なきなし、光明のひかりにててらし給ふとなり
二十五段　善光　倅よし助死す、七日すぎて蘇生の図
二十六段　善助、冥土に趣くといへども、如来善助をむかひ帰りひたまふに、皇極天皇、悪所に趣きけるに、如来の願ひによりこの時蘇生し給ふ図
二十七段　如来の御おんにこおもり、皇極皇地ごくよりゆみず帰に、したもによりて善助・善光、皇極皇と御たい面におよばる図
二十八段　如来の御おんこをもり、皇極皇と善助共に西度によりて、天師より御こんりゆしたもふ善光寺図

善光寺式三尊仏



善光寺縁起 (1)

56　善光寺縁起　全３幅の内第１幅
砺波市矢木　飛地弘旧蔵　砺波市太田　専念寺蔵



第一幅

①お釈迦様が天竺の毘舎離国に住んでいた六〇歳の頃、大林精舎でよく説法をしていました。

②天竺に住む、金持ちではあるが、貪欲で施す心の無い長者、月蓋。お釈迦様は彼を教え導く為、自ら足を運び、訪ねて来ましたが、月蓋は、「一度施せば、また来るだろうから会うのをやめておこう」と門まで来て、また家の中に戻ってしまいました。

③その帰り道、長者の屋敷の下女がお釈迦様に会い、ご教授を受けました。そのお礼として下女は米の研ぎ汁（白水）をお釈迦様に差し上げました。（米の研ぎ汁も栄養があり、貴重でした）

④お釈迦様はその白水を精舎に持ち帰り、菩薩や修行僧たちに分けました。何人に分けてもその白水は無くならず、すべての者に行き渡りました。その行いに感銘を受けたお釈迦様は、その下女が来世は天上界の都卒天に生れることを約束しました。

⑤ある年、国に疫病が流行しました。（疫病神が鬼の姿で表されています）

⑥疫病は国中の人々の命をうばい、その屍は野に捨てられ、まるで九相図のようです。（五相国図ではなく九相図の間違いか？九相図とは屍が腐乱して白骨化していく様子を描いた仏教美術画をいう）

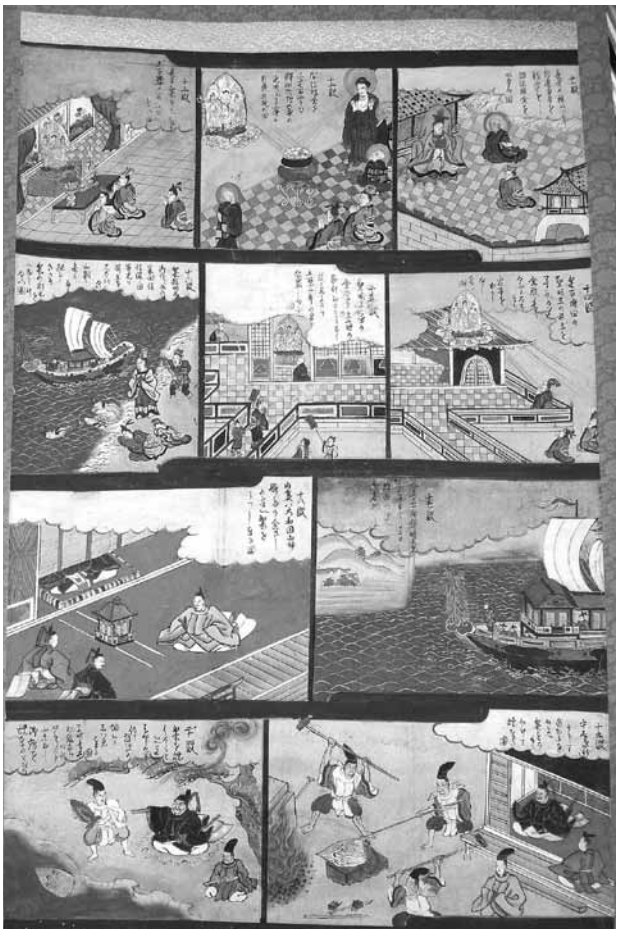
⑦長者には如是姫という愛娘がいましたが、流行病の熱病にかかってしまいました。（如是姫の枕元には疫病神の鬼が姫を襲う姿が描かれています）

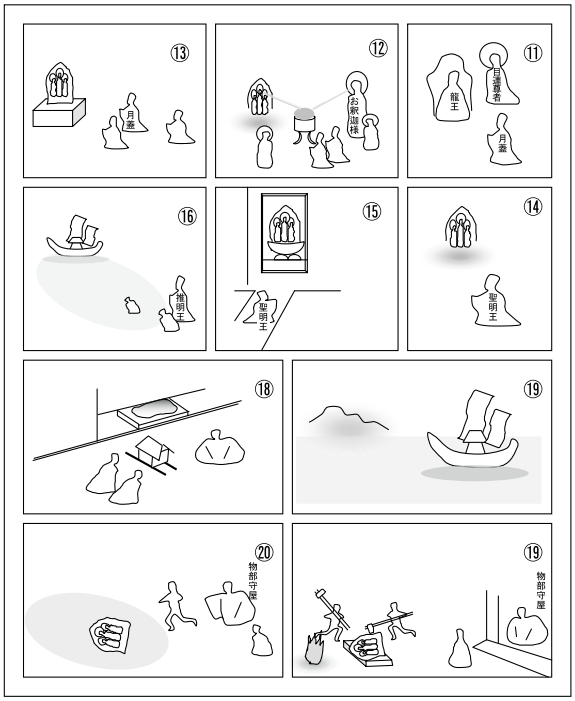
⑧如是姫は国中の名医に診てもらい、更に祈祷もしてもらいましたが、一向に良くなりませんでした。（これ以上はお釈迦様におすがりし、教えを乞うしかないということになりました）

⑨長者は娘の病気を治したい一心でお釈迦様に会いに行きました。（娘一人の回復を願う心から、すべての民の病を取り去る願いへと改心した長者にお釈迦様は、病回復の方法を授けました）

⑩長者は家に帰り、お釈迦様の言われる通り、西方に向かって一心に念じました。すると、光とともに阿弥陀如来様、観音菩薩様、勢至菩薩様の三尊が現れました。すると疫病神は皆逃げ去りました。（国中の流行病はおさまり、如是姫も無事回復しました）

善光寺縁起 (2)





56　善光寺縁起　第２幅

第二幅

⑪如来に救われた長者は、三尊の御姿をこの世に写したいと願い出、その願いを受けてお釈迦様は龍宮にある閻浮檀金（えんぶだごん）という最高の金をもらうため目連尊者（もくれんそんじゃ）を遣わしました。（閻浮檀金は龍王にとっても、大切な宝でしたが、お釈迦様に献上しました）

⑫持ち帰った閻浮檀金をお供えし、願うと三尊が現れました。お釈迦様と阿弥陀如来様の光明が閻浮檀金を照らすと、そこから三尊を写した御姿が現れました。（これが現在、善光寺にある絶対秘仏の三尊像です）

⑬これより三尊像は代々長者の家に安置され、500年の間、天竺で多くの人々をお救いしました。

⑭時は流れ、朝鮮半島の百済国の聖明王は自分の前生が月蓋であったことを忘れ、悪政を行い、民を苦しませていました。如来は天竺から百済へ参り、前生での縁について話すと、聖明王はすぐに改心して善行を行うようになりました。

⑮聖明王は金堂を建て、一一一二年の間三尊像を安置しました。

⑯推明王の御代に如来は日本国に縁を慕って渡ることを伝え、百済中の人々は別れを惜しみながら如来を見送りました。

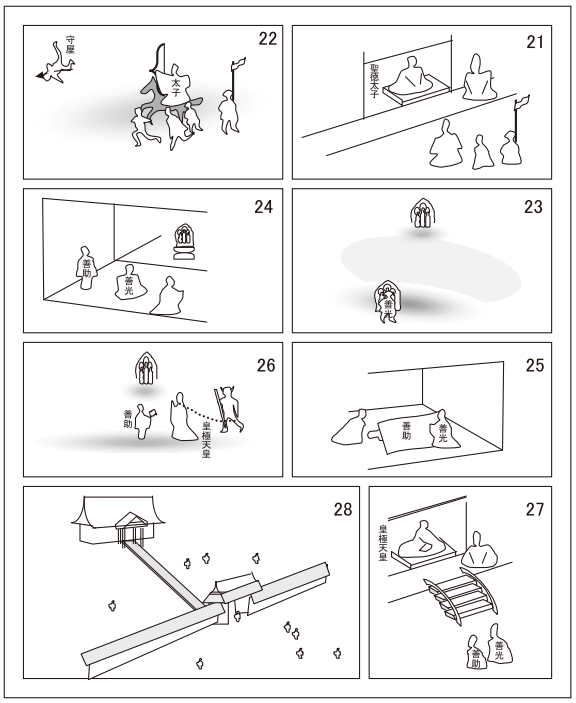
⑰如来を乗せた船は、欽明天皇一三年（五五二）十月十三日に難波の浦に到着しました。

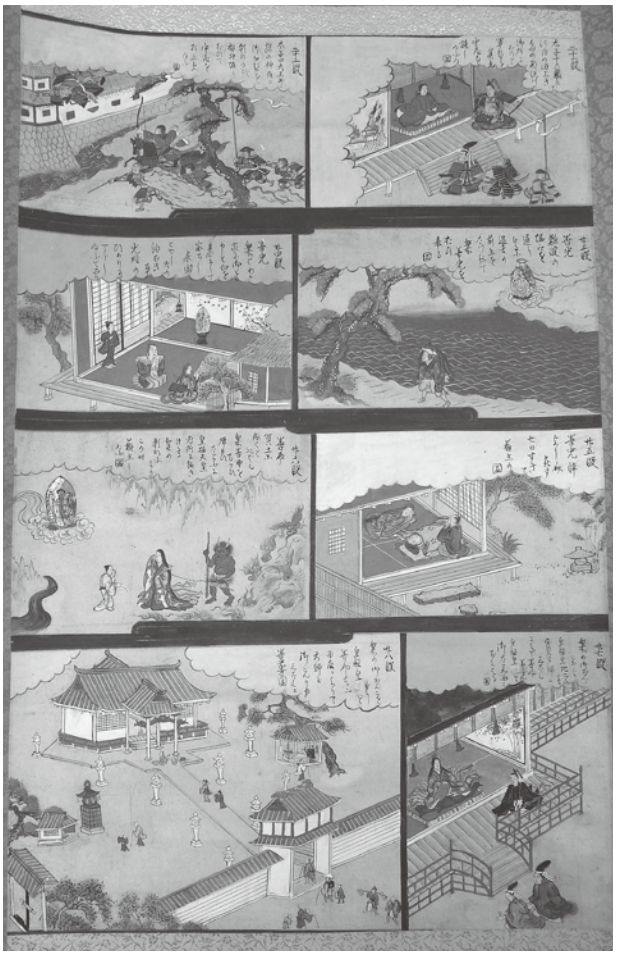
⑱宮中では異国の神を受け入れるか否か意見が分れましたが、天皇は受け入れを決め、斯島（しきしま）の金刺宮に如来を祀ることになりました。（これが日本の仏教の始まりです）

⑲国中に疫病が流行り、多くの民が死んだ原因を「異国の神を祀った崇り」とした物部守屋は、天皇のお許しを得た後、寺に火をつけ、如来像を焼くよう皆に命じました。

⑳不思議なことに、如来像は焼いても、潰そうとしても、まったく損じることがありませんでした。結局、如来像は難波の堀江に沈められました。（ここでは、天皇が崩御されたのは仏罰だとして青い鬼が御所を焼いたと書かれています）

善光寺縁起 (3)





56　善光寺縁起　第３幅

第三幅

㉑当時皇太子であった聖徳太子（一六歳）は、仏教を守るため、軍を集めて反対勢力であった物部軍を攻めようと決意しました。

㉒太子は、仏教を守る戦の神である四天王や他の神々に、仏教を守るための戦いを導いてくれるよう頼みました。敵側の大将である物部守屋を倒した後、仏教は広められました。

㉓信濃の国の本田善光という人が、難波の堀江を通りかかった時に、水中より如来像が現れました。如来は善光が前々生で天竺の月蓋、前生で百済の聖明王であったこと、如来との深い縁などを話しました。善光は如来を背中に乗せて、信濃の家に帰りました。

㉔家に戻った善光は如来像をとりあえず臼を台にして安置しました。（善光はとても貧しく、灯す油もありませんでしたが、如来が光明を放たれると、油のない灯心に火が灯されました）

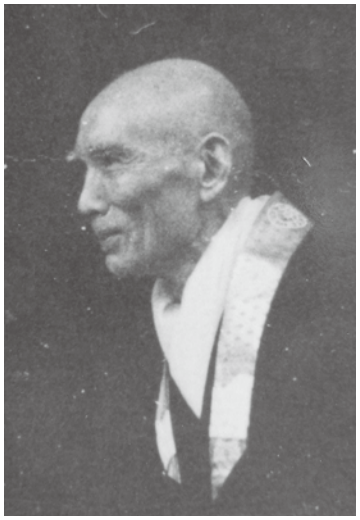
㉕ある日、善光の息子善助が病にかかり、死んでしまいました。しかし如来のお力により7日後に生き返りました。（善光は如来に「息子が死んでしまったら、これから如来様をお世話する者がおりません、どうか息子を生き返らせて下さい」と頼みました。世話をする者がいなくなるのは大変ということで、如来は善助を地獄から呼び戻すことにしました。善助は「親より先に死んだ罪」で地獄に落ちていました）

㉖地獄に着いた如来は善助を見つけ、迎えに来たこと告げました。善助は喜び、戻ろうとした時、高貴な女性が鬼につながれ泣いているので、話を聞くと、その方は皇極天皇でした。「あなたのような高貴な方が地獄では御辛いでしょう。如来様、私の代わりにこの方をお戻し下さい」と善助は言いました。善助の行いに感心した如来は二人を連れて戻りました。

㉗如来の御恩を被り地獄より戻った皇極天皇は、善助と善光を呼び、対面しました。（是非お礼をしたいとの天皇からの申し出に善光は、如来を安置する寺を建立したいとお応えしました）

㉘皇極天皇と善光は、如来を安置するための寺を建立しました。これが長野にある善光寺の由来です。（その後鎌倉時代に如来像を完全に写した前立本尊が造られ、この如来像は絶対秘仏となりました。七年に一度御開帳される如来像は、鎌倉時代に模造された前立本尊です）

九　鹿島祥雲寺の名説教者　土屋豊成（つちやほうじょう）



土屋豊成

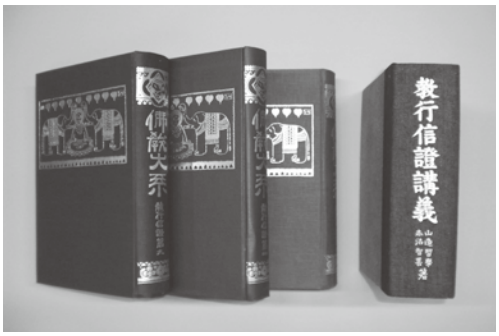
「鹿島様（かのしまさま）」と呼ばれて　人々の崇敬を集めた名説教者土屋豊成

明治十六年（一八八三）、砺波郡名畑村（現小矢部市名畑）善住寺の次男として生まれ、小さいころ鹿島祥雲寺へ養子として入る。真宗大学（現大谷大学）で勉学に励み、明治四十三年卒業。後に地元鹿島へ帰り、祥雲寺の住職として近郷近在へ説教者として出かけた。難解な中にも仏の慈悲、安心（あんじん）を説くその説教ぶりは、確固たる信仰心に裏付けられた謹厳実直そのものであった。人々から「鹿島様（かのしまさま）」と呼ばれて深い崇敬を集め、名説教者として名をはせた。

昭和三十七年（一九六二）三月六日逝去、享年八〇歳。

35　祥雲寺　　砺波市鹿島

36　自坊での説教のようす　昭和36年

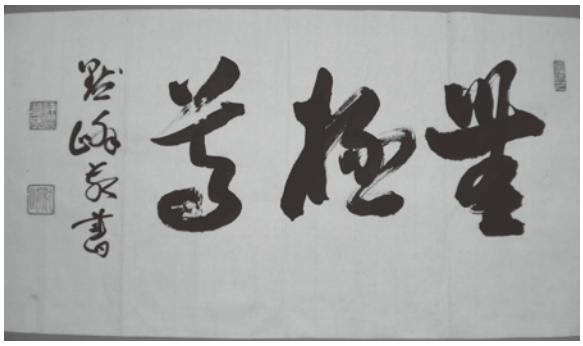


41　豊成の所蔵書籍　　砺波市鹿島　祥雲寺蔵

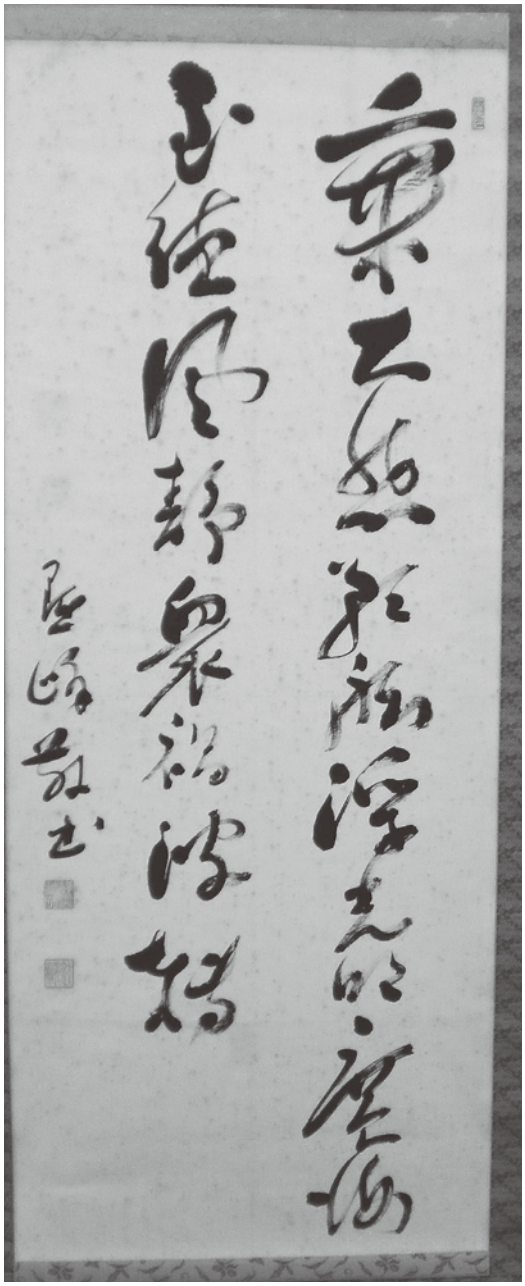
説教に廻る以外は、家では書斎にこもり、常に勉学に励んでいたという。

42　説教テープ　　砺波市鹿島　祥雲寺蔵

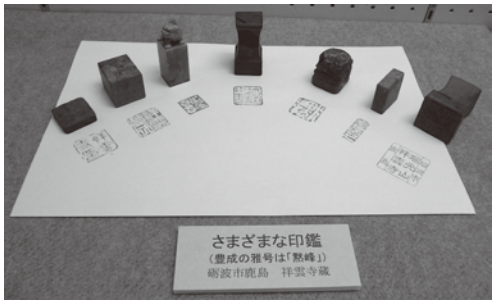
昭和35・36年ごろに、信者によって収録された説教テープ。信者たちの要望により、豊成死後も数年間はこのテープによって説教の場がもたれていたという。



40　「無極尊　黙峰敬書」　砺波市鹿島　祥雲寺蔵



39　「乗大悲願船云々」
砺波市鹿島　祥雲寺蔵

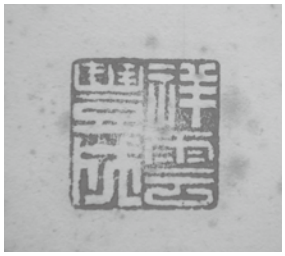


38　さまざまな印鑑（豊成の雅号は「黙峰」）
砺波市鹿島　祥雲寺蔵

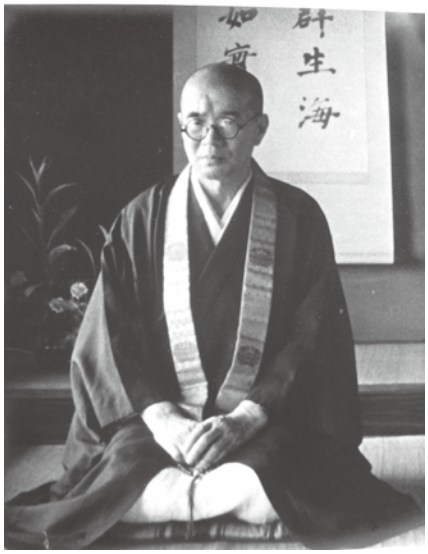
崇徳興仁
乗大悲願船浮光明廣海
至徳風静衆禍波転
黙峰敬書
祥雲
豊成
峰然

「大悲ノ願船ニ乗シテ
光明ノ広海ニ浮カヒヌレハ
至徳ノ風、静カニ衆禍ノ波転ス」
（親鸞『教行信証』）

「祥雲豊成」



十　高宮善念寺の名説教者　寶性實成（ほっしょうじつじょう）



寶性實成

特派布教師として　全国各地を布教に歩いた寶性實成

明治二十一年（一八八八）、高宮（現南砺市高宮）善念寺で生まれる。十五歳で三清（さんきょ）了泉寺の武種霊天に説教を習い、池原雅寿から宗学を学んだ。幅の広い話題と、情熱のこもった流暢な話しぶりは常に人々を感動させ、さらに本山からの特派布教師となり、全国各地を巡教した。

また、漢詩や絵画を好み、玉田（ぎょくでん）と号して多くの作品を残している。

昭和三十一年（一九五六）十二月三十日逝去、享年六十九歳。師の遺風を敬慕する人々により、昭和三十三年に善念寺境内に石碑が建立された。

43　寶性實成の石碑　昭和33年建立

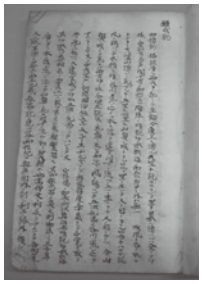
寶性實成師碑陰ノ記

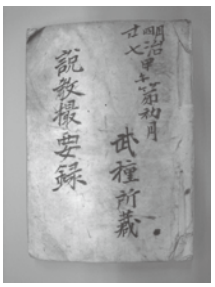
師ハ富山県福光町高宮真宗大谷派善念寺ノ住職ニテ、資性聰慧、十五歳ニシテ武種靈天師ニ就キ説教ヲ習ヒ、次デ講師池原雅寿師ヨリ宗学ヲ承リテ、奮励研修シ、兼テ漢詩ヲ好ミ玉田ト号ス、尓来自信教人、信ノ熱誠ト談博流暢ノ辯ヲ以テ講説演述ノ妙ヲ究メ、能ク聴衆ヲ感動随喜セシメ、名声遠近ニ高シ

其間、法侶ニ推サレテ宗議会議員ニ挙ゲラレ、又屢々山命ヲ受ケテ特派布教師ト為リ、弘ク全国各地ニ巡教ス、又本山惣会所教導職ニ任ジ、又法主ニ随従シテ、親教複演ノ重責ニ当ル等、専ラ正意安心ノ布教宣昭ニ努ムルコト五十有余年ニ及ブ、昭和三十一年、夏病ヲ獲テ帰養加療セシモ其効ナク、遂ニ同年十二月三十日ヲ以テ往生ス、本山生前ノ功労ヲ賞シテ僧正ノ位ニ列シ、法名ヲ宣法院釋実成ト賜フ、行年六十九歳、一族教界皆痛惜ス、師ノ父知成翁法徳アリ、嗣併成君余業学校教育ニ従事ス、今ヤ師ノ遺風ヲ欽仰スル信徒有志等相謀リテ碑ヲ建テントシ、題ヲ講師加藤智学師ニ請ヒ、記ヲ余ニ需ム、仍テ其ノ概要ヲ叙ス

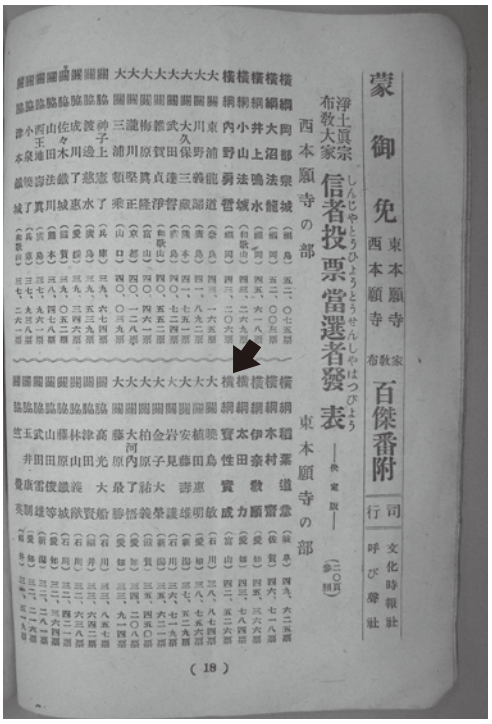
昭和三十三年六月

宮地義亮　撰
黒川上雄　書

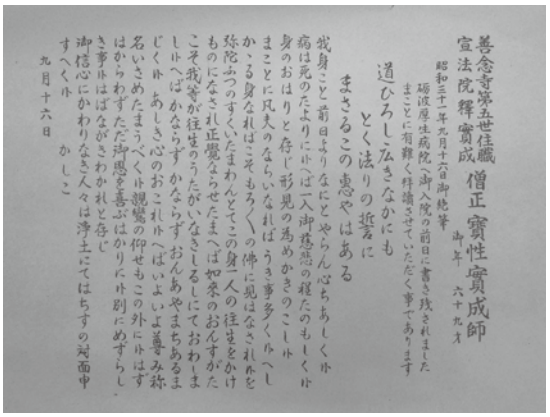




49　「説教撮要録」　南砺市高宮　善念寺蔵
明治27年に三清（現南砺市）了泉寺の武種が書き記したものを、弟子である實成が譲り受けたものか。



東の横綱に寶性實成入る
昭和25年文化時報社の行った真宗信者の人気投票



45　入院直前に書き残された文章
南砺市高宮　善念寺蔵

44　實成没後一周忌に配られた扇子
南砺市高宮　善念寺蔵

51　實成手書きの講義録
南砺市高宮　善念寺蔵

「二河白道（にがびゃくどう）」の説教本　南砺市高宮　善念寺蔵
52　宮部師之口述
53　服部三智麿口述
54　是山惠覺述

50　實成の蔵書　南砺市高宮　善念寺蔵

宮部円成（1854～1934）
明治～大正期に活躍した真宗大谷派の大説教者。豊かな声量と爽快な弁舌で全国にその名を知られた。真宗大学寮（現大谷大学）卒業後、欧米に遊学、帰朝後は東本願寺特命布教師として全国各地へ布教に出向いた。

服部三智麿(1870～1944)
明治・大正・昭和の三代にわたって活躍した真宗大谷派の説教者。明治44年には高岡へ来て、当時全盛期であった巡業中の浪曲師桃中軒雲右衛門の客を全部奪ってしまったというエピソードは有名である。

是山惠覺(1857～1931)
浄土真宗本願寺派で学問の最高位とされる「勧学」に就任した学僧。

47-3　親鸞聖人（部分）　南砺市高宮　善念寺蔵

「其五劫思惟の本願と云ふも兆載永劫
の修行と云ふも唯一切衆生をあながちに
助け給はんが為の方便に阿弥陀如来
御身労ありて南無阿弥陀仏と云ふ本願
を立まし〳〵等
昭和三十羊年十月敬書（印）　」

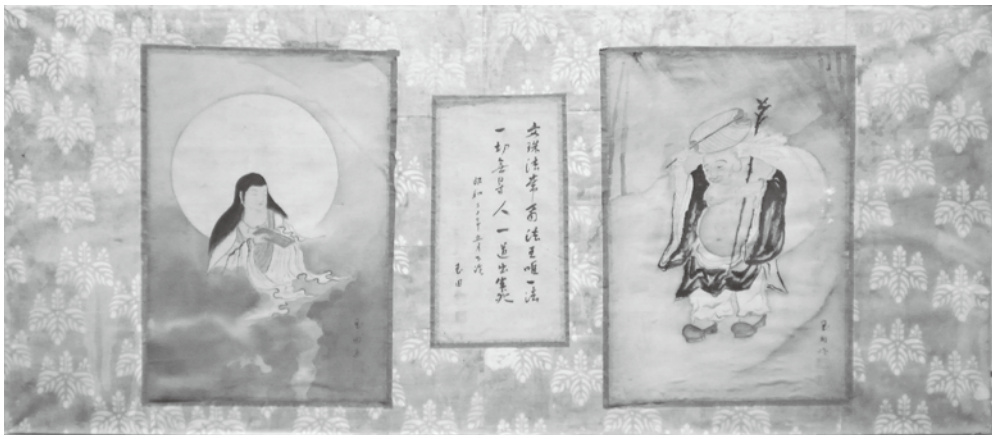
47-1　法蔵菩薩　南砺市高宮　善念寺蔵

47-4　観音菩薩（部分）　南砺市高宮　善念寺蔵

（47－1　部分）

「文殊法常爾法王唯一法
一切無碍人一道出生死
昭和二十年五月下浣
玉田（印）（印）　」

（大正十三年に行われた「御遠忌法話」全文は47頁に採録）



46　昭和20年　實成58歳の作品　南砺市高宮　善念寺蔵

十一　聖徳太子の絵解き僧　吉澤孝譽（こうよう）

吉澤孝譽

感謝状
吉澤孝誉殿
あなたは五十年の長きに亘り聖徳太子御巡回に供奉せられ太子の御遺徳を宣揚し佛法弘通に専念し以て別院の護持発展に寄与せられし事誠に甚大なるのがありました仍て記念法衣を贈呈し茲に深甚なる感謝の意を表します
昭和五十年七月二十五日
井波別院瑞泉寺住職大谷暢道

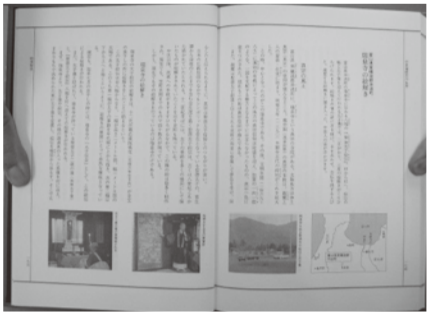
88　感謝状　昭和50年7月25日　南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵

50年間聖徳太子の巡回に供奉し、その遺徳宣揚に寄与したことを感謝して、井波別院瑞泉寺住職から吉澤孝譽に与えられたもの

聖徳太子とともに人生を歩んだ「太子様の絵解（えと）き僧」吉澤孝譽

明治三十七年（一九〇四）八月二十四日、井波町真教寺の次男として生まれ、大正四（一九一五）、十二歳で大谷支院二代吉澤探宗の養子となる。十七歳で得度、井波瑞泉寺で修業を重ねる。二十歳の時から、「太子様のお供をさせていただく生活が始まった」と述懐する。瑞泉寺太子伝会をはじめとし、砺波地方の近郷在々や加賀・能登から白山下、平・上平・飛騨方面までを広く歩き、亡くなる直前までの六十数年間を太子様の絵解きの名僧侶として活躍した。

平成四年（一九九二）十月十六日死去、享年八十九歳。



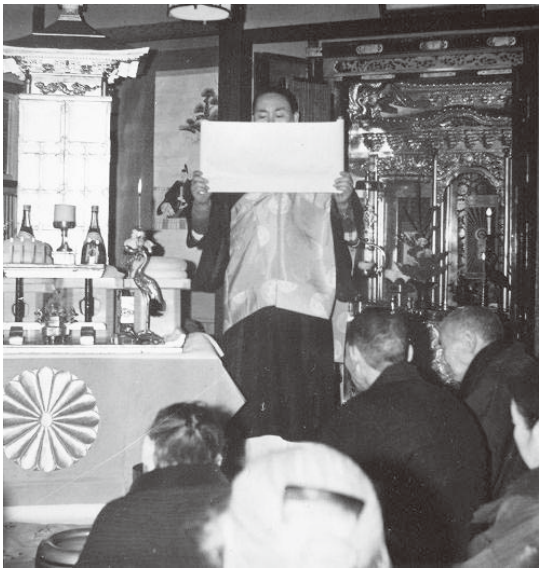
平凡社の『【大系】日本　歴史と芸能』の中に採録された吉澤孝譽の太子様絵解き

（「瑞泉寺の絵解き　富山県東砺波郡井波町」『【大系】日本　歴史と芸能第六巻　中世遍歴民の世界』1990　平凡社）

87　直綴・五条・輪袈裟　南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵

85　太子絵伝絵解きのテープ　昭和63年7月収録　南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵
86　小沢昭一の「新日本の放浪芸」DVD　南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵
89　『絵解き―資料と研究―』三弥井書店刊　富山市　富山県立図書館蔵

砺波市荒高屋での若衆報恩講で太子絵伝の絵解きをする孝譽　昭和52年



83　聖徳太子縁起を拝読する孝譽

写本「聖徳太子伝記」

南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵

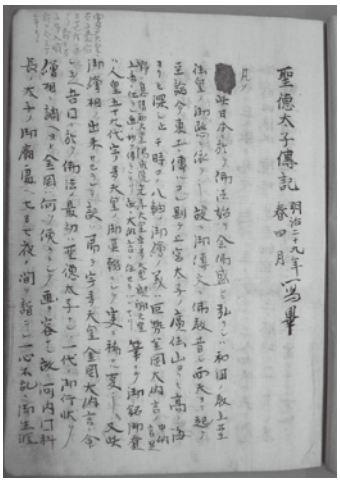
瑞泉寺に伝わる「聖徳太子絵伝」八幅の絵解き用台本である。この写本は、吉澤孝譽が、叔父である吉澤香雲から譲り受けたものであるといい、香雲（明治十八年～同三十九年）が明治二十九年四月に書写したものである。孝譽によれば、このような台本は、明治期までは転写の形で師弟相承されたという。

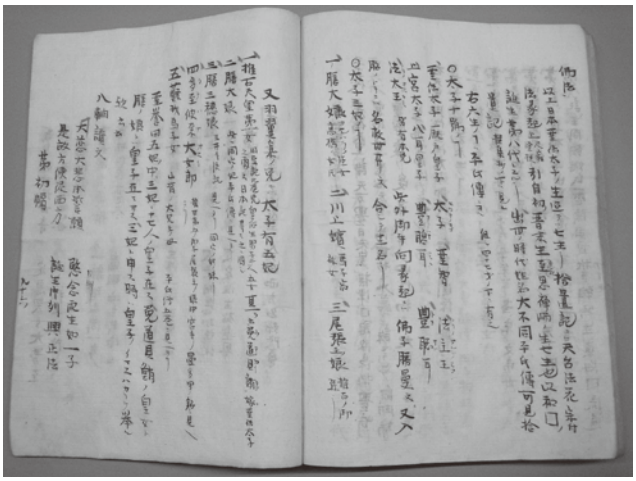
太子様巡回の起こり

（瑞泉寺は）明治十二年香部屋から出火し、本堂と太子堂が全焼した。そのため、翌年本堂再建が企画されたが、折しも不況で再建費の捻出に苦慮し、今まで門外不出だった南無仏二歳像及び「太子絵伝」の地方巡回をすることとなり、門徒たちの報謝を仰いだのが、今日農閑期に行われている〝お太子様御巡回〟の起こりである。吉澤孝譽師がこの〝御巡回〟に初めて随行されたのは、大正十四年（一九二五）八月、岐阜県白川荻町の明善寺への旅だったという。

吉澤孝譽師が絵解きに携わってから既に六十有余年、所蔵の絵解き台本『聖徳太子傳記』の表紙の痛みが激しいことは、これが先代香雲師と二代にわたって、長い歳月大事に使われてきた何よりの証しなのである。

（『絵解き―資料と研究―』三弥井書店　平成元年刊　93頁より）





84　写本「聖徳太子伝記」　南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵

十二　能登の節談説教

70　能登の海　石川県羽咋郡富来町　松山宗恵氏提供

64　小沢昭一が訪ねた能登の節談説教CD
砺波市中野　小西竹文氏蔵

能登の節談説教

「節談説教」とは、ことばに抑揚をつけ、見事な美声と絶妙の節まわしをもって、歌うがごとく語るがごとく、滔々と弁じたてて、本来は高尚な仏教の教義を、時にはたとえ話を入れてわかりやすく、一般民衆に説き聞かせる説法である。

その独特の節回しは、「能登節」「加賀節」という地域名で呼ばれたり、大成させた個人の名を取り、亀田千巌の「亀田節」、範清文雄の「範清節」などとも称された。

説教者の修業の方法は「随行」と呼ばれる。若いころから師である説教者（「和上」という）に常に付き従い、師と寝食を共にすることによって、説教はもとより、日常の立ち居ふるまいから生活規範まできびしくしつけられ、一人前の説教者として育っていったのである。

（関山和夫『説教の歴史―仏教と諸芸―』より）

能登で生まれた代表的な説教話「長太ムジナ」

幕末のころ、能登の大沢村霊高寺住職が大坂へ出向いて説教を行った。得意の「石山合戦」を語るが、大坂は石山合戦の本場で受けがよくない。

そこで地元で評判になっていた長太ムジナの出来事を因縁話にまとめて語ったところ、大変な評判になったという。ムジナと闘う長太が、斧を振り上げてから振り下ろすまでに様々な話が織り込まれ、「続きはまた明日―」が一週間も続く凝った説教だったといわれている。

（『能登のくに―半島の風土と歴史―』81P）

長太が大きなムジナ（タヌキ）を退治したことは『加賀藩史料』にも記されている（文化五年正月の条「鳳至郡大澤村の長太、老狸を殺したることを届出づ」。

しかし、説教話にある、三年後に殺されたムジナの妻が仇をとるために長太を訪ねてくるという筋は、『加賀藩史料』にも他の文献にもみられないという。

（『加能郷土辞彙』）

能登節の始まりの一伝承

羽咋郡志賀町代田妙専寺の先祖に呑海・珍海という節談名人の兄弟がいて、あちこち説教して節を広めたという一伝承がある。妙専寺の開基は宝永年中（一七〇四～一七一一）で、近松門左衛門らが活躍した時期にあたる。元禄から宝永にかけて、農村の経済力が増し、もともとあった寺に協力する形での新寺建立が各地で認められた。そこに優れた布教者の存在を見るのは、さほど的はずれでもなく、能登節談の直接の元は、そのあたりにたどれそうである。

近代に入り、能登節談界には、きら星の如く、名説教者があらわれ、弁を振るった。松谷円辰師、川岸大厳師、次の代では荒川徳證・長谷大玄・川岸後稠各師がいる。荒川師は高峰徳秀師・滝岡徳什師と共に能登の三徳といわれた。次の世代では、上野慶宗師・天井順導師・範浄文雄師が三羽烏とうたわれた。

（西山郷史「節談説教の風土」『音と映像と文字による【大系】日本　歴史と芸能　第五巻　踊る人々　民衆宗教の展開』所収、文意を変えず省略部分あり）

伝承されてきた説教の型

「はじめシンミリ、なかオカシク、おわりトウトク」

一　讃題　これから説こうとする一席の話のテーマとして経論・祖釈（経典や法語）の一節を節をつけて感銘深く読みあげる。

二　法説　讃題の法義を今少しわかりやすく解説する。

三　譬喩　讃題・法説をいっそうわかりやすくするために譬喩話をできるだけ興味深く話す。

四　因縁　讃題・法説を証明するための事例をあげる因縁談をさす。

五　結勧　（結弁）結び。聴衆に「安心」を与え、今席の話の要諦をまとめてひきしめる。

（関山和夫『説教の歴史―仏教と話芸―』より）

能登の節談説教の系譜

川岸流

（川岸不退氏による）

- 輪島市名舟町 林敬寺14世 川岸開運（マンチョウサマ）
  - 珠洲市大谷 願念寺 川岸苔巌
    - 輪島市名舟町 林敬寺17世 川岸後稠（苔巌次男 コマンチョウ）
      - 柳田村石井 光栄寺 砺波憲正
      - 柳田村長尾 成栄寺 長谷川円了
      - 輪島市曽々木 曽々木教会 浅井真念
      - 輪島市町野町 正楽寺 梶原大安
      - 輪島市里町 専念寺 平田教了
      - 柳田村長尾 成栄寺 長谷川海法
      - 輪島市町野町 円徳寺 法定東旭
      - 輪島市名舟町 林敬寺18世 川岸不退（マゴマンチョウ）
        - 珠洲市大谷 願念寺 川岸昭円
        - 加賀 恵照寺 清水賢恵
        - 北海道 三明寺 木村正樹
        - 富来町酒見 柳泉寺 谷内宣雄
        - 志賀町牛ヶ首 願行寺 芳野廣照
        - 門前町谷口 西慶寺 深谷信親
        - 北海道 三明寺 浅井義昌
        - 中島町田岸 常光寺 西岸正映
        - 輪島市町野町 正楽寺 梶原秀了
        - 押水町宝達 泉福寺 福谷祐敬
        - 富来町福浦港 福専寺 松山宗恵
        - 輪島市里町 専念寺 平田力精
        - 輪島市名舟町 林敬寺 川岸敬巌

森流

（範浄真了氏による）

- 門前町皆月 妙行寺 森 法啓
  - 輪島市大沢 霊高寺 稲垣徳秀
    - 穴水町岩車 聖徳寺 梅原 儆
      - 押水町宝達 泉福寺 福谷祐恵
      - 富来町大福寺 永誓寺 藤井尚月
      - 富来町稲敷 善照寺 岡塚順道
      - 穴水町前波 光楽寺 大和義丸
    - 輪島市鵜入 西応寺 梅渓了雄
    - 志賀町赤住 善法寺 範浄文雄
      - 穴水町留地 西福寺 冨樫昭仁
      - 小矢部市八和町 等源寺 逸見誓見
      - 金沢市 西方寺 中村敬淳
      - 金沢市 浄光寺 符波五夫
      - 金沢市 智覚寺 永藁信昭
      - 門前町百成 願入寺 藤岡文芸
      - 門前町広岡 満覚寺 廣陵兼純
      - 津幡 乗舟寺 戒塚 博
    - 門前町馬場 正光寺 畠山秀円
      - 穴水町中居 慶楽寺 碓井賢章
        - 津幡 本福寺 吉本寿寛
        - 津幡町瓜生 慈雲寺 高木秀学
          - 羽咋市吉崎町 専隆寺 木下信隆
          - 志賀町長田 安入寺 森金法安
      - 門前町剣地 常念寺 深山寛秀
      - 志賀町赤住 善法寺 範浄真了
        - 門前町浦上 立善寺 玉岡了英
    - 輪島市大沢 霊高寺 稲垣秀海
    - 三井町興徳寺 仏照寺 橘 義寿
    - 志賀町福井 本立寺 岡本憲寿
  - 志賀町粟山 覚能寺 芳岡勇玄
    - 志賀町米町 徳願寺 瀧岡徳什
      - 志賀町末吉 光念寺 矢口千代麿
      - 志賀町百浦 宗源寺 高峯宣芳
      - 志賀町百浦 明正寺 藤井恵隆
  - 輪島市里町 長栄寺 泉口竟了
    - 輪島市新橋通り 長楽寺 上野慶宗
      - 高松町黒川 正誓寺 佐々木伸麿
      - 門前町浅生田 正賚寺 経森伸昭

一顔横

能登の林山和上

文学宗教、歴史等は勿論、認まれなくても、眞理を教えるものであれば洋書も求めてある。

片田舎に居ても「カントさんがわざ〜〜此處までやって来たと思えば嬉しくてならぬでノウー」と、如何にも好友や恩師をもてなすように書物を大切にしている。たとえ肉体に傷をつける邪がありても本を折りまげることは大きらいである。自分が座布団に坐つて御原稿をそのまゝ恵に振いて遊をするような者があれば、そんな奴は、人間とは思つていないのである。あの人も修いゝ。この本もよいと思つたが凡てが御經の註釈書であると思へば修はやつぱり御經が一番尊く有難いヨーと。今まで蔵成をふるつた言葉がいつとは知らず頭を下げてかすかに御金剛を解たるようになるのが彼の風格である。

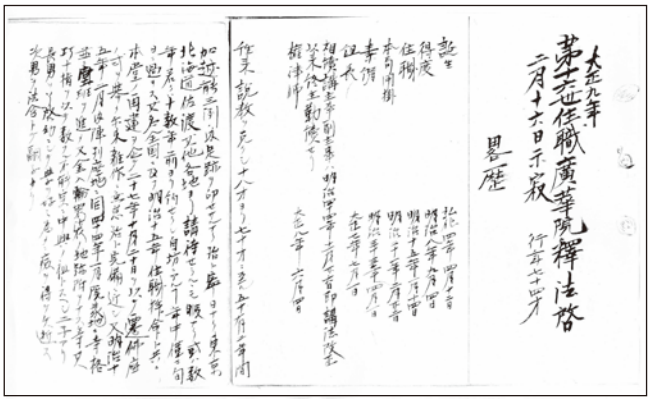
「書物は生きているものだ、死蔵させては申譯ない」と近く容大へ蔵大へ我が命より大切な書物を寄贈するとかで関係者を大喜びさせている。

彼には今度講師の学位が贈られることになると云うが、彼の学的實力がようやく認められたと云うのでなく、関係者が少し目が開いたと云う程のものだ。雑学なればこそ凡ての書物と話が出來るのである。野人なればこそ自由に動くことが出來るのである。

— 佐々木記 —

— 13 —

能登の林山和上（『親ごころ』昭和二十七年三月　真宗大谷派金澤別院刊）



59　森流の祖　森　法啓師の履歴（弘化4年〜大正9年、享年74歳）

説教を克くし、18歳から70歳にいたるまでの殆どを加越能をはじめとして、東京・北海道・佐渡などで講侍せらる。数年から十数年前に予約があり、自坊にいることは年中わずか十日間にすぎない。　（石川県門前町　妙行寺蔵「過去帳」より）

十三　能登の節談説教師　範浄文雄（のりきよぶんゆう）

能登節談説教（ふしだんせっきょう）により、親鸞聖人の教えを広めることに一生をささげた　範浄文雄

大正二年（一九一三）、能登の門前町西慶寺の次男に生まれ、のちに志賀町赤住の善法寺へ養子として迎えられ、善法寺二十九世を継いだ。

若いころ、叔父である稲垣徳秀に随行（ずいこう）して節談説教を身につけ、能登・加賀・越中各地を休むまもなく巡教した。旅から旅への毎日で、体をこわして入退院を繰り返しつつ、それでもなお求める人のあるところへは赴き、節談の名調子で親鸞聖人の教えを説いた。

範浄師が高座に上がると、その背後から後光がさしているように見え、おのずから「南無阿弥陀仏」と手を合わさずにはいられなかったと今も語る老婆もいる。

亡くなる直前の昭和四十年三月二十七・二十八日には富山のヘルスセンターで、大阪・福井・石川・富山などから詰めかけた千人の聴衆を前に「範浄節（のりきよぶし）」を披露して感銘を与えた。高座に座るその姿勢や声の調子はいつもと変わらず、病をおしての出演だとは誰も気づかなかったという。

その五日後の四月三日逝去、享年五十三歳。

出町真寿寺で説教する範浄文雄（昭和25年ごろ）　砺波市永福町　真寿寺蔵

範浄文雄

（5）　昭和38年3月22日　（金曜日）

富山よいとこ？

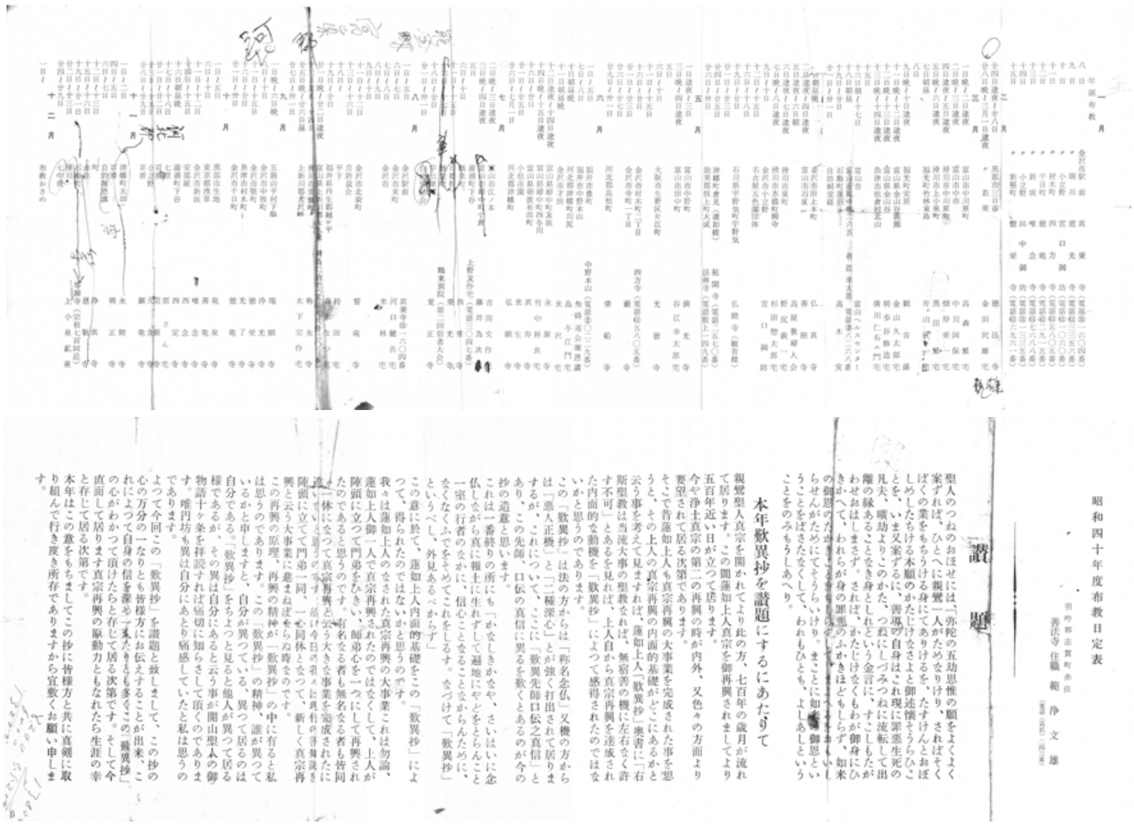
感受性が強いですね

範浄文雄さん（49）

昭和38年3月22日の北日本新聞に載った範浄文雄
石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵

出町真寿寺で説教する範浄文雄（昭和30年ごろ）　砺波市永福町　真寿寺蔵

範浄文雄の布教日程



昭和四十年度布教日定表

羽咋郡志賀町赤住　善法寺　住職　範浄文雄

讃題

聖人のつねのおほせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐そうらひしことを、いま又案ずるに、善導の自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしづみつねに流転して出離の縁あることなき身としれという金言に、すこしもたがわせおはしまさず。されば、かたじけなくもわが御身にひきかへて、われらが身の罪悪のふかきほどもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよへるをおもひしらせんがためにてそうらいけり。まことに如来の御恩ということをばさたなくして、われもひとも、よしあしということをのみもうしあへり。

本年歎異抄を讃題にするにあたりて

親鸞聖人真宗を開かれてより此の方、七百年の歳月が流れて居ります。この間蓮如上人真宗を御再興されましてより五百年近い日が立つて居ります。

今や浄土真宗の第二の再興の時が内外、又色々の方面より要望されて居る次第であります。

そこで昔蓮如上人も真宗再興の大事業を完成された事を思うと、その上人の真宗再興の内面的基礎がどこにあるかと云う事を考えて見ますれば、蓮如上人「歎異抄」奥書に「右斯聖教は当流大事の聖教なれば、無宿善の機に左右なく許す不可」とあるを見れば、上人自から真宗再興を達成された内面的な動機を「歎異抄」によつて感得されたのではないかと思うのであります。

この「歎異抄」は法の方からは「称名念仏」又機の方からは「悪人正機」と「二種深心」とが強く打出されて居りまするが、これについて、ここに「歎異先師口伝之真信」とあり、この先師、口伝の真信に異るを歎くとあるのが今の抄の遺意と思います。

これは一番終りの所にも「かなしきかなや、さいはいに念仏しながら真に報土に生れずして邊地にやどをとらんこと一室の行者のなかに、信心ことなることなからんために、なくなくふでをそめてこれをしるす。なづけて「歎異抄」というべし、外見あるべからず」

この意に於て、蓮如上人内面的基礎をこの「歎異抄」によつて、得られたのではないかと思うのです。

我々は蓮如上人のなされた真宗再興の大事業これは勿論、蓮如上人御一人で真宗再興されたのではなくして、上人が陣頭に立つて門弟をひきい、師弟心を一つにして再興されたのであると思うのです。有名なる者も無名なる者も皆同一体になつて真宗再興と云う大きな事業を完成されたに違いないと思うのです。然し今日の我々は[illegible]の善知識を陣頭に立てて門弟一同、一心同体となつて、新しく真宗再興と云う大事業に進まねばならぬ時なのです。

この再興の原理、再興の精神が「歎異抄」の中に有ると私は思うのであります。この「歎異抄」の精神、誰が異つているかと申しますと、自分が異つている、異つて居るのは自分である。「歎異抄」をちよつと見ると他人が異つて居る様であるが、その異は自分にあると云う事が開山聖人の御物語十ヶ条を拝読すれば痛切に知らさして頂くのであります。唯円坊も異は自分にあとり痛感していたと私は思うのであります。

よつて今回この「歎異抄」を讃題と致しまして、この抄の心の万分の一なりとも皆様方にお伝えすることが出来、これによつて自身の信を深め一人なりとも多くこの「歎異抄」の心がわかつて頂けたらと存じて居る次第です。そして今直面して居ります真宗再興の原動力ともなれたら生涯の幸と存じて居る次第です。

本年はこの意をもちましてこの抄に皆様方と共に真剣に取り組んで行き度き所存でありますから宜敷くお願い申します。

76　範浄文雄の昭和四〇年度布教日程　石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵

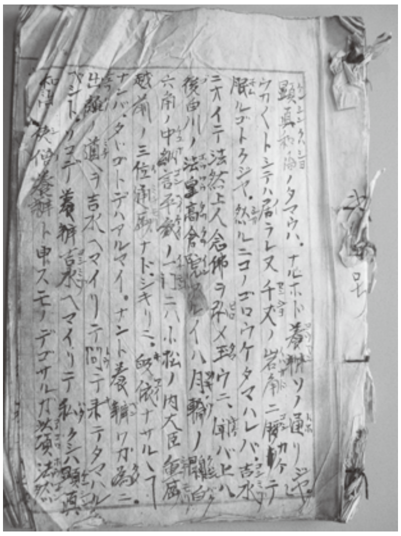
一年中ほとんどを説教に歩いていたことがわかる

71　範浄文雄「親鸞聖人大満の行」カセットテープ

石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵

72　範浄文雄「大原問答」カセットテープ

砺波市中野　小西竹文氏蔵



73「大原問答」写本　明治期

滋賀県大津市　浄宗寺蔵

74　範浄文雄「二河白道」ＣＤ

石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵

78　説教の題材となったさまざまな雑誌・書籍類

石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵

若き日の文雄は、説教の合間に、よく古本屋を訪れ、常に説教の題材収集に努めていたという。

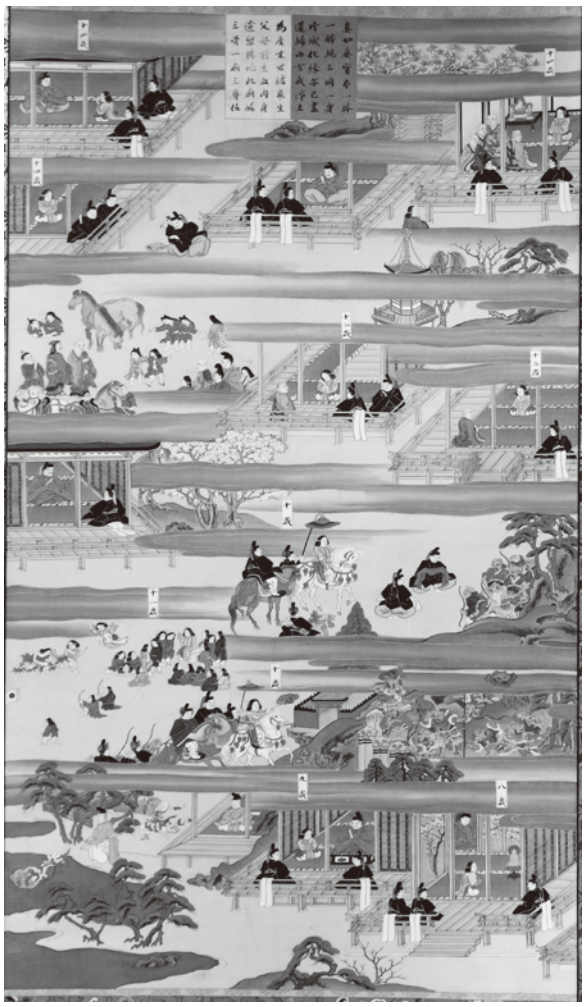
77　袈裟と五条　石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵

一席の説教が終わると、袈裟も五条も汗びっしょりになったという。何度洗ってもとれないシミが、その熱演ぶりを表している。

十四　聖徳太子絵伝

第一幅

第二幅



90　聖徳太子絵伝(1)　南砺市井波　瑞泉寺蔵

聖徳太子絵伝　全八幅

南砺市井波　瑞泉寺蔵

現在瑞泉寺には次の三種の聖徳太子絵伝が所蔵されている。

一．瑞泉寺の開基綽如上人（一三三〇～一三九三）が、南北朝時代に後小松天皇（一三七七～一四三三）からいただいたというもので、重要美術品に指定されている。

二．後小松天皇からいただいたものの痛みが激しくなったことから江戸時代の天保年間（一八三〇～一八四三）に作られたその複製。

三．さらにその後、昭和時代に入って、巡回用として多くの門徒衆の力により寄進されたもの。

ここに展示したものは、三にあたる。吉澤孝譽師が二〇歳の時から六〇年近く、富山・石川をはじめ飛騨までも出かけて布教にあたった太子絵伝である。

各幅ごとの説明

（各幅の讃文および裏書は49頁以降に採録）

第一幅

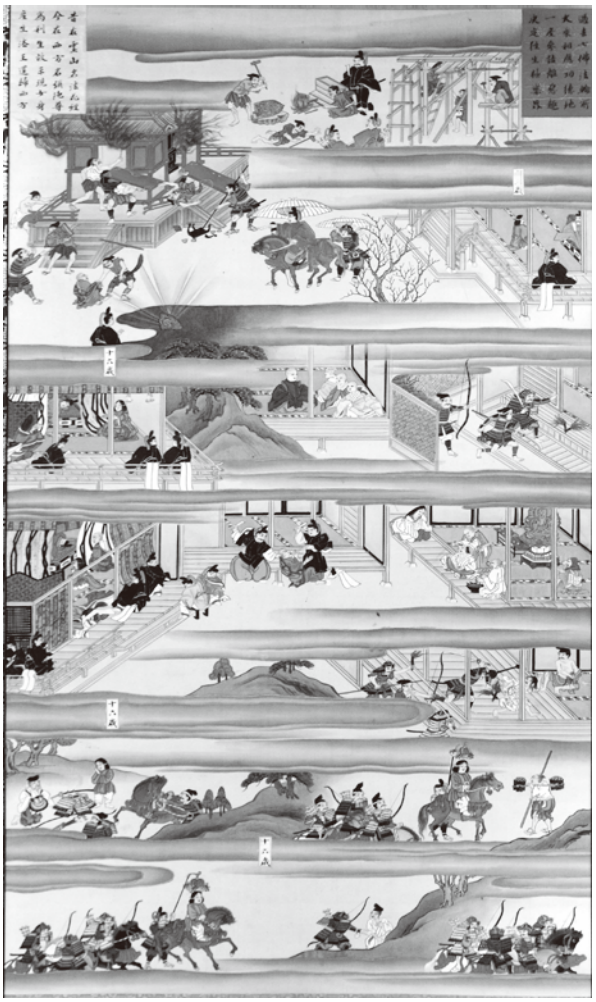
「前世譚」勝鬘夫人の再生・慧思禅師の転生
懐妊　母妃は黄金の僧を夢にみて聖徳太子を懐妊する
誕生　母妃は厩の前で急に産気づき、太子が誕生する
二歳　東に向かって合掌「南無仏」と唱える
三歳　桃花よりも常緑の青松を賞賛する
四歳　騒いだことで、自ら進んで父君の答を受ける
五歳　群臣に先んじて皇后（のちの推古天皇）を拝する
六歳　大別王が経論を百済よりもたらす
七歳　経論を披見

第二幅

八歳　新羅より仏像を献ずる
九歳　土師連八島丸の館に夜叉（熒惑星）が現れる
十歳　来寇した蝦夷を鎮め、和を結ぶ。蝦夷へ綾錦を授ける
十一歳　諸童子たちと遊ぶ。多くの童子の言葉を一度に聞き取ったり、空中を飛行するなど特殊な能力を示す
十二歳　百済から帰朝した僧日羅に会う
十三歳　曽我大臣が百済から将来された弥勒菩薩像を安置する
十四歳　舎利を感得し、それを塔の心柱の下に安置する

第四幅

第三幅



90　聖徳太子絵伝(2)　　南砺市井波　瑞泉寺蔵

第三幅

十四歳　廃仏派の物部守屋や中臣勝海らが堂塔仏像を破壊する

十五歳　用明天皇の玉体を相す

十六歳　用明天皇が病に伏し、その後崩御する

物部守屋との合戦

第四幅

十六歳　物部守屋との合戦、戦に敗退し、物部軍に追われた太子が椋の木の下で念ずると大木が二つに割れて太子の身を隠した

四天王像に戦勝を祈る

用明天皇を葬送する

六角堂の用材を求め自ら木を伐る

十七歳　百済より仏舎利や各種工人が来朝する

第四幅の部分

用明天皇2年(587)7月、太子ら、物部守屋討伐の軍を起こす

守屋軍は強く、太子らの軍は3度も敗退した。太子自身にも危険が迫り、椋木に身を隠して難を逃れた。太子は白膠木(ぬるで)で四天王像を作って戦勝祈願し、自らの翳(かざし)にさして戦い、勝利を得た。

第六幅

第五幅

90　聖徳太子絵伝(3)　　南砺市井波　瑞泉寺蔵

第五幅

四天王寺・西門の鳥居。布で目隠しした人々が合掌して鳥居をくぐる人々

十七歳　四天王寺の瓦を造る
十八歳　東山・東海・北陸三道に使いをだす
十九歳　載冠の儀式
二十歳　崇峻天皇、新羅討伐軍を出す
二十一歳　崇峻天皇が殺害される
二十二歳　推古天皇が即位し、太子は摂政に就く
　　四天王寺建立
二十四歳　淡路島に霊木が漂着する

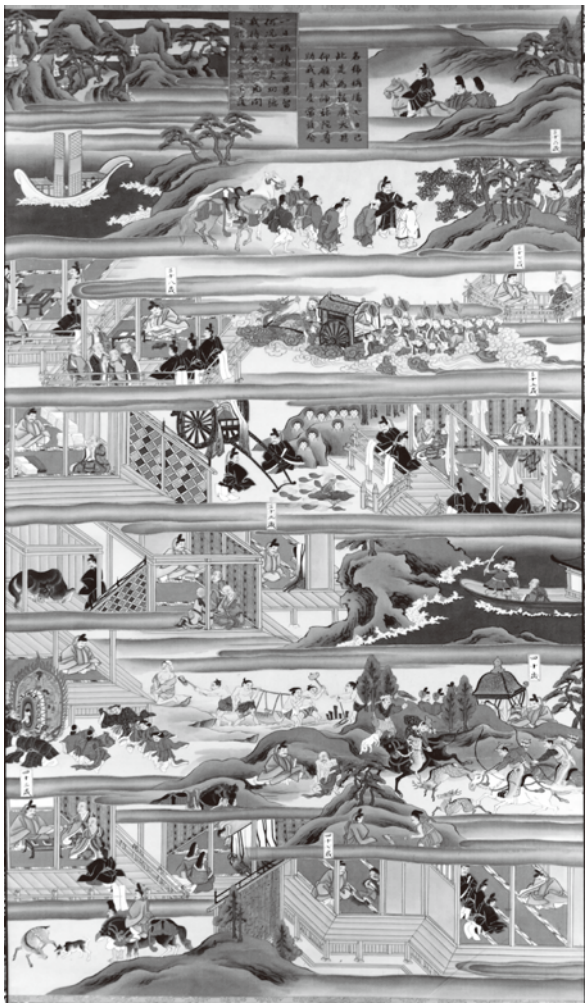
第六幅

二十五歳　法興寺落慶、瑞雲が法興寺の仏堂を覆う
二十六歳　百済よりの使者阿佐王子が来朝
二十七歳　妃を迎える
　　甲斐国から黒駒を献上する。太子、黒駒に乗って東国に遊び、富士山に登る
二十八歳　百済が、駱駝・驢馬・羊・白雉を献上する
二十九歳　新羅遠征
三十歳　斑鳩宮造営。新羅の間諜を捕える
三十一歳　百済僧観勒、高麗僧僧隆、雲聡が来朝する
三十二歳　推古天皇、小墾田宮に遷る
三十三歳　十七条の憲法制定
三十五歳　平群野に行啓

第六幅の部分

推古天皇６年（598）４月、甲斐国より黒駒が献上される
太子は黒駒に乗り、諸国巡遊する。黒駒は空を飛び富士山に至った。
馬上が太子、馬の手綱を引くのは舎人（とねり）の調使麿。

第七幅



第八幅

90　聖徳太子絵伝(4)　　南砺市井波　瑞泉寺蔵

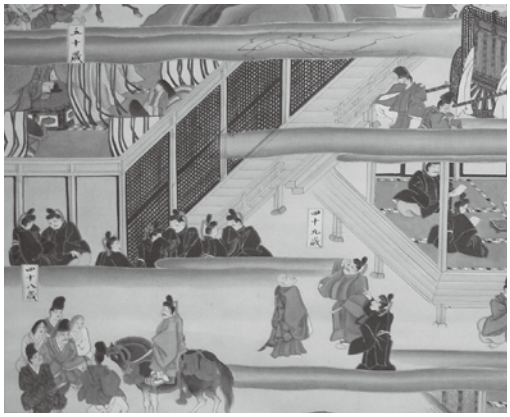
第七幅

三十五歳　勝鬘経を講ずる。大蓮華が降り、千仏湧現の仏頭山の奇瑞あり
三十六歳　小野妹子を隋へ派遣する
三十七歳　小野妹子、隋より帰国。隋使裴世清ら、微行の太子に下馬敬礼する
三十八歳　青龍車に乗って衡山まで飛行する
三十九歳　勝鬘経疎を執筆する
　　百済僧十人が流着する
　　黒駒が太子を驚かし、過ちを悔いて、草を喫せず水も飲まずに悩む
四十歳　狩猟する推古天皇に殺生を戒める
四十一歳　百済の味摩之が伎楽を伝える
四十二歳　片岡山の飢人に会う
四十三歳　犬と鹿の争いを見て、輪廻の苦しみ・宿業の深さを悟る

第八幅

四十四歳　法華経疏成る
四十五歳　新羅、金仏像を献ずる
四十六歳　推古天皇に請われて、再び勝鬘経を講ずる
四十七歳　太子、妃に前世を語る
　　科長の墓所を検分する
四十八歳　畿内を巡遊する。摂津国、人魚を献ずる
四十九歳　天に赤気があらわれる
五十歳　太子と妃、斑鳩宮でともに薨去する
　　葬送、太子と妃を科長陵に葬る
薨後二十二年　蘇我入鹿、斑鳩宮に上宮王家を襲う
　　諸王子、五重塔より昇天する

第八幅の部分



推古天皇28年（620）12月、太子、病に伏し、死去
天空に赤気（しゃっき）が現れ、太子や群臣たちは不吉な予兆と不安げに空を見上げる。その翌年、太子は妃とともに斑鳩宮で薨去（親王または三位以上の人の死）した。

十五　親鸞聖人絵伝

親鸞聖人絵伝　全二幅

砺波市永福町　真寿寺蔵

浄土真宗の開祖親鸞聖人の生涯を絵で表したもの。県内では永正六年（一五〇九）に井波瑞泉寺に下付されたものが最も古い。ほとんどの真宗寺院に備えられており、近世にはこのような絵伝を使用した絵解きが大変盛んに行われたという。

絵伝は四幅が一般的であるが、本品は二幅もので、今回展示したものはそのうちの後段である。法然上人の流罪から親鸞聖人の遷化（死去）、荼毘に伏され、のちに廟堂が創設されるまでが描かれている。

本絵伝は、裏書によると、真寿寺の信徒である鷹栖屋源右衛門が文政八年（一八二五）に寄進し、源右衛門没後、その妻みさが文久元年（一八六一）に修復したものである。

91　親鸞聖人絵伝　全２幅の内後段　　砺波市永福町　真寿寺蔵

（箱上書）

「　　越中砺波郡杉木新町

御　絵　伝　　真寿寺什物」

（箱蓋裏書）

「文政八乙酉暦九月　依正映齊円之

寄付而永伝于当寺者也

施主　法名　釈正映齊円」

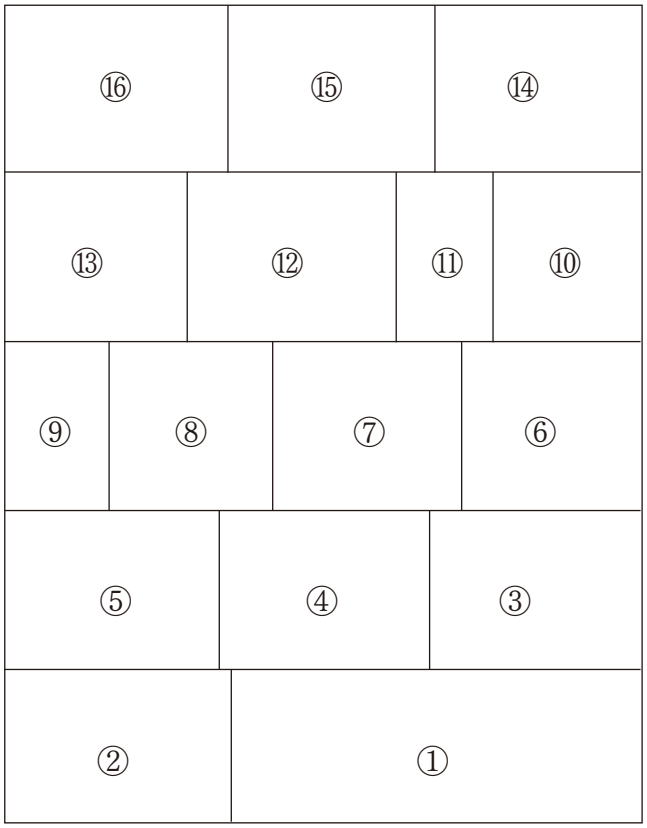
（軸裏書）

「　文政八乙酉暦九月　　俗名鷹栖屋

寄進　法名　釈　正映　　源右衛門

右就破損重而　文久元辛酉暦霜月　故源右衛門妻

加修覆寄進之　法名釈尼　妙澄　俗名　みさ」



後段である本幅は、時間の流れは下から上に向けて書かれている。たぶん今回借用しなかった前段では、親鸞の出家から、法然に師事し、そこでの修業の様子が描かれていると思われる。

①「法然上人御流罪」法然が土佐への流罪と決まり、出発するところ。弟子たちが別れを惜しんで涙している。

「其二」

②「善信上人御流罪」（善信は親鸞のこと）

③「其二」　親鸞も越後へ流罪と決まり、駕籠へ乗り込むところ。

④「聖人　越後より常陸にこえ給ふ」

越後流罪五年後、親鸞は京へ帰らず、常陸へ赴く。

⑤「稲田の御庵室に説法し給ふ」

常陸の稲田に庵室を構え、人々に説法する様子。

⑥「板敷山」専修念仏を唱える親鸞を恨む山伏弁円が、親鸞に危害を加えようと、板敷山で待ち伏せするところ。

⑦「明法房はじめ仏教に帰する図」

どれだけ待ち伏せしていても親鸞に出会えなかった弁円は稲田の庵室に押し掛けたが、おだやかに対応する親鸞に接し、後悔の涙にくれ、ただちに親鸞の教えに帰依した。明法房は弁円のこと。

⑧「箱ね口」常陸で二〇年をすごしたのち、親鸞は京へ帰る。その途中箱根の山の中で日が暮れるが、一軒の家の翁に出会う。この翁が箱根権現であったという。

⑨「平太郎」京都へ帰った親鸞のもとへ常陸の平太郎が訪ねてきて、熊野へ参詣することになったが、念仏者としてどのような心構えで参るべきかと問う。

⑩「其　二」親鸞の教えにより、精進潔斎もせず普段のままの体で詣でた平太郎の夢に熊野権現が出現し、なぜ不浄の体で参詣するのかと詰問された。そこに親鸞が現れて、彼は自分の導きにより念仏をしているものであると言われた。手前の拝殿には平太郎やほかの参詣人、奥の本殿には左が熊野権現、右が親鸞。

⑪「聖人御不例」親鸞が不例（病気）になる。

⑫「聖人御遷化」親鸞が遷化（死去）する。

⑬「聖人御（破欠）」

親鸞の遺骸を荼毘所へ送るところ。

⑭「聖人御荼毘　東山延仁寺の躰」

同右　涙にくれる弟子たち。

⑮「其　二」荼毘に付す。

⑯「大谷仏閣」親鸞没後十年目、大谷にあった親鸞の墳墓を吉水の北側へ改葬し、六角形の廟堂を建てる。

⑯「大谷仏閣」

十六　地獄極楽図

92　地獄極楽図　　全二幅　　砺波市福山　願成寺蔵

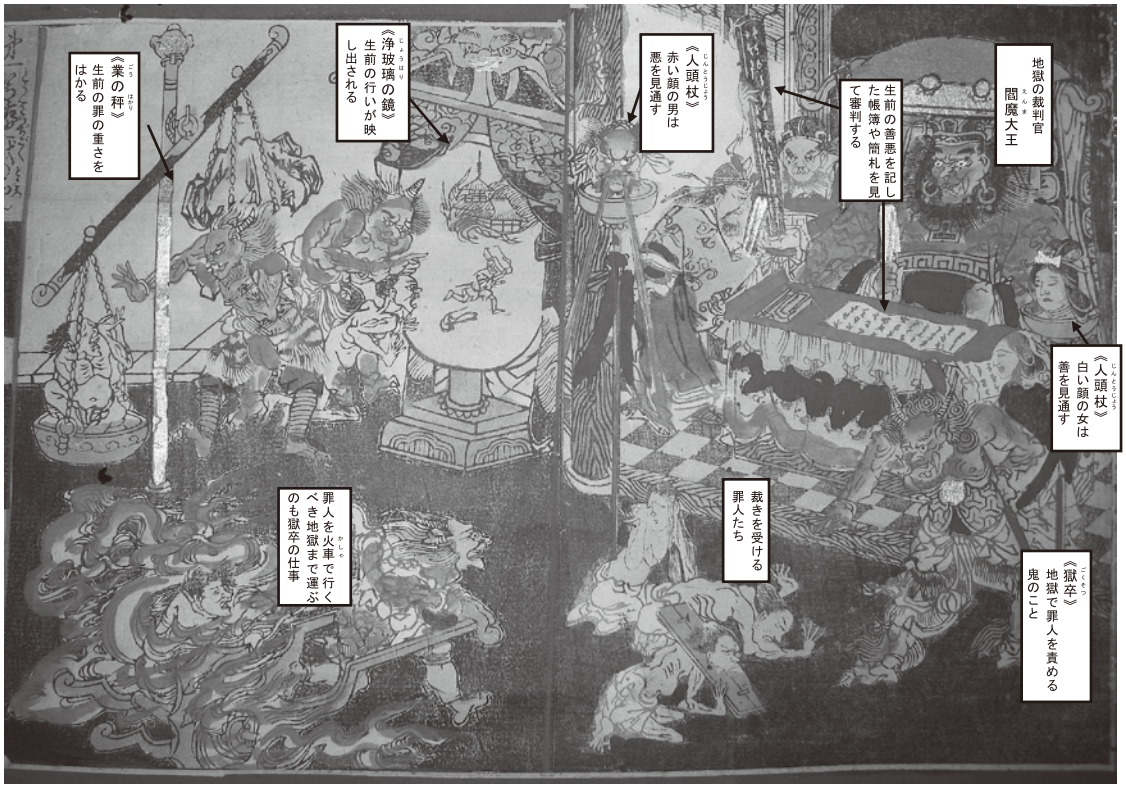
地獄極楽図　全二幅

砺波市福山　願成寺蔵

当寺はもと福野町石田（現南砺市石田）の空泉寺寺中寺院であったが、住職の死去により明治十六年に現地へ移転したものである。この地獄極楽図はその時にもたらされたものという。

当寺の先代住職福澤嶺秀は戦前に龍谷大学を卒業した後、本願寺の海外布教師として大陸へ渡り、北京や満州で布教にたずさわった。終戦によりシベリアに抑留されたが昭和二三年には帰国し、県内や北海道で再び説教に歩いた。冬季にしばらく帰ってくるだけで、一年のうちほとんどが旅の生活だったという。

説教はよくしたが、この地獄絵を使った絵解きは一度もしたことがなかったという。



極楽の十楽

極楽で受けることのできる 10 種の楽（らく）(⇔苦)

1 **聖衆来迎楽**（しゅうじゅらいごうらく）… 臨終の時、阿弥陀仏や観世音菩薩・勢至菩薩をはじめとする聖衆が迎えに来て、浄土に導いてくれる。

2 **蓮華初開楽**（れんげしょかいらく）… 蓮華の台座によって極楽に生まれる楽。その蓮華が開くときあたかも辺境の人がいきなり王宮に入ったかのような限りない歓楽を受けること。

3 **身相神通楽**（しんそうじんつうらく）… 極楽に生まれた人の身体は光り輝いて美しく、仏が持つ三十二の特徴をそなえ、五種類の神通力を得る。

4 **五妙境界楽**（ごみょうきょうかいらく）… 五感の対象となる色・音・味・香りなどが絶妙である。

5 **快楽無退楽**（けらくむたいらく）… 極楽で得られる楽は清らかで失われることがない。

6 **引接結縁楽**（いんせつけちえんらく）… 極楽に往生して神通自在の身となり、かつて恩を受けたり、縁を結んだ人々を極楽浄土に導くことができる。

7 **聖衆倶会楽**（しょうじゅくえらく）… 極楽では常に聖衆が集まり、快い会話や論議を交わし、法悦を得ることができる。

8 **見仏聞法楽**（けんぶつもんほうらく）… 極楽では、常に阿弥陀仏を直接見て、深い教えを聞くことができる。

9 **随心供仏楽**（ずいしんくぶつらく）… 心のままに仏を供養することができる

10 **増進仏道楽**（ぞうしんぶつどうらく）… 極楽に往生すれば自然に仏道を増進することができる悟りの境地に到着できる

八大地獄（はちだいじごく）とは

生前に悪事を犯したものが行く８種の地獄。原型はヒンドゥー教にあり、それが仏教に取り入れられ、自業自得、勧善懲悪などの因果の教えを説いた。各地獄には、行なった悪業によってさらに16の小地獄が分かれている。

第１地獄－等活（とうかつ）地獄　罪状　殺生（せっしょう）（いたずらに生き物の命を絶つこと）
人間界より地下1,000由旬（ゆじゅん）*(約7,000km)の所にある縦横10,000由旬(70,000km)という広さ。（広さは以下第７地獄まで同じ）刑期はここが一番短く、500等活地獄年、人間界の約1.6兆年**に相当する。
*１由旬=約7km　**四天王の寿命(912.5万年)が等活地獄の１日。罪人たちは自らの身体に備わった鉄の爪や刀剣で殺し合う。獄卒***に責められ死んでも、涼しい風が吹くとまた元の身体に生き返り責め苦が続く。***地獄で働く(罪人を責める)鬼

第２地獄－黒縄（こくじょう）地獄　罪状　殺生（せっしょう）＋偸盗（ちゅうとう）（他人の財物を取ること＝盗み）
獄卒は熱く焼けた縄で、熱く焼けた鉄の地面に伏した罪人の身体を打ち、熱く焼けた鉄斧や鋸で身体を切り、裂き、削る。また投身自殺をした罪人が受ける等喚受苦処は立てた鉄の幢に張られた鉄の縄を渡らされ、獄卒に突かれ、縄から落とされ、身体が砕けることを繰り返す。等活地獄の10倍の苦しみ。

第３地獄－衆合（しゅうごう）地獄　罪 状　殺生（せっしょう）＋偸盗（ちゅうとう）＋邪淫（じゃいん）（配偶者以外との交わり）
罪人は鉄の杵と臼で打ち砕かれ、圧殺される。剣の葉を持つ木の上にいる美女が罪人を誘惑し登らせ、罪人が上に着くと美女は下に現れ、木を降る。その繰り返しで身体は血を噴き出す。猛獣、鷲などに身を食いちぎられる等、黒縄地獄の10倍の苦しみ。

第４地獄－叫喚（きょうかん）地獄　罪状　殺生（せっしょう）＋偸盗（ちゅうとう）＋邪淫（じゃいん）＋飲酒（おんじゅ）（飲酒による悪事）
罪人は熱湯の大釜や猛火の鉄室に入れられ、その苦しさから号泣、叫喚する。罪人の許しを哀願する声を聞くと獄卒は更に怒り、ますます責める。獄卒が罪人を追い回して矢で射る。衆合地獄の10倍の苦しみ。

第５地獄－大叫喚（だいきょうかん）地獄　罪状　殺生（せっしょう）＋偸盗（ちゅうとう）＋邪淫（じゃいん）＋飲酒（おんじゅ）＋妄語（もうご）（嘘、偽りを言うこと）
獄卒はヤットコで罪人の舌や目玉を抜いたり、大釜でゆでたりする。叫喚地獄の10倍の苦しみ。

第６地獄－焦熱（しょうねつ）地獄　罪状　殺生（せっしょう）＋偸盗（ちゅうとう）＋邪淫（じゃいん）＋飲酒（おんじゅ）＋妄語（もうご）＋邪見（じゃけん）
（仏教の教えとは相容れない考えを説き、実践する＝仏教の否定）
罪人は鉄板の上で焼かれ、焼いた鉄の棒に串刺しにされたり、目・鼻・口・手足を分解してからそれぞれ炎で焼かれる。ここの炎は今までの炎が雪のように冷たく感じられるほどとてつもないという。大叫喚地獄の10倍の苦しみ。

第７地獄－大焦熱（だいしょうねつ）地獄　罪状　殺生（せっしょう）＋偸盗（ちゅうとう）＋邪淫（じゃいん）＋飲酒（おんじゅ）＋妄語（もうご）＋邪見（じゃけん）＋犯持戒人
（戒律を守る人を陥れる）
更に極熱の火炎に苦に責められる。焦熱地獄の10倍の苦しみ。

第８地獄－阿鼻（あび）地獄（無間（むけん）地獄）　罪状　殺生（せっしょう）＋偸盗（ちゅうとう）＋邪淫（じゃいん）＋飲酒（おんじゅ）＋妄語（もうご）＋邪見（じゃけん）＋犯持戒人＋犯持戒人＋父母殺害・聖者殺害
地獄の最下層に位置し、到着するだけでも真っ逆さまに落ち続け200年かかるという。五感すべてに襲ってくる苦しみはこれまでの地獄とは比べものにならない程で、すべての地獄と各小地獄を足したものの1000倍の苦しみを絶え間なく受ける。
広さはこれまでの地獄の縦横２倍、刑期は1中劫（=柔らかな綿で石を100年に１度さっと拭く行為をし続け、石が磨耗、消耗するよりも長い時間）

十七　説教本

79　説教本の版木　　庄川民芸館蔵

菅原智洞編『勧導簿照巻十四』

『成唯識論導巻七』

（部分）

庄川民芸館に所蔵されている版木の一覧

一	表	阿毘達磨倶舎論校註巻之二	一・四
	裏	阿毘達磨倶舎論校註巻之二十一	十七・十八
三	表	有宗七十五法講義巻之一	三十五・三十六
	裏	有宗七十五法講義巻之二末	三十一・三十三
二		五教章巻中之二	十三・十四
四	表	倶舎論頌疏巻之五	二十五・二十八
	裏		二十六・二十七
五	表	法華倭字解巻之七	廿二・廿五
	裏		廿三・廿四
六	表	三論玄鈔五	六十五・六十六
	裏		六十七・六十八
七	表	成唯識論導巻三	十七・十九
	裏		十八・二十
八	表	唯識図解四	三十四・三十三
	裏		三十五・三十六
九	表	唯識了義七本	七・八
	裏		五・六
十	表	聯珠詩器巻七	十五
	裏		十六

永田文昌堂蔵	
永田文昌堂蔵	
本願寺編輯場蔵	

江戸時代の大説教者　菅原智洞（すがわらちどう）

菅原智洞は、浄土真宗本願寺派（西本願寺）が生んだ近世の大説教者である。

能登国羽咋郡南邑知村字菅原（現石川県羽咋郡志雄町菅原）の浄土真宗本願寺派明専寺第六世覚山の第三子として生まれ、寛保元年（一七四一）ごろに上洛して陳善院僧樸に師事して修学し、第一級の唱導家（説教者）となった（『先哲遺事』）。

博覧強記で文才に富み、多数の説教本を書いた。それらの本は、説教のテキストとして活用され、明治以降の説教隆盛の基盤を築いたといわれる。（関山和夫『説教の歴史』）

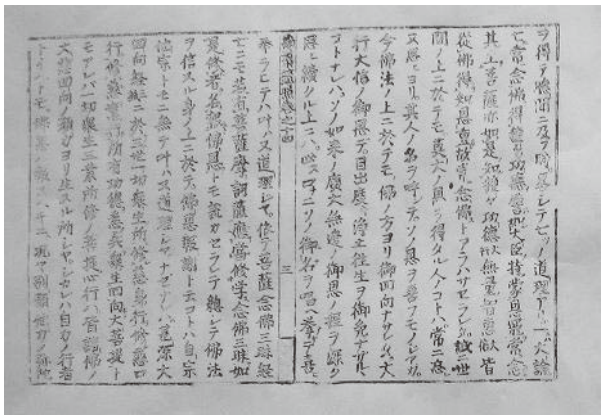
ここに展示したのは菅原智洞編『勧導簿照巻十四』の版木である。初版は明和九年（一七七二）に刊行された（『国書総目録』）。

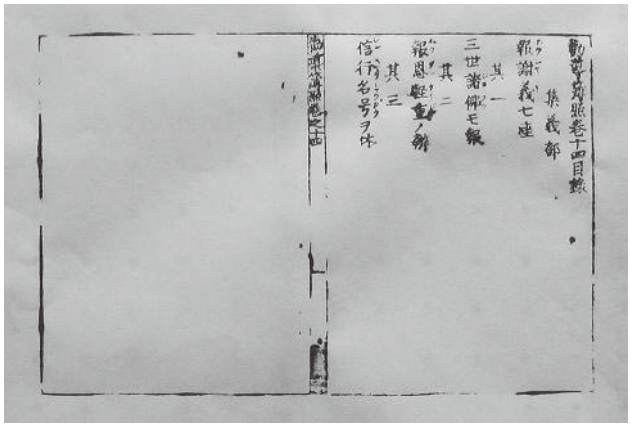
80　木村徹量著『信疑決判』
初版は大正11年。本品は昭和54年３版
府越義博氏蔵

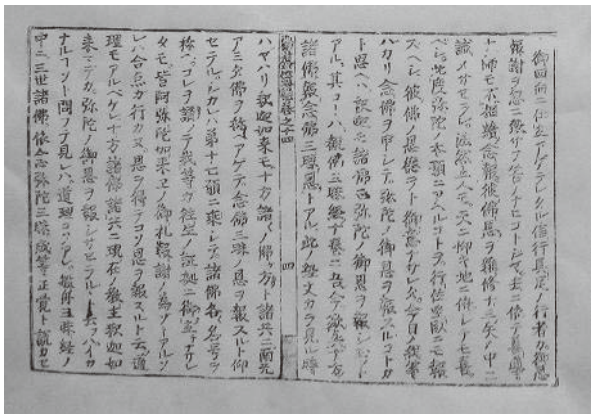
江戸時代から明治・大正期にかけて真宗で行われた説教を集約したものといえる。
収録されている説教は250項目に及び、初日昼席から第6日朝席に終わるよう構成してある。初心者でも使いやすいように、説教のテキストとして見事に分類、整理されている。
譬喩因縁談のひとつに、越中国大栄寺の幼女の話が採録されている。

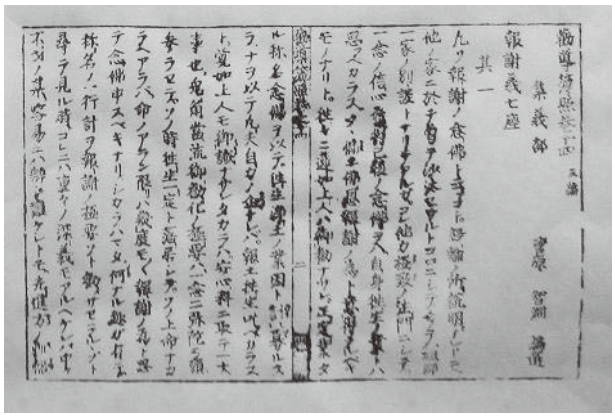
木村徹量
（元治元年1864～大正15年1926）
広島県の光泉寺の第11代住職で、明治・大正期の説教界の巨匠であった。「西本願寺の御使僧様」といわれ、説教者を志すものは等しく彼の社中に投ずることを願ったという。

81『福岡徳栄寺義渓述　説教妙弁集全』
初版は大正12年、本品は昭和55年の復刻版
府越義博氏蔵

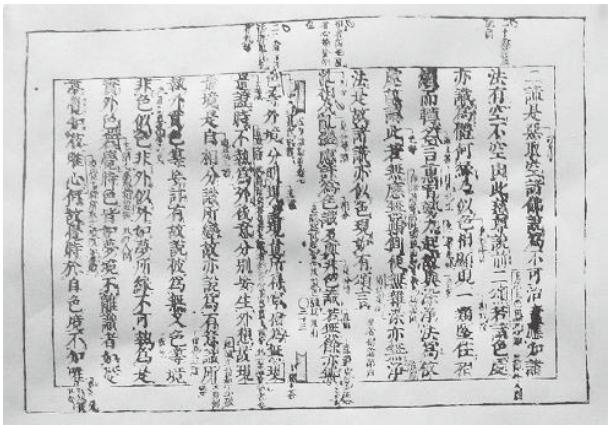


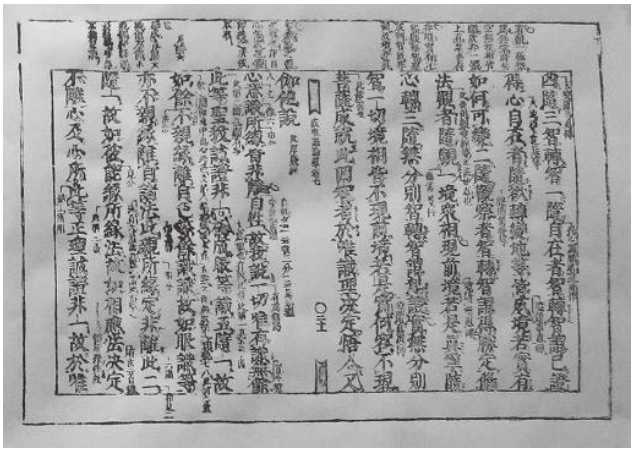


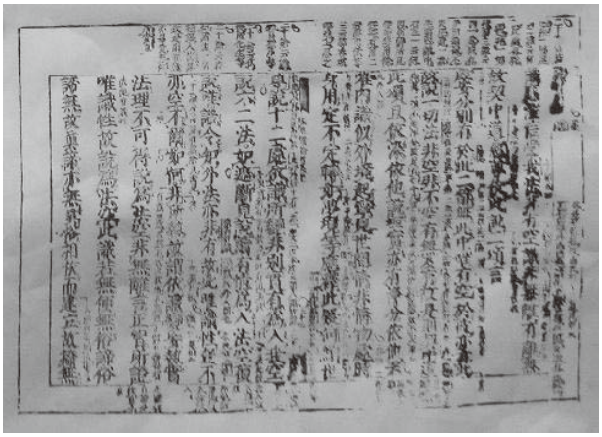




版木『勧導簿照巻十四』の字







版木『成唯識論導巻七』の字

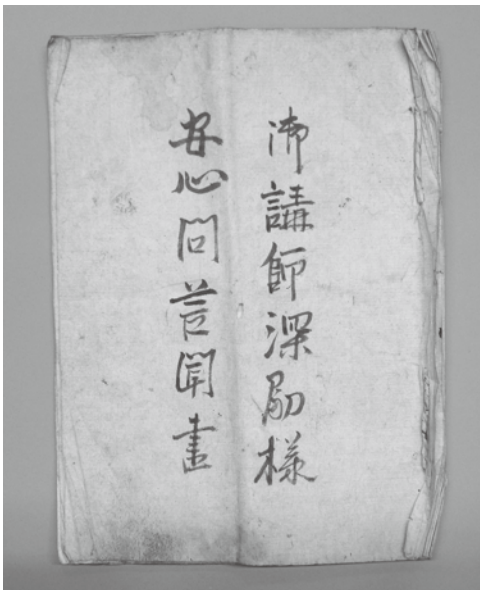
十八　御示談問答

御示談（ごじだん）の問答集

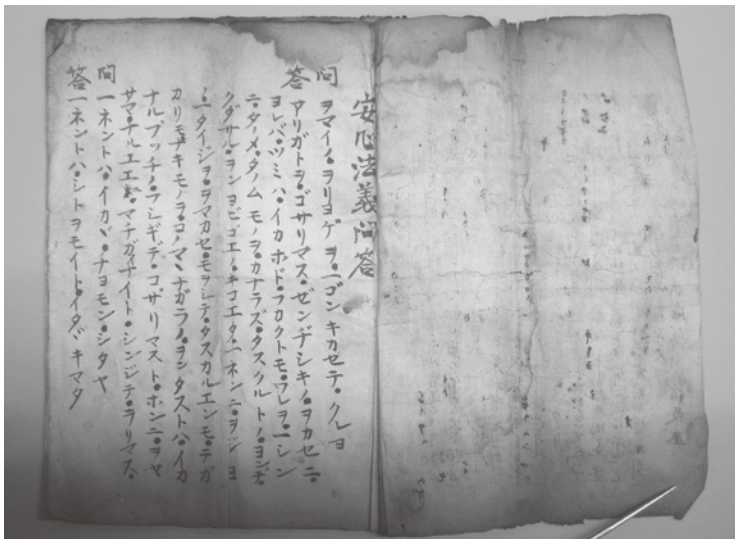
南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵

御示談とは、報恩講や御座の場で、僧侶の法座が終わった後、聴聞していた信者と僧侶、または同行衆の間で行われる信仰上の問答のことである。

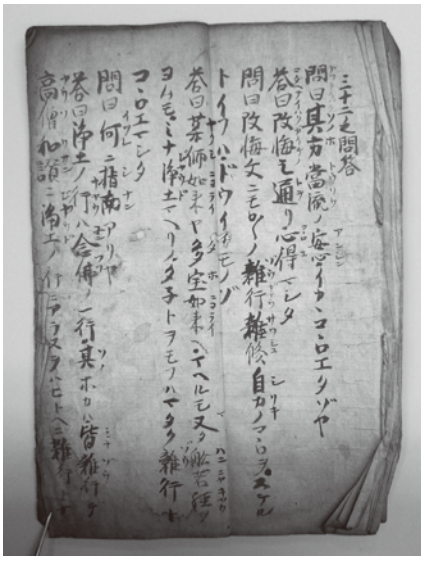
ここに展示したのは、文化十一年（一八一四）、明治七（一八七四）、昭和十五年（一九四〇）の三回にわたる御示談の記録である。これらは、刀利村（現在は刀利ダムの建設によって水没）南源右衛門家に残されていたもので、江戸時代から一般民衆の中に真宗の教えが浸透していたことがわかる貴重な資料である。



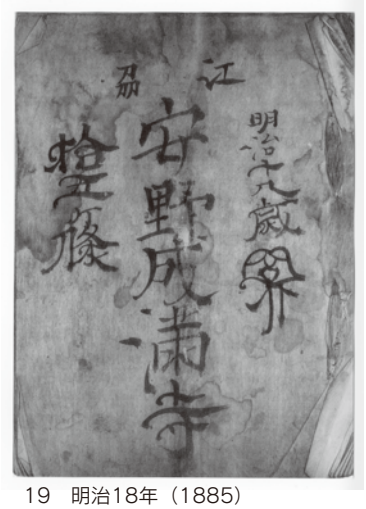
20　文化11年(1814)正月　御示談問答聞書
南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵（全文は48頁に採録）



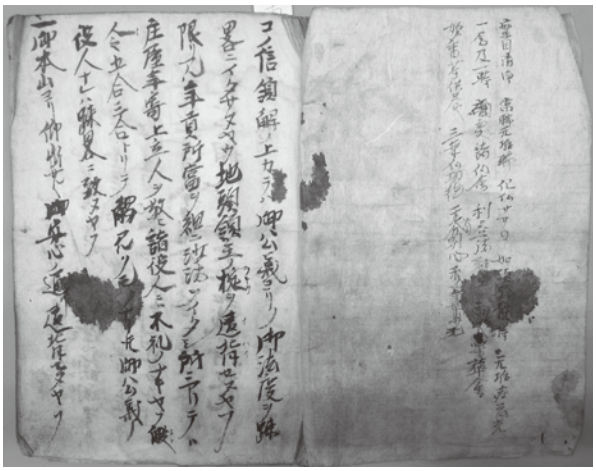
22　昭和15年(1940)4月　御示談の問答集　南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵

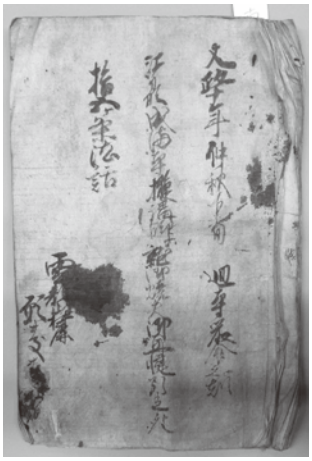


21　明治７年(1874)10月　御示談の問答集
南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵



19　明治18年（1885）
「江州　安野成満寺　拾五ヶ条」
南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵
内容は右の文書と同じ。南家の人が明治18年に再び写し直したものであろう。





18　文政10年（1827）「文政十年仲秋下旬　廻寺厳命之刻　江州成満寺様講師より就御焼失御再建引立座　拾五ケ条法話　雲龍山麓　願慶寺」　南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵
文政６年に焼失した御堂の再建のため全国各地で「座」が作られて法座がもたれた。その時の法話を記録したものである。（全文は43頁に採録）

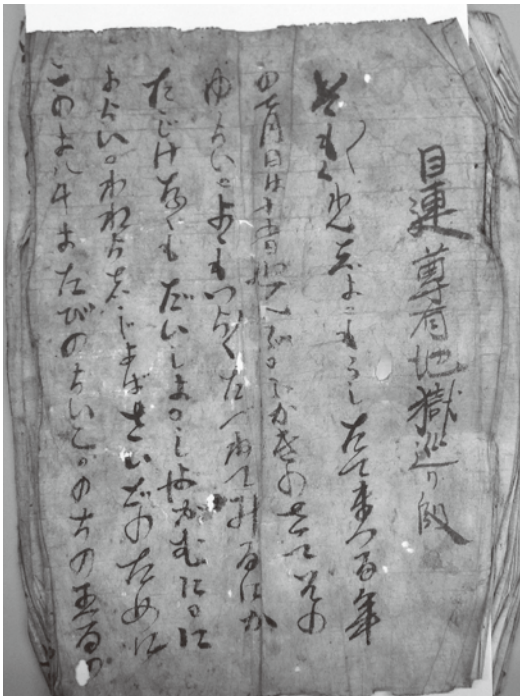
十九　チョンガレ台本

チョンガレ節（ぶし）

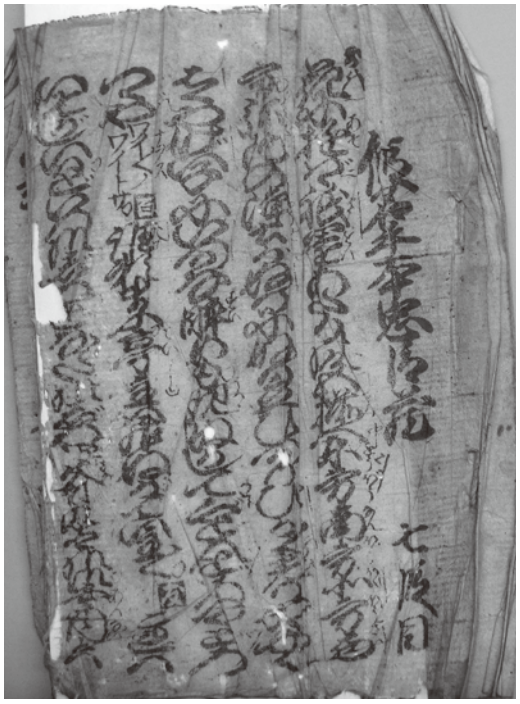
盆踊りや祭の踊りの時に歌われるのがチョンガレ節である。全国的に行われ、その歌詞は浄瑠璃などから取材したものが多いというが、当地のチョンガレは浄土真宗に関連する題材が多いことに特徴がある。

むかしは、チョンガレ語りはどの村にもいた。そのかっこうは、木綿の単衣を尻はしょりして、股引に草履ばき、着莫蓙と菅笠を後ろにさげ、手ぬぐいを鼻の下で結び、拍子木または四つ竹で拍子をとった。マイクもない時代に声が良く通る美声と音量がなければチョンガレ語りはつとまらなかった。

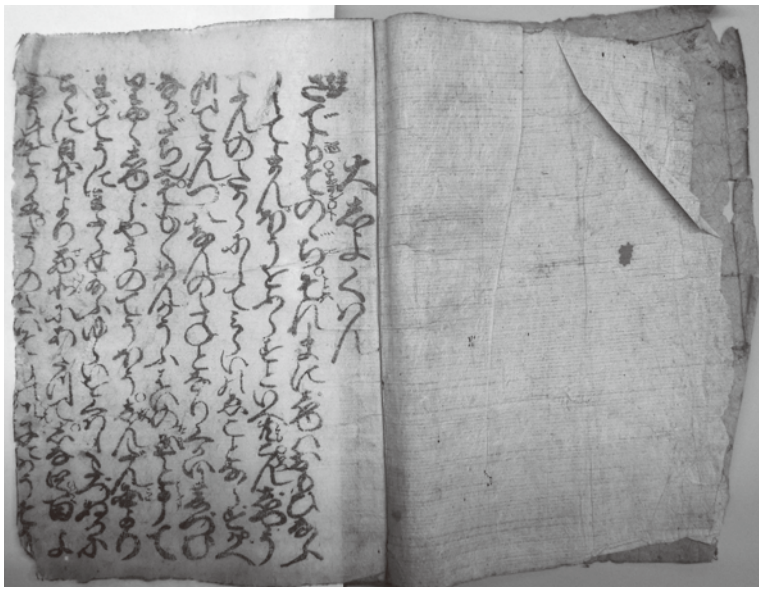
明治・大正期から戦前は、どの村でも、寺や宮の境内、町の辻などで、何十人も時には百人以上もの人々が夜を徹して踊ったという。今でも神社の拝殿などに千音加礼・音頭の奉納額が掲げてある。



23　チョンガレ台本「目連尊者地獄巡り段」
南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵



24　チョンガレ台本「仮名手本忠臣蔵」
南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵



25　チョンガレ台本「大しょくかん」南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵

資料編

一　説教

㈠　大原談義（または大原問答）

①　大原談義とは

大原談義は文治二（一一八六）年、法然五十四歳のときのことで、天台座主顕真の主催によって、光明山の明遍、笠置の解脱上人貞慶、東大寺の勧進俊乗坊重源、天台の智海や証真たち三百余人と伝えるのに誇張があっても、大勢が集まったという。墨染の念仏聖である法然に関心を抱き、法然から浄土の教え、とくに生死を離れる可能性とその方法を聞くことにあった。それらの人々の質問に対し、法然はいかに現世において生死離脱が困難であるかを指摘し、さらに極楽浄土に往生する方法を示したのである。それも、いかに従来の伝統的教学がすばらしいかを示しはしたものの、法然自身はとてもその境地を得ることは難しいと断言する。すなわち、

ただし源空（法然）ごときの頑愚のたぐいは、更にその器にあらざるゆえに、さとりがたく、まどいやすし。

（『四十八巻伝』第十四）

と語るのである。あくまでも、聖道の教えはすばらしいけれども、自分のような凡夫には往生浄土のみが救いであると説くのである。「仏の願力を強縁として、乱想の凡夫浄土に往生す」という主張こそ、新たな法然の立場を示し、比叡山で学んだ天台宗との訣別を意味している。

大原談義の影響は、当時の仏教界に法然の存在をいやでも知らせる結果となり、新しい念仏の意味を大きく喧伝することとなった。このことはまた既成の仏教側を大いに刺激し、批判や非難の声が強くなっていくのも当然の趨勢であった。

（石上善應『選択本願念仏集』筑摩書房）

②　大原問答　範浄文雄説教

智慧光の力より本師上人あらわれて
浄土真宗開きつつ　選択本願述べたもう

和朝念仏の元祖法然上人、御年五十四歳のとき、所は京都の在、大原立禅寺におきまして、当時天下の学者三百八十有余人を向こうへまわして、こなた法然上人ただお一人、ここに聖道門すぐれるか、浄土門すぐれるかと、手に汗握りましての大舌戦、これを称して大原の談義、一名大原問答と申しております。

（中略）

顕真僧正、はったとばかりに法然様をばうちにらんだ。「こりゃ黒谷の法然、それすみやかに生死を離れ解脱を得るは、華厳・天台・真言・禅宗、四家大乗をもって最上とし、至極とする。この義如何。」これが顕真様の第一のお尋ねでございます。何分ともに学者のことでございまする。非常にお言葉は固とうございます。

ではこのお言葉を柔らかく申します。「それすみやかに生死を離れ、解脱を得るには華厳・天台・真言・禅宗、仏教の中でも華厳は四家大乗というて、もっとも優れた法である。こういう四家大乗の教えのあるその中へ、法然汝近頃念仏門を開いてえらい繁盛しておるそうじゃが、いったい念仏は何処が優れておるのか。別に優れておらんならば、ことさら珍しく念仏門を広める必要がなかろう。それとも念仏が優れておるなら、その優れておるいわれを聞かしてもらいたい」というのが、第一番の顕真様のお問い。

このお問いの中には、言わず語らず四家大乗の御自慢、そして念仏宗を一気に叩きつぶしてやろうという、顕真様の第一の問いが発せられました。

これを聞かれましたところの三百八十有余人の天下の学者、耳を澄まいて法然坊何と答えるやら、法然の答えによってはただではおかんぞ、ただではすまさんぞよと、固唾をのんで法然様の御返事待って居る。一方、法然様は少しも驚きの色も見せ給わずに、にっこりとお笑いになった法然様は

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏

おもむろにお口をお開きあらせられた法然様、

「いかにもいかにも顕真殿よ。仏教は万差なりといえども、根機に合する辺から眺めてみるならば、念仏をもって最上とし至極とするぞよー」と。

法然様のお答え、まことにおとなしいな。まことにおとなしい。「顕真殿よ、顕真殿よ。いかにも四家大乗は優れておるに違いはない。四家大乗はあんたの御宗旨は優れておるに違いはなけれども、今は我がこの念仏の一門は、根機に合する辺から眺めてみるならば念仏をもって最上としますわいね。至極とするわいね」とお答えせられたその時に、

顕真「法然待たっしゃい。ただ念仏が優れておるというだけではわからん。優れておるならば、その優れておる証拠を見せさっしゃい」

証拠呼ばわりせられたその時に、法然様はにっこりとお笑いになりまして、

「顕真殿よ、顕真殿よ、顕真殿よ、念仏の優れた証拠を見せというお言葉でございますが、念仏の優れたいわれは沢山ある。然れども今ここに、然らば略して五つの証左をあらわすなり。一つにおいては万機普益なるが故に、念仏は優れまするぞよ。

二つにおいては万徳円満なるが故に、念仏は優れまするぞよ。
三つにおいては称えやすいが故に、念仏は優れまする。
四つにおいては、保ちやすいが故に念仏は優れる。
五つにおいては、時に叶うが故に、念仏は優れるぞよー」
さあ、五つの、オバチャン証拠出したぞ。お念仏の優れたいわれは、あまたあるに違いはなけれども、それほどまでにいわれるならば、いま法然は五つの証拠をあらわすぞやと。
「一つにおいては、万機普益なるが故に念仏は優れる。万機普益なるが故に念仏は優れる。万機普益というのは、念仏には機に選びのないのが、弥陀の本願じゃ。そのもと達の御宗旨、四家大乗の御教えはいかにもいかにも法は優れておるに違いはなけれども、その対機なるもの相手なるものは、上代上智の知者や、善人聖者方が相手ではないか。末代に生まれた下根・下劣の凡夫は相手ではござらん。仏成道の朝、お説き下さいましたのが大方広仏華厳経というお経様。あの華厳経御演説のその時には、舎利弗文殊の方々でさえも、聾唖の如く解することかなわぬというて、何処へやら逃げられたそうな。舎利弗・文殊様も解らんような法門が、末世末代に生まれた悪人凡夫の解る道理はござりません。ただそれを喜んで聞かれたのは六大菩薩と善財童子のみではござらんか。これ明らかに、これ明らかに、機に選びがあるではござらんかいな。
また法華の法門にしましたところで、法華経の譬喩品の中に何と説いてある。法華経の譬喩品の中には、「無智人中莫説此経」と説いてあるでないか。無智な人の中、無智人の中には、この経を説いてはならんないやと。智慧もあり、精進もあり、利根であれ、多聞強識のものならば、この経を説いて聞かすべきと、法華経の中に説いてあるでないか。してみたら、愚痴愚痴の悪人凡夫の間に合わんではござらんか。
また禅宗の教えにしようが、真言の秘密にしましょうが、これ皆その人にあててのことであり、末世末代の悪人凡夫の機に相あおうものは一つもござらん。いま諸仏の本願を聞かば、願を望み給い、行を望み給い、布施を望み給い、精進を望み給うが、今時その諸仏の願に応ずるものが何人あろうかいや。願を望み給うても、こんな無善造悪のいたずらものは、とてもとてもかなわん。布施の行はといわれましても、こんな貧しい私にはどうして布施の行が勤まろう。精進といわれましても、懈怠無慚なこの凡夫では、とてもとても勤まる訳ではござらん。いずれを眺めてみましても、万機普益と銘打たれる法門が何処にあろうぞ。
しかるに弥陀の本願南無阿弥陀仏は、智者であろうが、聖者であろうが、悪人であろうが、善人であろうが、出家であろうが、在家であろうが、一人たりとも逃し給わんというのが、弥陀の本願、南無阿弥陀仏の六字なーりー」
一息ついた法然上人様、さらに
「第二番目には、万徳円満なるが故に念仏は優れるわいや、万徳円満なるが故に念仏は優れるぞよ。万徳円満なるが故に優れるというは、書いて六字の南無阿弥陀佛、称えてみたら半口にも足らぬ名号六字に違いはなけれども、世の善根功徳も皆この六字の中に納まるなり。三世諸仏の智慧も善根も功徳も全部、この南無阿弥陀佛の六字の中に納まれり。また釈迦一代の法門も、納めてみるならば、みな念仏の中に納まる。かかるが故に、法然の目から眺めてみるならば、華厳・天台・真言・禅宗いうまでもなく三論法相具舎成実、みなこの念仏の中に納まり、念仏の家来でござるわいや。かくが故にこの法然の目から眺めてみるならば、他宗他門はさらになし、なぜならば皆この念仏の中に納まるが故やぞーよー」
ここまで言われたそん時に、顕眞様は
「法然待たっしゃい。法然待て。今汝の語るところを聞いておれば、八家九宗が念仏の中に納まり、しかも念仏の家来なりとは聞き捨てられぬ今の一言。さあ、法然、みごと八家九宗、念仏の中に納まるものならば納めてみよ。他の宗旨はいざ知らねども、我のすすむる天台法華の法門が、みごと念仏の中に納まるものなら納めてみよ。大体念仏はその数僅かに六字ではないか。しかるに我のすすめるところの天台法華の法門は、法華八巻二十八品ある。法華八巻二十八品なるものが、どうして南無阿弥陀仏の六字の中に納まるもんか、それとも納まるもんならば、納めてみよ。万一法然、納まらん時には、何とするか。今のうちじゃぞ、法然、前言取り消しました、許してくださいませと、この顕眞の前に、法然、衣も袈裟も脱いでしもうて両手をついて謝罪するならば、今のうちなら許してやるが、それともみごと法華八巻二十八品、この南無阿弥陀仏の中に納まるもんなら納めてみよ。万一納まらんその時には、法然、ただで高座から下りられるとは思うなよ。覚悟を決めて返答せられよー」
さあこの時に三百八十有余人の天下の学者方も総立ちになりました。万々一法然返答出来んその時には、法然の衣も袈裟も脱いでしまい、高座から引きずり落としてやろう、念仏門を叩き潰すは今じゃぞと一同勢い立っておる。これを眺めた熊谷の蓮生坊に角張成阿、
「万々一オラのお師匠様に手をかけてみよ。指一本でもふれたら最後やぞ、どいつこいつの容赦がないぞー」
殺気がみなぎって参りましたこの場、しかるに一方の法然様は、少しの驚きの色も見せ給わずに、
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏
「顕眞殿よ顕眞殿よ、何という手厳しいお尋ねでござるかいなや。あんたはえらいお念仏を仇敵の如くに言われまするが、あんたの開山が天台大師ではござらんか。天台大師のお言葉を頂いてみれば、『阿字十方三世仏、弥字一切諸菩薩、陀字八万諸聖教』これ皆阿弥陀の三字に納まれりと仰せられたのは、あんたの御開山ではございませんか。南無阿弥陀仏の阿の一字の

中には、十方三世の如来がこもっておるぞと、大日如来も薬師如来も多宝如来も、一切の諸仏如来は南無阿弥陀仏の阿の一字の中にこもり給う。

弥の一字の中には一切の菩薩方が弥の一字の中にこもり、弥の一字の中には八万の諸経が皆こもり給うと仰せられたのに、もしやもし、あんたの御宗旨だけがこの南無阿弥陀仏の中に納まらんがならば、それは八万四千の法門の外の法門でござろう。八万四千以外の法門なら、それは外道の法門というもの。外道の法門ならばともかくも、釈迦一代教の法門ならば、皆南無阿弥陀仏の陀の一字の中に納まる道理でござりまするが、これは法然が言うがではない。あんたの御開山のお言葉ではございませんか。

如何でござるかいや顕眞殿、これでもどうや納まらんと言われまするか。納まらんと言うがならば、あんたの御教えは外道の法やぞ、正法ならば必ずこの陀の一字の中に納まるということを、言われたのはあんたの御開山ではござらんか。如何でござるか。納まりまするか、いや納まりませんか、いや顕眞殿よ、返答承りとうござりまするわいや」

と、向こうから持ち出した棒で向こうを叩いた形でござります。

これを聞かれましたところの顕眞様も、自分の開山のお言葉を引いてのお言葉なるが故に、納まらんと言うことも出来ず、納まるとも言われもせず、ついに返答に窮しましたところの顕眞様も、最前までの元気も何処へやら、ついに大きな体のやり場がなさそうでござります。ただ高座の上で鳩が豆でも食ったように見え、目ばっかりぱちりぱちりとぱちつかしております。最前までの元気も何処へやら、あまりにもこの無惨なこの姿を眺めましたところの、三百八十有余人の学者方が

「顕眞降りよ。お前では問答にならんわいや」と。

（「蘇る名説教選［節談説教1］大原問答　お説教　範浄文雄」CD　すねいる刊より文字化）

（参照　府越義博著「範浄文雄師口演　説教大原問答」）

③　大原問答（写本）

滋賀県大津市　浄宗寺蔵

大原問答　其三

顕真問テ云ク、即疾ニ生死ヲハナレ、頓ニ成佛ノ法門ハ、一代教ノソノナカニ、華天密禪ノ四ケノ大乗ノ法門ニキハマル、コレラハ娑婆即寂光唯心己心ノ法門デ、一念デ悟道シテ、生死ヲハナルル最上ノ法門デゴザル、念佛ハ有相執着ノ法デナイカ、夫ヲ一代教ニスグレタルルトハ、法然御坊ソリャ私ノ會通デアロウ、返答アラバウケタマハロウカト云ガ顕真和尚ノ問イジヤ、

法然上人ノ答ニ、イヤ法ハ平等ニシテ勝劣ハナケレドモ、全躰法ハナニノ為ジヤ、衆生ノ迷ヲ轉ジテ佛果ニイタラシムタメデハゴザラヌカ、念佛モ聖道門モ、法ニ勝劣ハナケレドモ、衆生ノ根機ニ引受ルトコロニ、念佛ハ餘法ニスグレタコトガゴザルト、

ソコデ大勢ノ坊主達、コレハ聞ヌコト、ナニガスグルル、サアソレヲキカフト詰カケル。ナレバマヅ念佛ハ機ヲエラビマセヌ、聖道門ハ機ヲエラビマスユヘ、愚者ハドウモナラヌ。智慧ガナケレバユカヌ、煩悩ヲ断ジタモノハヨイガ、貪欲瞋恚ノモノハ助カラヌ、スリヤ、アレノコレノト簡ビガアル、シカルニ念佛ノ法門ハ、欲ノヤマヌモノデモコイ、瞋恚ノオコルモノモコイ、愚者デモ智者デモ悪人デモ女人デモ、士デモ百性デモ、奉公仕官ノ身ノウヘデモ、商デモ職人デモ、袖ゴイスル非人乞食デモ、ナンデモ角デモエラビガナイ、ナゼエラビガナイゾトイフニ、阿弥陀如来ハ超世ノ別願ヲタテテ、十方衆生ト誓ハセラレタユヘニ、エラビガゴザラヌ、法華経ハ、法ハ頗ルウヅ高イケレドモ、方便品ニ難解難入ト説テアル、偖マタスグレタコトガゴザル、弥陀ノ名号ハ至テ唱ヘヤスイ、真言ニハ、ウンノ一字陀羅尼、アウンノ二字陀羅尼モアレドモ、唇舌牙歯喉ト云テ、牙ニカカル文字ユヘニ、三歳ノ童子ヤ、八十ノ老翁ハ、トナヘラレヌ、シカルニ、コノ念佛ハ弥陀五却ノ御思惟デトナヘヤスウ持ヤスイヨウニ案ジイダシテ下サレタユヘニ、牙ニカカリ齒ニカカル文字ガゴザラヌ。ヨリテ三歳ノ童子デモ、ハノヌケタ、八十ノ老人デモ、マヅトナヘヤスウゴザル、モシ舌ガノウテ、トナヘラレズバ、ココロニ信ズルバカリデ、南トモ无トモトナヘズト往生遂ル、マダスグレタコトガゴザル、コノ念佛ハ時ニ叶イマス。イカニ四ケ大乗ノ法ガスグレテモ、ナサケナヤ、五濁悪時悪世界ノニゴリキツタ我等ガ機ニハカナイマセヌ、タマタマ座禅観法ヲコラシテモ、亡念ノ雲ニオホハレテ、三諦ノ月ヲミルコトガナラヌ、迚モ末代ノ機ニハカナハ（ヌ）ユエ、大衆月蔵経ニハ、我末法時中億々衆生起行修道未有一人得者ト説セラレテ。聖道門ハ、娑婆即寂光ヲ自力デサトルユヘニ、下根ノモノハサトラレヌ、シカルニ念佛ハ、他力デ一念ニ往生ヲトゲサセテ下サル、悪人ホドナラ本願ノ御目的煩悩ノオヲキモノホド本願ノ正機ナルガユヘニ、四ケ大乗ノ法ニスグレタト云ガ、コノ法然ガ无理デアロウカトノ御コタヘジヤ。

なにごとも時ぞとおもふ夏来てわ錦にまさる麻の狭衣と

古歌ニヨミシゴトク、ナニホド錦ノ上着ガ見事デモ、六七月ノ大暑ノ頃ニハ用ニ立ヌ、暑氣ヲシノグニハ、ウスキ麻ノ帷子ガナニヨリノ宝ジヤ華厳天台ハ錦ノ上着ノ至極結構十法門ナレドモ、三毒五欲ノ大暑ノ機ニハ詮ガナイ、シカルニコノ念佛ハ、五濁悪世ノアツサヲシノケ、越後縮ノ大極上々、御誂ノ法門ナレバ、コレデ往生ヲヤスヤストトゲサセテモラウノガ、今日ノ在座ノ我々ジヤ、實ニ銘々ホドシアハセモノハアルマイガヤ、若シ両聖人ノ御苦労ガナクバ、念佛ノウス帷子ハアリナガラ、着ズシテ過サニヤナルマイニ、有難ヤ畳ノウヘニ膝カイシテ、イナガラ助タマヘトタノム一念ノ、立ドコロニ、往生治定トオサダメクダサレ、命終リ次第蓮華化生ノ證ノ身トハ、コノウヘモナイ仕合セジヤホドニ、舌ノ根ノツヅクアイダハ、タダオノレヲ忘レテ、南無阿弥陀佛、南無阿弥陀佛。

(二) 二河白道

① 『二河白道講話』

一切の往生人等に曰さく。いま更に、行者の為に一の譬喩を説きて、信心を守護して以て、外邪異見の難を防がん。

何者かこれや。譬へば人ありて、西に向ひて行かんとするに、百千里あらん。忽然として、中路に二つの河あり。一つにはこれ火の河、南にあり、二にはこれ水の河、北にあり。二河、各濶さ百歩、各深くして底なし、南北にほとりなし。まさしく水火の中間に一の白道あり、ひろさ四五寸ばかりなるべし。この道東の岸より西の岸にいたるに、また長さ百歩その水の波浪交はり過ぎて道を濕す、その火焔また来って道を焼く。水火あひ交りて、常にして休息すること無けん。この人既に空曠のはるかなる處にいたるに更に人物無し。多く群賊悪獣ありて、この人の単獨なるを見て、競来てこの人を殺さんとす。死を怖れて、直に走りて西に向ふに、忽然としてこの大河を見て、即ち自ら念言すらく。この河南北に邊畔を見ず、中間に一つの白道を見る。きはめてこれ狭少なり。二つの岸相去こと近しと雖も、何によりてか行くべき。今日定めて死せんことを疑はず、まさしく到りかへらんとすれば、群賊悪獣、漸々に来りせむ。正しく南北に避け走らんとすれば悪獣毒蟲競ひ来りて我に向ふ。正しく西に向ひて道を尋ねて、しかもゆかんとすればまたおそらくはこの水火の二河に堕んことを。時に當り惶怖することまた言ふべ可らず。即ちみ自ら思念すらく。我今かへるともまた死せん、住すとも亦死せん、ゆくとも亦死せん。一種として死をまぬがれざれば、我やすくこの道をたずねて前に向ひてしかもゆかん。既にこの道あり、必ず渡すべしと。この念を作す時、東の岸に忽ちに人の勸むる聲を聞。仁者ただ決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なけん、若し住せばすなは即ち死せんと。又西の岸の上に人ありて喚ふて言く。汝、一心正念にして直に来れ、我能く汝を護らん、すべて水火の難に堕ちんことを畏れざれと、この人既にここに遣し、かしこに喚うを聞て、すなはち自ら正しく身心に當て、決定して道を尋ねて直ちに進んで疑怯退心を生ぜず、或は行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等、呼でいはく、仁者かへり来れ、この道険悪なり、過ることを得じ、必ず死せんことを疑はず、我等すべて悪心ありて、相向ふこと無しと、此人、呼ぶ聲を聞くと雖も亦顧みず、一心に直に進んで道を念じて、しかも行けば、須臾にして即ち西の岸に到りて、永くもろもろの難を離れ、善友相見て慶楽すること、已むこと無らんが如しと

（『二河白道講話』高橋常雄著　大正一四年　四恩協会出版部刊）

② 二河白道　範浄文雄説教

佛阿難に告げたまわく、それ衆生ありて、かの国に生まるるものは、昔ことごとく正定の聚に住す。所以は如何。かの佛国の中には、諸々の邪聚及び不定聚なければなりーと。

我が祖、親鸞様は、浄土真宗にも譬えは沢山あるけれども、唯ひとつ完全無欠、一点の非の打ち所のないところのお譬えと言うたら、善導大師二河白道のお譬えであるぞと、聖人も生涯この二河白道をお喜びあらせられたのであります。

このお譬えは、総じていうならば、観無量寿経に説かせられましたところの、至誠心、深心、廻向発願心という、観経安心たる三心のお譬え、別していうならば、真ん中の深心のお譬えが、善導大師のこの二河白道のお譬えであります。

深心のお心は、愚鈍な私どもに手っ取り早く知らしてやりたいという善導大師の親心からして、お作りあらせられたのが、この二河白道のお譬えであります。

（中略）

たとえば人ありて、西に向かって行かんと欲するに百千の里ならん。

この西に向こうたということが、非常に喜ばねばならないのであります。

東から来て東へ戻る者もおる。南から来て南へ帰る者もおる。北から来て北へ戻る者もおる。

地獄道からこの人間世界へ生まれ出さしてもらい、結構な人間世界へ生まれ出さしてもらいながら、聞かれる御法も聞きもせず、朝から晩まで瞋恚の煩悩と、釘打ちのその日暮しをしておる人が、気の毒ながらまたぞろ、もとの地獄道へ帰りゆく者をさして、「東から来て東へ戻るぞ」。「南から来て南へ戻る者もおる」というのは畜生道より人間世界へ生まれ出さしてもらいながら、せっかく人間世界へ出さしてもらいながら、またぞろ貪欲の煩悩にほだされまして、もらえる宝をもらえずむなしく日暮らしをしておったなら、もとの餓鬼道へ帰らにゃならんぞよ。「北から来て北へ帰る」というは、畜生道からせっかく人間世界へ今出さしてもらいながら、またもや愚痴の煩悩に

ほだされまして、聞かれる御法も聞きもせず愚痴の煩悩にほだされまして、またぞろ畜生道へ帰りゆく者をさして「北から来て北へ帰るぞ」。

（中略）

しかるに今この二河白道は、東から来て東へ帰るがでない。南から来て南へ帰るがでない。たとえば人ありて、われの力で西に向こうたのではない。一度は聞かせにゃあかん、おかんの親の念力によって、向くような我でなかったれども、今日はいよいよ西向きにさしてもろうたということを喜ぶまいか。人あってという人は、誰を指しての人かといえば隣のオババをいうがでない。向かいのオジジをいうがでない。一人一人がこの人やと、喜ばしてもろうまいか。この人というのは一人一人と喜んでもらわにゃいかん。

「西に向かってゆかんと欲するに百千の里ならんや」。

百千の里ならん。西に向こうたということは、いよいよ浄土往生の兆しのできたということ。後生菩提の心のついた人をさして、これを西に向こうたとたとえられたと。

「百千の里」は千里を百集めた、千里を百集めるということは、何をあらわしたかというたら、浄土は遠いぞや。遠いぞや。浄土は遠いぞ、遠いぞ。お浄土は、おばちゃん、遠いぞ。遠いということは、百千の里ならんということは浄土は行けんぞや。行けんぞや。行けんぞや。行けんぞや。行けんということは、ただ行けんというがではない。行けるか行けんか我の生き様をながめてみよ。足もとをながめてみよ。ただ行けんというがではない。行けるか行けんかわれの足もとをながめてみよ。生き様ながめてみよ。ながめりゃながめるほど、行かれる値打ちがどこにある。参られる値打ちがどこにある。朝から晩、晩から朝にいたるまで、八万四千の煩悩と、釘打ちの日暮しをしておるようなこの私じゃもの、どっからながめてみても行けんぞや。行けんぞや。行けんぞや。行けんぞや。

行けんということは何をしらいて下さいましたか。行けんと気がついたならば、行かれん我であったと泣くがでないぞ。その行かれんお前を行かせにゃおかん親はここにおるぞ。そのよび声が西岸上のおよぼれ声。

行けるやつが行くならば、さほどありがたくもない。参られる者が参られるならば、あたり前じゃけれども、行かれん私が今日は行かしてもろうとは、なんというこの身は幸せ者であったやらなと。喜ぶなというても喜ばずにはおられないこの驚喜の世界、歓喜の世界へださしてやらにゃおかんの、善導大師の二河白道のおたといなり。

たとえば人あって、西に向かって行かんと欲するに、百千の里ならん。しかるに今、忽然として中路に二河あるを見る。向かって右側を眺めてみれば、水の河がどうどうと流れておる。左の方を眺めてみれば、炎の河が炎々と燃え上がっておる。

この河幅はおのおの百歩なり。水の河も火の河も河の幅は百歩やぞ。長さはと眺めてみたら、南北に辺がないぞ。南北にどこまで流れておるのやら。果てしもないというのが、この二つの河やぞ。川幅百歩というは、何を表いたかというたら、人寿百歳に例えるという。人間の寿命を百歳に例えてみるならば、この河幅は百歩である。しかも南北にほとりがないというのは、貪欲にも底がないぞ。瞋恚の炎にも底なしの恐ろしい河がある。その河がどこにあるのかい。死んでからあるがではない。この河のあり場所はにぎりこぶしで押さえて隠れる。おらやお婆の胸の中に、瞋恚の河やぞ。水の河やぞ。死んであるがではない。みんなここにもっとるがや、ここにもっとるが。

この水の河というは、貪欲の煩悩を表す。炎の河とは瞋恚の煩悩を表す。四、五寸の白道というは四大五蘊に例えるなり。人間五尺の体に例えたのが、四、五寸。白道というのは法の上からいうならば、本願の白道、機におろいてみるならば、信心の白道。

さ、ここやぞ。水の河と炎の河が四、五寸の白道の上に襲いかかる。水の河がひいたかと思うておると火の河、火の河がやんだかと思うておると水の河。ある時にはまた水の河と炎の河とが一時に四、五寸の白道の上にかぶってまいります。貪欲の煩悩と瞋恚の炎を抱えた私なるがゆえに、聞いても聞いてもいただかれない。

しかるに今この人、静かに自己の身辺をながめたその時に、ああ、無人空曠の沢である。善導様は、あー、人がおらない、無人空曠の沢であるわいや、人がおらんわい、寂しいわいや、寂しいわい。

「善導様や、人が少のうて寂しいのでございまするか」と尋ねて見たら、

「少のうて寂しいというがではない。大勢おっても寂しいぞや。」

「なんで大勢おるのに寂しいのです。」

「寂しいというのは、人が少のうて寂しいというがではない。本当に自分の心を知って、泣いてくれるものは一人もおらなんだなぁ。今まではにぎやかな人生のように思い、親もあるわい、兄弟もあるわい、親類縁者もあるわいと、にぎやかな人生のように思うておりましたが、いよいよいよいよ静かに自己をみつめてみたその時に、ああ、無人空曠の沢であったわい。一人ぼっちの我が身であり、意見をしてくれる者もおる、教えてくれる者もおるかは知らねども、本当にオラの心を知って、泣いてくれる者は一人もおらなんだなぁ。

いよいよ良い所へ気が付いてきたのであります。今まで私どもはにぎやかな人生のように思うておりましたが、かくは味わさしてもろうたならば、ほんに当てにならんものを当てにし、力にならんものを力にし、滅び行くものにこれすがっておった。独生、独死、独居、独来、一人生まれて、一人否でも応でも死んでいかねばならんが、この身であったわいという。孤独の我が身に今日は会わさしてもろうた姿を、善導大師は

「無人空曠の沢なり」

「行かば死せん、帰らば死せん、留まらば死せん、八方ふさがり、聞いても聞いても仕上がらんが我の根性。頂いても頂いても解決の出来んが我の胸元、この胸元ひとつをどうしたらよかろうやなと案じわずろうておるその時に、今、東岸にお姿は見えねども人のすすむる声を聞く。

「汝、ただ決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難無けん。」

今また西岸上には人あって呼んでいわく。

「汝一心正念にして直に来れ、我能く汝を護るぞーよー。」

③　加典兄妹　範浄文雄説教

今から約一千年程前の話です。簡単に申しますが、ところは朝鮮の京城。この京城に釣鐘作りの名人で加典というお方がおられましたが、ちょうどその時慶州の都におきまして王様が亡くなりました。新しい王様が位につかれまして、その新しい王様が父菩提のために、いま梵鐘供養の発願をしられました。幸いにしまして、朝鮮京城に釣鐘作りの名人がおるということで、早速この加典名人を慶州の都に呼び出しました。王様の前へ出られましたところの加典名人は、

「お呼び出しにあずかりまして伺いました。」

「遠路わざわざご苦労であった。ほかではなけれども、我は亡き父菩提のために梵鐘供養の発願をたてた。汝ひとつ腕をふるって、未来永劫に鳴って鳴って鳴り渡る名鐘をひとつ作ってくれ。」

言われまして加典名人は一世一代の光栄なりと感謝感激をいたしまして、早速釣鐘を作るべく仕事に取り掛かりました。ところがこの名人気質と申しましょうか、なかなか自分の思うとおりの釣鐘ができない。作っては壊し、壊しては作って、そうこうしている内に極度の神経衰弱になってしもうた。神経衰弱に落ち込んだ加典名人は、仕事はしない、毎日毎日やけ酒ばかり飲んでおります。王様のほうからは矢のような催促。「いつになったら釣鐘ができるのか。」「いつになったらでき上がるか」と、矢のごとく催促でございますが、加典名人一向に仕事をしない。毎日毎日やけ酒ばかりを飲んでおる。月日が経つのは早いもの、一年経ち二年経ち早三年の年月が夢のごとくに過ぎ去ったれども、いまもって鐘は仕上がらないという状態。

話変わって、この加典名人の妹がよそへ嫁いでおりましたが、不幸にしまして夫に死に別れた。いたいけなる小娘をかかえて妹さんが兄加典の所に戻ってまいりました。

「お兄さん、世間ではお兄さんのことをいろいろ悪口雑言云っております。私は兄妹として聞くに忍びません。お願いでございます。及ばずながら私もこれから出来るだけのお手伝いをさせてもらいますほどに、一刻も早く一日も早く立派な鐘を作って下さいませ。」

と兄を励ましました。しかしながら加典名人一向仕事はしない。相も変らずやけ酒を飲んでおりました。

ある日の事、妹さん、門に立ってぼんやりと空をながめておりましたその時に、村の若い人五、六人加典の工場の前を通りかかって、

「はぁ、これが加典の工場かい。朝鮮一の釣鐘作りの名人やと大きな触れ込みしやがって、ここに来てから何年になる。いつになったら釣鐘が仕上がるのやら。名人と聞いてあきれるわい。」

とあざけり笑う。これを聞いたる妹さん、猛獣のほえる声になって聞こえてならなんだ。悔しいやら残念やら、兄さんさえ鐘を作って下されたらこんな悪口聞かずにすむものと、目に涙を浮かべておりましたその時に、またもや若い人々通りかかりながら、

「はぁ、これが加典の工場かい。朝鮮一の釣鐘作りの名人と云うても、やはり年が寄ったのかな。麒麟も老いれば駑馬に等しいと云うが、まあこれではいつになったら仕上がるもんだろうか。」と、これまたあざけり笑うて行く。ますます残念やら悔しいやら、歯をくいしばっておったその時に、いずこともなくも飄然とそこへ通りかかった白髪の老人、誰に云うともなく語るともなくつぶやいた言葉が

「気の毒なのは加典。昔から言うておる。立派な鐘を作る時にはただ出来ない。人柱をたてる。人柱をたてねばならない。」

これを聞かれましたところの妹さん、暗夜に灯火を得たような気持ちがした。

早速加典のところへ駆け込んでまいりまして、

「兄さん、鐘が出来ました、仕上がります。出来ました、兄さん、鐘が仕上がります。」

「妹よ、お前気でも狂うたのじゃないか。」

「いいえ違います。鐘が仕上がります。出来上がります。」

「妹、たやすく出来てたまるものかい。」

「いいえ、違います。私は今聞きました。立派な鐘を作るときには、人柱をたてねばならんと聞きました。兄さん、どうか早く人柱をたてて、一刻も早く立派な鐘を作って下さいませ。」

「妹、人柱をたてる、人柱をたてて早く立派な鐘を作るというか。それくらいのことはこの加典も知っておる。」

「兄さん、知っておりますか？」

「知っておるとも、知っておればこそ、この加典は苦しいのだ。わしは尊い人の命まで犠牲にして鐘は作りたくない。我は権門の徒でもなければ、売名の輩でもない。だから兄は苦しんでおる。」

「兄さん、それではどうかお願いです。一刻も早く人柱をたてて立派な鐘を作って下さいませ。」

「妹、お前は最前から人柱、人柱と簡単に言うが、いったい誰をたてるつもりか。」

「兄さん、あれを見て下さい」

と指差した方を見てみると、今年八つになるところの我が娘。

「あの子をどうか人柱に。あの子は身も心も白蓮華。さぞや天の神・地の神もお受けくだされるに違いない。」

「妹、お前はあの子を人柱にあげるつもりか。あの子はお前にとってたったひとりのかわいい子、亡き夫の形見。兄にとったとて、たったひとりのかわいい姪の子、どうしてあの子を、そんな死なす、人柱にたてることが出来ようか。」

「兄さん、死なすんじゃない、殺すんじゃない。どうか兄さん、あの子を本当に生かしてやっていただきとうございます。大王様菩提のためばかりじゃない。亡き夫菩提のために、あの子をどうか人柱にたてて、そのかわり立派な鐘を作り、幾千万の後までも、鳴って鳴って鳴り渡る、仏の声を出す鐘を作って下さいませ。お願いです。」

これを聞かれましたところの加典名人、初めはがんとして受け付けなんだ。しかしながら再三再四の妹の熱意に、ついに心を動かされた。いまの加典名人、

「それほどまでに妹、言うならば、いかにも、いかにも、そなたの云うとおりに立派な鐘を作り、幾千万の後までも、鳴って鳴って鳴り渡り、悩める人々の魂を揺り起こすところの仏の声を出す鐘を作るぞよ。」

芸術家本来の姿にたちかえりました加典名人、早速工場へと入った。やがてこの加典の工場からは炎々と紫の煙がふいてきた。やがて準備万端整えられる。加典名人はくだんの小娘に対しまして、

「どうか人柱にたっておくれ。」

やがてこの小娘に着替えをさせる。身は白衣に着替えをさして、手には赤い数珠一連をもたした。母親が静かに子供の頭を撫ぜながら、

「なんにも言わずに、どうかお父さんのところへ一足先に行って下さい。やがてこのかあさんも、おっつけ後からまいりますほどにな」と言うて聞かしたその時に、いまの子供は分かってか分からないのか、ただ素直に頭をうなだれ、それを聞いておる。やがて準備万端整えられた。あの紫の煙をふいた溶銅が型の中へと、ドウドウ、ドウドウと流し込まれておる。

加典名人、くだんの小娘を小脇にかかえて「妹、許せ。娘、堪忍してくれよ」の心の内。やがて紫の煙をふいて流れておるあの溶銅の真っ只中へ、くだんの小娘を投げ込んだ。投げ込んだ瞬間ただ一声、

「カアチャ〜ン」

「カアチャ〜ン」と叫んだが最後、すでに小娘の姿はもはや木端微塵になって跡形もなし。あまりにも無惨なこの場の光景、さすが気丈夫な加典兄妹もその場にばったりとうち倒れた。

やがてこれではならんと、こころひとつをとり、せめてもの小娘の思い出にと、その釣鐘の横のところに小娘の姿をば刻み込みました。

かくて、いよいよ釣鐘が出来上がった。慶州幾十万の人々は、深い眠りに閉ざされておるときに、やがてその鐘がゴーンと鳴りだされる。今まであざけておった人も、笑うておった人も、やがてその鐘の音の前には、皆、懺悔の涙を流しております。

加典兄妹どうしておりましたか。数年間のその間、心骨注ぎ、かわいい娘まで、小娘までも犠牲にしたこの鐘じゃもん、鳴って鳴って鳴り渡るよう、そして仏の声を出す鐘ができてくれよと、いよいよここに梵鐘撞き初めの式とあいなりました。

時は十二月の八日の事です。おりしも雪はどんどん降っておる。加典兄妹、朝早くから鐘楼堂の所へまいり、今か今かと、その供養の式を待っておる。やがて第一声がうちなりだされた。

「ゴーンゴーン」

「おぉー、命の鐘じゃ、血の鐘じゃ。鳴って鳴って鳴り渡れよ。数年の間、心骨注いだこの鐘じゃもん。迷える人々の魂を揺り動かすところの仏の声をだいてくれ。」

またもや

「ゴーンゴーン」

「鳴った、鳴った。鳴れよ、鳴れよ、鐘よ。仏の声をだいてくれ。」

またもや鳴りだされるその時に加典、妹に向いまして

「妹や、お前、あの鐘が聞こえるか。」

「兄さん、なんにも聞こえません。」

「あぁ、お前にも聞こえんか。」

またもやゴーンと鳴り出される。

「どうや妹、聞こえるかい。」と尋ねられていまの妹さんは

「兄さん、なんにも聞こえません。」

「あぁ、お前にも聞こえぬか。このわしにも聞こえん。」

またもや撞き出される。

「どうや妹、聞こえるかいや。」と尋ねられましていまの妹さんの答えるようには

「兄さんや、兄さんや、最前からひとつひとつ、ただ聞こえてくるものは、あの最後の一言『カアチャ〜ン』という声より他に聞こえませぬ。」

「お前もそうか。いかにもいかにも、この兄も、最前からひとつひとつ聞こえてくるものは、あの最後の一言、ただあの『カアチャ〜ン』という声より他に聞こえない。心ない人が聞いたならば、なんといういい鐘やら、なんといういい音色やらと聞くかしらねども、我々兄妹に聞こえてくるのはあの最後の一言、ただ『カアチャ〜ン』という呼び声より他にないぞよ」

さ、ここやぞ。今もちょうどその如くや。南無阿弥陀仏の呼び声は、心ない人が聞いたならば、なんでもないがに聞こえるか知らねども、今こそ内部感覚の心の耳をすまして聞かしてもろうまいか。一声一声のあなたの呼び声が、ただ「衆生可愛いやな、可愛いやなぁ」

可愛い、可愛いの呼び声、五劫思案の涙のかたまり、兆載永劫の修行のかたまりやぞ。血肉のかたまりが、南無阿弥陀仏の呼び声、

「離れて離れられる衆生なら、なんでこんな苦労しようぞよ。どうしてみても離れられん汝なるがゆえに、汝の万行までこの弥陀が努めて助けるに間違いないの姿が、いまの南無阿弥陀仏の六字の姿やぞ」

血の叫びやぞ。肉の呼び声が

「一心正念にしてただちに来たれ、我よく汝を守らん。すべて水火の難に堕せんこと恐れざれ。落ちる、落ちんの心配止め、落とさん親を力にせよ。汝参らにゃならんと焦るがではないぞよ。参らにゃならんと焦るよりも、参らせにゃおかんの親がここにおるわい。落ちてはならんと力むよりも、落とさん万力を聞いてくれよ。落とさん万力ひとつを聞いてくれよ。汝、落ちると気がついたは、ただ今なれども、この弥陀は塵点久遠のいにしえから、見抜いたりゃこそ、親は泣いたわい、泣いたわい。親が長い間泣いたのは、ただ泣いたがでない。可愛い汝に泣かせるくらいなら、親はこれほどまでには泣きはせなんだぞよ。」

「見込みが立たんと泣くがでない。その見込みの立たん機ひとつを見込んだ親がここにおるぞよ。」

呼び声が、西岸上の御勅命であったぞと、知らいてくださいましたのが、善導大師の二河白道譬喩の御懇ろであったと頂戴をさしていただく次第であります。

（「甦る名説教選〔節談説教1〕二河白道　お説教　範浄文雄」CD　すねいる刊より文字化）

（参照　府越義博著「範浄文雄口演　二河白道説教」）

二　法話

㈠　本山御焼失再建引立座法話

文政十年（一八二七）

「文政十年仲秋下旬廻寺厳命之刻
江州成満寺様講師より就御焼失御再建引立座
拾五ヶ条法話　雲龍山麓　願慶寺」
南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵

コノ信領解ノ上カラハ、御公義ヨリノ御法度ヲ疎略ニイタサヌヤウ、地頭領主ノ掟ヲ違背セヌヤフ、限リアル年貢所当ヲ細ニ沙汰ヲイタシ、所ニアリテハ庄屋年寄上立人ヲ敬ヒ、諸役人ニハ不礼ノナキヤフ、仮令五合三合トリテ触アルクモノナリトモ、御公義ノ役人ナレバ疎略ニ致ヌヤフ

一、御本山ヨリ仰出サルル御安心ノ通リ違背セヌヤフ、御安心ノ趣ハ昨日キキテモ頼メ助ク、今日キキテモタノメ助ク、京デキキテモ田舎デキキテモ、筑紫鎮西、ヲノコロ嶋、淡路島、小豆嶋、八丈ヶ嶋、喜界嶋カラ佐渡ヶ嶋、兵庫ノ嶋ヨリ四国ノ嶋ノ果テキキテモ、御当流ノ御安心ハ六百年ノ昔ヨリ今日唯今コノ御座迄、微塵イササカ変ノナヒハ相承有縁ノ大善知識ノ御教化ナレバ、コノ御恩ヲ忘ヌヤフ

一、他宗他門ヲ謗ヌヤフ、イヅレモ釈迦一代ノ説教ナレバ如説ニ修行セバ、ソノ益アルベシトハ御文ノ御教化、他宗他門ノ御方モソノ宗門ノ教ノ通リ修行ガ出来ズバ弥陀ヲタノミメサレ宗旨ガヘスルニ及ズ、珠数キレテハナヒ、御生霊祭リナガラ願モイラズ、行モイラズ、頼メ助ノ御誓願聞、其名号信心歓喜ノ御謂ヲ聞テ、往生治定ノ領解ニナルガヨヒゾヤ、御当流人々モ他宗他門ヲ聞テ謗ルハ、釈迦如来ノ御頭ヲ泥足デ踏モ同様、三世諸佛ノ御胸ヲ八千丈ノ剣ヲ以テ切サクモ同様、自法愛染故毀咎他人法雖持戒行人不免地獄苦トハ八宗ノ祖師竜樹菩薩ノ御誡メ、佛ニナラレヌ宗旨ヲ釈迦説教シ玉フ筈ガナヒ、又、公義ニモ立置玉フヤフハナヒ、蟻ノ家ハ上カラハヒル、蜂ノ家ハ下カラハヒル、人間ノ家ハ横カラハイル、即融通ノ上カラハイル、天台ノ教モアリ、五性格別ノ下カラハイル、法相宗ノ教モアリ、横超直道ノ横カラハイル当流ノ御教化モアリ、教ユル道ハ変レドモ、分登ハ麓ノ道ハ多ケレド、同高根ノ月ハ一躰諸法十方平等利益ソノ宗旨くノ開山ノ教ノ通リ間違ノナキヤフ、切支丹ナゾ宗門ノ邪宗ヲ行ヌヤフ、大切ニ釈迦ノ正法ヲ守リメサレ

一、諸神諸菩薩ヲオロソカニセヌヤフ、和光同塵ハ結縁ノ始メ、八相成道ハ利物ノオハリナレバ、假ニ神ト現レテ珍ナル縁ヲ以テ夫ヲ便メ、ツ井ニ佛法ニ引入シメン為、諸ノ神トハ現玉フ程ニ神事祭ノワクトキハ王法ジャゾヨ、礼儀ジャゾヨ、モロくノ神様ハ各ノ為ニハ御先祖ジャ程ニ、御礼参ハアリウチノ事、シカシ神ノ御前ヘ出テ浮世ノ願ヲ申ヌヤウ、現世ノ御元心申テ神慮ヲ苦ヌヤフ、唯南无阿ミダ佛ト御称名ヲ喜ハ、神様ハドヲオシヤル、千早振ル玉ノ簾ヲ巻上テ念佛ノ声ヲ聞ゾウレシキト御喜ビアラセラルルガ、加茂ノ明神ノ御詠歌ナリ

一、師匠寺ヲ疎略ニイタサヌヤウ、宗旨印形ノ御影デ国処ニ住ヲナシ、往生程ノ一大事ヲ教テモラヒ、死ニ骸ノトリオサメ、ソノウヘ三年七年之忌佛事ノ問ヒ訪ヒ、死タ後迄御世話ニナル、師檀ノ間ハ親子ジャ程ニ、師檀睦ク御法ヲ悦ヒ、先祖佛事ノソノトキハ家内中カ為ナリ、参詣恭敬ノイトナミヲナシ、御報謝ノ称名ヲ大切ニ喜ガヨヒ

一、カリソメニモ盗ミ根性ヲ出ヌヤフ、盗テ金持ニナルナラバ京・大坂・江戸ノ泥者共巾着切ハ日本一ノ金持ニ成ソフナモノナレド、コノ日本ハ神国デ、正直ヲ本トスル国ナレバ、邪ナルモノハ天罰ヲ蒙リ、広世界ニ五尺ノ身ノオキ処ナキ身ノ上トナリ、未来ハサテオキ、現在御公義ノ御仕置ニオコナハルルハ眼前ノジャ程ニ、領解治定ノ上カラハ、随分身ヲ大切ニ嗜ミ、正直正路ニ身ヲ守レバ神国ノ礼ニ叶ヒ、佛ノ金言ヲ不背意タニ誠ノ道ニカナヒナバ、祈ズトテモ神ヤ守ン

一、国ニアリテハ殿様ガ大事、所ニアリテハ村ヲオサムル役人ガ大事、家ニアリテハ亭主ガ大事、亭主ガ領解ヲイタサネバ家一軒ハ闇夜ジャゾヤ、亭主ガ早ク領解スレバ、女房モ御領解スル、娘ヤ孫ハ申ニ及バズ、一季・半季ノ水任奉公、小女郎ハシタニ至迄、亭主ノ威光ノ位ニヨリテ内ノ家内ガ皆領解スル程ニ、朝ハ露ヲ払ヒ、夜ハ星ヲ頂キ、権助、三助、お繁おカルト迫仕ヲ手柄ニセスト、過去前生ヲ尋レバ皆親子ジャ程ニ、朔日・節句・門日・祭リノソノ時ハ、給銀ノ外ニ、五十ト三十ノ散銭ノトラセテナリト御法座ヘ参セテ喜バスルガ、手ニ珠数カケル亭主ノココロヘジャ程ニ、御経ヲ観バ、牛デモ午デモ犬デモ猫デモ過去前生ノ因縁ガナケレバ、カハレヌトハ雑宝蔵経佛ノ金言、然ハ亭主一人御領解ハ如来様ヘノ御報謝、御開山ヘノ御胸ヤスメ、善知識ヘノ御手伝還相回向衆生済度ノ手習ジャ程ニ、早ク領解シテ御慈悲喜ビ御恩称名ヲ喜レヨ

一、大酒飲デ喧嘩セヌヤフ、天下御法度ノ博奕セヌヤフ、我カ己カノ我慢ヲイタシテ、モノ知リ皃セヌヤフ、山ゴトヲモクロマヌヤフ、舌ヲ二枚仕テ虚イハヌヤフ、人ニ語云テアヤマタヌヤフ、商ニ高利ヲ取ヌヤフ、借タモノハ質鉢オヒテ払ウヤフ、借ルトキノ夷皃、ナストキノ閻魔面、借テモドサヌハ表向ノ盗人ジャ程ニ、カリタルトキノ嬉ノ御恩ヲ忘ズニ、三度ノ食物ハ、カタケ喰テモ勘定スルガ信領解ノ上ノ嗜ジャ程ニ、人ハ一代、名ハ末代、立鳥モアトヲ濁ナ、虎ハ死デモ皮ヲ止ム、人ハ死デモ名ヲ残ス、捨行娑婆土トモ悪レテ死ノフヨリ、褒ラレテ浄土参ヲスルヤフニ、身ヲタシナムガ肝要

一、富貴ナルモノハ貧ナルモノヲ憐ミ借テヤルヤフ、妻子珍宝及王位臨命終時不随者トハ釈迦ノ金言銭一文、紙一枚持テ往レヌ未来ナレバ、随分憐ヲカケテヤルガヨヒイゾヤ

一、主人ハ家来ヲ无理ニ仕ヌヤフ、家来ハ主人ヲ敬ヒ、主ノモノヲ疎略ニセヌヤフ、鼻ノ下ヲ養ヒ、五尺ノ身ヲコヤシテモラヒ、ソノ上ニ五両三両ノ切リ米ヲ貰フ御恩ヲ忘ヌヤフ、主ト病ニカタレヌトハ、世間ノ諺、薬ガヨケレバ病ハナヲル、三千億百无数世界天地大空ノ下ニカタレヌモノハ、主ト親ト合点シタガヨヒ

一、女房ハ夫ニ随ヒ、忠臣ハ二君ニ仕ズ、貞女ハ二夫ニマミヘズトハ外典ノ戒メ、夫ヒトリ持ハ女ノ嗜ミ、若ワキヘココ

ロヲフリ、不義不埒ヲスルヤ最後、未来无間阿鼻地獄ニ随在シテ、血ノ池ニテ无量劫ガソノ間ダ、蛇ニセメラレ、或ハ剱ノ山ニテ身ヲ八ツザキニサカルルトハ、正法念経大智度論、近クハ源信僧都往生要集ニ御説遊タ程ニ、知ヌムカシハ是非モナシ、聴聞シタ上カラハ、随分大切ニ身ヲ嗜ガヨイゾ

一、大慈大悲ノ阿ミダ如来御恩ヲ喜ブベシ、久遠劫ノ昔ヨリ、此身此侭御助ナサルル御誓願、生々世々ノ初コトニ、カカル難化ノ徒モノヲ御助ナサルル御慈悲ノ程、信受納得ノ出来タ身タハ御恩報謝ノ称名ヲ喜ビ、行住座臥時処所縁ヲ嫌ズ、不浄ノ寝屋ノ中ニテモ、世話仕事ノ折々ニモ、寝テモ、亦、起テモ、絶ヌ世ノ人ノ南ムアミダ佛トイフゾウレシキ、亭主ハ佛檀ノ御ウマヤヒヲ申上テ、息子ハ御花ノ水ヲカヘ、曽父ヤ祖母サノ香ヲ焼キ、女房ハ頭ニ帽子ヲカケ御佛飯ヲ捧ゲ奉リ、此世バカリノ親子デハ残多コトジヤ程ニ、未来デ同一蓮托生、百福荘厳、満徳金子、花降ル御浄土ヘ目出度往生ヲ遂奉リ、御先祖ヘモ御目ニカカリ、不便可愛ノ孫子ニモ逢ヒ、娑婆永劫ノ憂ツラサヲ昔物語ニ寛々ト、不生不滅无量劫ガソノ間、楽ミヅクメノ境界トナシ下サルルコトノ難有ヤト思ハバタダ南ムアミダタ佛くト喜ベシ

一、家一門睦ク、家ニアリテハ親孝々、身躰八腑ハ親ニ貰タモノナレバ、親ヲ尻目ニ、ニラマヌヤフ、親ニ口ガヘシイタサヌヤフ、三ツ四ツ五デ商ヒ、世度スルモノハ、広ヒ世界ニ獨モナヒ、十五十六嫁入盛リ、十八十九ノ養子サカリ、人間獨リト育テ上ゲ、仁義、無常ノ道ヲ覚ヘ、今ハ自力他力ヲキキワケテ、阿ミダ如来ヲ御タノミ申シ、死ナバ浄土ヘ参ナン、生ナバ念佛申スベシ、死テモ生テモドチラヘコケテモ喜ビヅメノ境界トナツタハ御両親ノ御養育ノ御カゲジヤ程ニ、親ノ大恩、山ヨリモ高、海ヨリモ深シ、報セズンバアルベカラズ、娑婆一生ノソノ間、左右ノ肩ニ頂テモ、父母ノ御恩ハカヘサレヌトハ、父母恩愛経ニ長々ト御教化ジヤ程ニ、知ヌ昔ハ是非モナシ、爰ノ道理ヲ聴聞申タウヘカラハ、父母ノ御恩ノ忘ヌヤウ、如来様ヨリ二番目ノ大切ハ親ナレバ、随分孝行イタシタガヨヒ、親ニ孝行スルトキハ、吾子モ我ニ孝行スル、ココノ道理ガ、耳カラ心ヘ届タラ父母ニハ孝行ツクスベシ、孝ノ道ヲ守ルトキハ梵天、帝釈、四天王、日輪・月輪、空ニ周キ星ノ数々踊リ上テ御喜ビ、肩ヲハナレズ、御守リナサルルゾヤ

一、姑ハ嫁ヲイジラヌヤフ、嫁ハ姑ノ隠口ヲイハヌヤウ、イジル姑ガ明日死ヤラ、イジラレル嫁ガ今日死ノフヤラ、老少不定ノ世界ジヤ程ニ、過去前生ヲ尋レバ、実ノ親デナヒモノハナヒ、実ノ親ト思ナラ、孝ノ道ヲマメヤカニ尽シ、親ノ機ヲヤスメル様ニ身ヲ嗜ガヨヒゾヤ、親子・兄弟・嫁姑・夫婦中ノ悪ヒノハ、夫ノ貧亡ノ元ヒジヤ程、家内睦ク御法ヲ喜ガヨヒ、最早五十三才ノ定命スゴセバ、化物仲間トハ雑宝蔵経ノ佛ノ金言、曾父サ祖母嫁子ニ身代渡タ上カラハ、化物ガ浮世ノ世帯ヲカマフ道理ガナイ、嫁子ガクレルモノナラバ、茶粥・白粥・小豆粥、影星ノ見ルナヤフナ雑水デモ、腹ヘサヘ入レバ貪着セズト、手ニ珠数カケテ寺参、杖ヲ力ニ御法ヲ喜ビ、家内睦クナケレバ、寺参モ気兼ガアル、中ガワルヒト御法ガ喜ヌ、跡ハ野トナリ山トナリ、風吹バ吹ケ、雨降バ、降レ、寺参ガヨイ程ニ、コノ世ハ長テ十年、短テ五年、老少不定ナレバ今モ知ヌ命ジヤ程ニ、未来ノ一大事ハ金デカハレヌト思ヘバ随分喜レルゾヤ

一、兄弟中睦フ、兄ハ弟ヲ憐ミ、弟ハ兄ヲ敬ヒ、姉ハ妹ヲ憐ミ、妹ハ姉ニ随ヒ、兄弟ハ他人ノ初トハイヒナガラ、天地青空ノ下ニ住モノニ兄弟程ニ血脉ノ深キモノハナヒ程ニ、同ジ領解ニナリテ御法ヲ大切ニ喜ガヨヒ

一、寄添暮ス夫婦ノ中モ、モトハ他人トハイヒナガラ、過去前生ノ約束ナレバ、我夫ト女房トナリ、跡シキトラス子迄アルナラバ、五合三合、百、二百ノ間違デ退クハ去ハト夫婦喧嘩ヲセヌヤウ、袖ノ振合多生ノ縁、往来ノ煙草ノ火ヲカルサヘモ因縁ガナケレバカラレヌト何況ヤ、一ノ釜ノ飯ヲ喰モ、過去前生ノ因縁ト思ハバ互ニアキラメテ、笑テ暮ガ領解ノ上ノ嗜ヂヤ程ニ、楽ハ春ハ花、秋ハ月、夫婦中宜三度ノ食モ笑兒、笑門ニハ福来ル、瞋ル門ニハ禍来ル、粋甘辛渋顔シテ亭主ハ女房ヲイヂラヌヤフ、三百六十日ノソノ間、長ヒ月日ノ事ナレバ、一度ナラズ二度ナラヌ三度ノ飲喰ノ世話ノ事ナレバ、可愛孫ニ引サレテ、出来ソコナヒハアリウチジヤ程ニ、イヂルイトマガアルナラバ、箸ノ先ヨリ落ル雫迄、大悲ノ身ジヤ程ニ、押頂テタヘルガヨヒゾヤ

(二) 本山講師演説集　文政十二年(一八二九)

「両華院嗣四席演説集」(南砺市西赤尾　行徳寺蔵)

大嶺師

今日ハ諸国詰所世話方並ニ諸職人・人足手伝ヘ、従来御示シノ趣キヲ、尚更篤ト申伝ル様ニトノ仰セニテ、辰刻・未刻両座ノ演説ヲ仰セツケラルル、

誠ニコノ娑婆世界ニ生レ出テ有ル各々我等カ有様ハ、依正ニ報トモニ有為転変ノ習ヒニテ、

依報ト云ハ、此国土、家ノ蔵ノ金銀財宝、衣服飲食、数ハ都テコレヲ依報トナヅケテ、

正報ト云ハ、人各々ノ我ガカラダノ事ニテ、此依報モ正報モ、トモニ暫モ油断ノナラヌアダ(虚)ニハカナキ有願、サレドモ、各我等ハ顛倒(テンドウ)ノ妄念トテ、常楽我浄ノ四顛倒ノ妄念ニクラハサレテ、ナニモカモ取違ヘ斗リヂヤ、

常顛倒ト云ハ、不浄ナルモノデ、常住ト思フコト、此世ノハカナキ事ハ、日々目ノ前ニ見ナガラ我身ノ上トハ引受ズニ、此娑婆ヲ常住ナル移リ変ラヌ所ト取違ヘテ、執着シテアルガ常顛倒ノ妄念ナリ、

楽顛倒ト云ハ、此娑婆世界ハ苦楽相雑リテ、人間ノ身ハ聊ノカ少シ斗リ喜ヒヂャト楽ミ思フコトモアレドモ、苦ノ多キ処ニテ、其苦ト楽ミトテ並ベテ見レバ、苦ノ多キコトハ大海ノ水ノ如ク、聊カハヅカノ楽ミ思フ処ハ牛ノ足形ノ水斗ノ如シト、御タトヘナサレテ有リ、

其タノシミト云モ、実ノタノシミデハナヒ、証リノ上カラミレバ、五道六道ノ間ハ皆ナ苦ミ斗リニシテ、

其苦キ処ヲ、其苦ミナル所ヲ、タノシミナル処ト取違テ、執着スルガ楽顛倒ナリ、

其次ニ我顛倒ト云ハ、一切諸法コトゴトク无我ニシテ、我レト云コトハナキモノナレドモ、各我等ハ无始已来、実ニ生死往生ワレアリト執着シテ、我ヂャ人ヂャトタテ担キヲシテ、驕慢ヲ起スガ我顛倒ナリ、

其次ニ浄顛倒ト云ハ、此娑婆国土ハ荊棘瓦礫(ケイソクガレキ ケガレ)汚ハテタルキタナキ世界デ、何ニモカモ汚穢不浄ナルモノナレドモ、ソレヲ清浄ナル竒麗(キレイ)ナ処ヂャト取違ヘテ執着シテアルガ、浄顛倒ナリ、

如斯ク常楽我浄ノ四顛倒ノ妄念ニクルハサレテ、我身ニサシカヽリテアル後生ノ一大事ヲ忘却テ、千却万却ノ仕合セノ、幸ヒニ南閻浮提ノ人身ヲウケ、猶更祖師聖人ノ御流ヲ汲得タル身ノ仕合ニ遭ヒナガラ、仏法ヲ耳ニハ聞ケドモ心ニハ信セズ、虚(ウカウカ)ケ徒ニ明シ暮テ露ノ命ノ終タラバ、本ノ珎シカラヌ地獄ノ猛火ノ中ニ落チ入テ、无量永劫出ル期アル事ナシ、

是ニヨリテ、去ル未ノ年(文政六年)ノ御焼失ノ御大変ヲ、善知識様大目縁ト御引受アラセラレテ、御化導ノ御本位頻ニ却ニナラセラレテ、御再建ヨリハ御門末ノ面々、各我等ガ極楽参リノ用意ヲ弥増ニ肝要ト御示下サルル、

京都ヲ始メ近国・遠国ノ末々迄テ、老若男女一人モ洩ザルヤウニト御受向ノ御教示ヲモ仰セ付ラレテ、御念頃ニ御示下サレ、尚又御直命ニハ銘々各々後生ノ一大事ヲ取損セヌヤウ、一日モ片時モ疾ク安心領解ノ上ノ報謝ノ念仏ヲ称ヘ、尚、此上ニハ王法仁義ノ掟ヲ守リ、領主頭ヘモ疎略ノ義ナク、国恩ノ深キコトヲ忘レズト、急ゲ々々ト御示シ下サレ、

是即チ蓮如上人、佛法ノコトヲイソゲイソゲト御示アラセラレタルヲ御伝ヘ下サレテ、一日モ片時モ急ゲト御引受下サルル、

然ルニ御流汲ノ御門末、カカル御実意ノ御化導ヲバ余所コトニ聞ナシテ、年ヲ越、月越ルニシタガツテ、只今デハナレゴトニナリテ、只イツモノコトナリテ、タダイツモノコト等閑ニ思ヒ捨、

取損スルナトアル御示シノ、後生ノ一大事ヲ我方カラ取損スル、今ニモ死タレハ、地獄ノ猛火ノ中ニ飛込デハ誠ニ以テ、ノコリヲイトウモ、无量永劫トリ変ジノナラヌコトナレハ、御流ヲ汲エタルホドノ御縁深キ身上ナレバ、深重ノ御教示ヲ究タコトニセラレヌヤウ、我身々々ヘ引受ラレテ、片時モハヤク極楽参リノ用意ヲ覚悟ヲセラレネバナラヌ事ヂャ、

コレニツイテ、去ヌ閏三月四日ノ夜、七條御畑地ノ御作事場、不慮ノ出火ニテ御材木小屋焼失ニ及ビ、

御門末ノ懇志ノ、徒ラニ无益ノ費ト相成リタルコト、深ク尊慮ヲ御痛メ被為在(あらせら)ル段、誠ニ以テ恐入奉ルコトナリ、去リナガラ、公義ヨリ御拝領ノ御材木御別条コレナク、御焼失ノ御材木モ多分小材ニテ、格別ニ御再建ノ御指支ヘニナラセラレルナドノ義モナク、畢竟手アヤマチニ小屋ノ焼失シタバカリノコトナレバ、ナンノ御滞リモナク、翌日ヨリスグサマ御作事ニ取懸ラセラレテ、イヨイヨ以テ御取リ締アラセラレタルコト、御門末ノ一同アリガタク安心イタサレヨ、

右ニ付テ諸国詰所詰合ノ人々、世話方ヲ始メ其外ノ輩、コノ度ノ不慮ノ変ニ打撃レテ、ソレヨリコノカタ粉骨砕身ノ思ヒヨリ、昼夜ノ差支ナク、所々ノ御番ヲ勤メラレ、暫クモ油断ナク御大切ニ御守護申上ラレルコト、深ク御満足アラセラレル、

夫ニ付テ蓮如上人ノ御言ニ、時節到来ト言コトハ、用心ヲシテ其上ニコトノ出キ候ヲ時節到来トハ云ベシ、无用心ニシテ、コトノ出来候テ時節到来トハイハヌコトナリト、御示シアラセラレテ、

世上ニ於テハ何事デモ災難ノ起リタルトキハ、イツデモ時節到来ト云コトハ、夫ハ一概ナル申分ニテ、

時節到来ト云コトハ、平生ニ油断ナク、ヨク々々用心イタシテ、其上ニコトノ出来タノガ時節到来ト云モノヂャ、平生ニ油断バカリデ、无用心ニシテコトノデキタノハ、時節到来トハイハヌコトゾト御示シ下サレタレバ、御門末ノ人々、勿論後生ノ一大事モ油断ニテ、仕損ズルト仰セラレ、

世ノコトモ油断ニテ仕損ズルホドニ、コレヨリノチハ御報謝ノ実意ヨリ、イヨイヨ御本廟御守護ヲ御大切ニ御引受申サネバナラヌナリ、

銘々ノ油断ヨリ、ツイニ尊慮ヲ御イタメカクコトゾト、各々ニ御取持申上ラレヨ、

去者日疎トハ古人ノ誠メノ言ニテ、災難オコリタトキハ、実ニ打撃リコトナレドモ、其コトガオサマリテシモフタレバ、ツイニマタ安穏ノ思ヒニナリ、最早カ様ナ難ハナキコトゾト思ナシ、日ヲカサネ月ヲ越ユルニ付テハ、マタ油断ヲイタス様ニナリユクガ、愚ナ凡夫ノ習トナレバ、

爰ヲヨク心得ラレテ、我心ヲ誠メ、我身ヲ叱リツケテ、ナゼニ油断スルゾ、ナゼニ等閑ニ思ヒヲナスゾト自カラカヘリミテ、御再建中退転ナク、昼夜トモニ相励マレテ、御大切ニ御守護ヲ

申上ラレヨ、
善導大師ハ帰去来、魔郷ニテ不可止ト仰セラレテ、各我レ々カ此生テアル世界ハ魔郷ニシテ、魔ノ障ノ多ヒ所ヂャ、即チ各我等カ先晩ノ御畑地ノ変ノトキハ、実ニ大ニ驚タコトナレドモ、只今ニ至リテハ、最早コウユウコトハナニヤウニ安堵ノ思ニ住テアレドモ、ソレガ夫ガ愚サユヘノコトニテ、コノ御場所デ安坐シテ演説ヲ聴聞スル内ニモ、何コトノ起ルモシレヌオソロシキ魔郷ノ処ナレバ、
大地震ノコトヲ聞テモ越後斗ノコトト思フテ、上方ハ左様ナ災難ハナキ筈ノヤウニ思ヒ、或ハ九州ノ大風ノ災難ヲ聞テモ九州ノコトノミオモフテ上方ニハ左様ナ難ハナキコトノヤウニ心得テ、安穏ノ思ヒニナリテ思フテ居レドモ、都モ田舎モ油断ノナラヌ有為転変ノ（世）ノ習ヒ、今カフシテオル内ニ、大地震ノオコロヤラ、大火災ガ起ラフヤラ、イカナル災難ノ起ラフヤラシレン、
又油断ノナラヌ魔郷ナレバ、各暫モ油断セズニ御大切ニ御守護ヲ申上ラレネバナラヌナリ、
此娑婆ノアリサマガ、右之通リ、夜モ昼モ時々刻々油断ノナラヌトコロユヘ、阿弥陀仏我ラガタメニ、五劫永劫ニ御苦労アラセラレテ、焼モウセモセヌ建立、
常然无裏无変ノ安楽浄土ヲ御構ヘナサレタコノ魔郷ニ住居スルモ、今シバシノ間、追付安養浄土ニ往生シ奉ルニ、七宝樹林八功徳他ト、カカサリ立タル浄土ニテ、不老不死ノ楽ヲ受サセテ被下ルル、是ニ付テ長座ニ及ベドモ、深重ノ尊慮ヲ挙仰付ラレタル演説ナレバ大切ニ聴聞セラレヨ、
天親菩薩浄土論ノ中ニ阿弥陀仏安楽浄土ノ荘厳デハ略シテ廿九種ノ荘厳ト御説ナサレ、国々ノ荘厳十七種、仏荘厳ハ八種、菩薩ノ荘厳ナ四種、コノ三種荘厳ヲ開テ廿九種ト御説ナサレタ、其中仏八種ノ荘厳功徳ノオハリニ、不虚作住持功徳ト云コトデ説セラレ、即チ其偈文ニ「仏本願力ヲ勧ムルハ、遇テ空ク過ル者无シ、能ク速ニ功徳大寶海ヲ満足セシム」ト云ハ、虚作トハムナシクナスト云字デ、ムダバタラキニナルコトヲ虚作ト名ル、コノ娑婆世界ハ有満虚妄ノ業所作ニテ、折角骨オリテコシラヘタコトガ、忽チニムダ働キナリテシモフガ多ヒコトヂャ、
即チ曇鸞大師ノ御択ニ、其ムダ働キニナリテシモフコトヲ、論註ニ、「人、食ヲ輟（や）ムテ養生有リ、或ヒハ見世舟中ニ起、金ヲ種テ庫ニ盈レドモ而我レ死ヲ不免」ト仰セラレテ、古ヘノ公子慶忌ト云モノ、要雑ト云モノヲ、我容人ニシテ食容ト云テ養フテ、我食フモノモ食ハズニ馳走シテ、養テオイタ所ガ、実ハ要雑ハ敵キテアリテ、其後チ要雑ト同船シテ外ヘ行クトキニ、終ニ舟ノ中ニテ要雑ニコロサレタリ、是我カタベルモノサヒタベズニ養テオヒタルニ、コロサレルト云ヤウナコトヤラ、
或ハマタ漢鄧通ト云者、時ノ天子ヨリ蜀ノ銅山ヲ下サレテ、庫ニ満ルホドタクワヘテ居タ者ガ、後ニ零落シテ餓死シタトアル、コレ金ヲツミ、富饒ニナリタモ、ムダハタラキニナリテ、ツイニハ餓死シタ、
コノ娑婆ハ虚作ト云テ、骨折タコトガムダバタラキニナルガ、コノ世ノ転変ノアリサマ、
然ルヲ今仏八種ノ功徳ノ中ニ、不虚作住持ト云ハ、阿弥陀仏ノ本願力ハ、各我等ヲタスケルニ、ムダバタラキニハナラヌゾト、大慈大悲ノ誓願ニテ、
其謂レヲ今ノ偈文ニ「勧仏本願力　遇テ无空ク過者　能令速満足功徳大寶海」ト御説キナサレ、偶无空ク過者ト云、ムダバタラキニナラヌニトテ御示シ下サレテ、
遇フト云ハ、祖師聖人ノ御択ニマウ遇ト云ハ、本願力ヲ信ズルナリト御択ナサレテアリ、悪人女人宿善到来シテ南無阿弥陀仏ノ謂ヲ聞開キ、罪ハイカホド深クトモ、一心ニ我ヲ頼メバ必助ケルゾトノ御呼声テ、真実ニ御引受申テ、露塵リ程ドモアヤフマズ疑ハズ、
カカル浅間敷（あさましき）徒ラモノモ御目カケ、八十方ニモ、三世ニモ、只阿弥陀如来バカリゾト、余念ナク一筋ニ如来ヲ頼ミ奉ル思ヒノオコリタルトコロガ、本願力ニモフ遇タルトコロヂャ、
此本願力ニモフ遇タルモノハ、ムナシクスモクルモノハナシ、ムダゴトニナルモノナシ、
「能令速満足功徳大寶海」ト御説ナサレテ其如来ヲ頼ム一念ニ、其名号ノ中ニオサメテアル恒沙无量ノ功徳ヲコトノゴトク行者ノ身ニ満足サセテ下サルル、ソコヲ五濁悪世ノ有情ノ選択本願信ズレバ、不思－功徳ハ行者ノ身ニミテリト、御示アラセラレタ御一念ノトコロニ、不可称不可説不可思議ノ功徳ヲ不残行者ノ身ニミチミチサセテ下サレテ、仏ニナルニ不自由ノナヒ身トナシタモフ、
タトヘバ貧女ノ伏蔵ヲエテ、豊饒自在ニナリタル如ニシテ、何時キ死デモ死上涅槃ノ妙果ヲヒラカセテ下サルル、コレガ即チ仏荘厳ノ不虚作住持功徳ニシテ、弥陀ノ本願ヲ信ジテモノタダコトニナルト云気ヅカヒナシ、コノ世ニオヒテ恒沙无量ノ功徳ノ主ニナリ、正定聚不退ノ位ニ住シ、命終レバ真実報土ノ往生ヲ遂ゲ、不老不死无量寿ノ楽ヲ受サセテ下サレル、
然レバコノ世ノコトハ虚作ト云テ、ムダ働キニナルコト斗リユヘ、此世ニアル間ハ平生ヨクヨク用心イタシ、別シテカヘスガヘス、御本廟ノ御守護御大切ニ引受ラレ、御滞リナク御再建御成就アラセラレ、尊慮ヲヤスメ奉リタヒト、報謝ノ実意ヨリ懇念ヲ運バレルガ肝要、
長座ニ及ベバコレマデ、尚ヲ委クハ未刻ニ聴聞

(三) 御遠忌法話　大正十三年（一九二四）

「御遠忌法話　（大正十三年）
自四月一日　至仝三日
善念寺住職寶性實成述」

各々十余箇國のさかへをこえて身命をかへりみずしてたづねきたらしめたまふ御こころざし、ひとへに往生極楽のみちをとひきかんがためなり。しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、こころにくくおぼしめしおはしましてはんべるらんは、おほきなるあやまりなり。もし、しからば南都北嶺にもゆゆしき學生たちおほく座せられてさふらふなれば、かのひとびとにもあひたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとのおほせをかうむりて、信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土にうまるるたねにてやはんべるらん、また地獄におつる業にてやはんべるらん、總しても存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまいらせて念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずさふらふ。そのゆへは、自餘の行をはげみて佛になるべかりける身が、念佛をまうして地獄にもおちてさふらはばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔もさふらはめ、いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。弥陀の本願まことにおはしましまさば、釋尊の説教虚言なるべからず、佛説まことにおはしましまさば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然のおほせそらごとならんや。法然のおほせまことならば、親鸞がまうすむね、またもてむなしかるべからずさふらふ歟。詮ずるところ愚身が信心におきてはかくのごとし。このうへは念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云々。

多年の希望に燃る立た宗祖大師の六百五十回忌の御遠忌を、昨日の逮夜より嚴修の機縁が熟して、御同朋方の厚き法悦の御懇志と御世話下さる方々の深き御援助によりて、かく盛大に勤めさせて頂きました事は、身に余る喜びで、何とも御礼の申様なく只だ感涙にむせぶばかりであります。

祖師の徳　身に添ふ花や　御遠忌に

とは現法主台下の御悦びであるが、恐れ多き事ながら、今吾が身に引き當てて祖恩の洪大さが尊まれます。此の遇ひがたき御法席を御縁として、只今讃み上げた欺異鈔の第二節の御言葉に就いて御話をさせて頂きたいと存じます。

斯の鈔は、第二代目如信上人の綴られた聖典で、僅かな紙数の小典なれど、絶對他力の救濟を最も極端に示されたもので、蓮如上人は態々奥書をなされて、無宿善の者には左右なく許すまじき聖教なりと記されてあります。一部十八節の中、前九節は祖師の御物語、後の九節は御滅後の異義を歎きて破釋なされたものであります。元祖門下の上足として自他共に許された人々の中にも、専修の本願に反逆て、或は二類各生と云ひ、念仏胎内の功徳と名付けて、雑毒の善虚假の行たる万善万行を勧めて、罪科を遁れた人々もあった。然るに、聖人は流罪によりて邊鄙の人々にも如来の大法を宣傳する事を得るは、是尚師教の恩致なり。至徳の風静にして、衆禍の波轉すると云ひ、光風霽月の心境に住して、承元元年、肌尚寒き晩春に、都を離れて越後の國府に、流罪勅勘の咎人として移られたのであります。聖人とても人情の常として、住み馴れた都戀しや、恩愛の妻子に思を寄せられた折もあったに相違はあるまいが、その内に、何時も大悲の本願を仰きて心底より湧き出る感謝の称名に日を送られ、逆境のどん底にあっても、慶哉、心弘誓之仏地を樹てて、念難思之法海に流すと、法悦の念佛に歓喜の生活をなされたのであります。斯くて五年の星霜は過きて勅勘御差免の恩命を蒙られ、聖人の慈顔に接し、徳音によりて今は念仏する越後の名残を惜しむ同朋にも別離の法味を語りて、會者定離の世の有様を示して、都へ帰り給ふ事となった。然るに途中にて、法然聖人は一月二十五日に配所にて御往生の事を傳へ聞き給ひて、愕然として驚き悲痛の涙にむせばれ、一日も早く都へ帰りたいと道を急いだも、師の御房に拜せんためであった。師の御房ましまさずは都へ帰りても詮なしと思召されたのであった。斯時、常陸の國宇都宮ケ家一門の御招きを得させられて関東化導の機縁が熟して、稲田の郷に草庵を結んで満二十年の間御化益を垂れさせられた。

（中略）

以上、心に浮ぶまま次第順序の分別もなく述べさせていたたきましたが、聖人御入信の経路を偲び、信後法悦の御喜びを慕ひ、同一念仏の道中に歓喜の日を送らせて頂く幸福を喜びます。実に生死無常の世の有様です。世事を思量すれば、掌を翻すか如く誰れか長生不死の法を得んやと、禅門の大家虚堂禅師は歎かれましたが、何の光榮ぞ、何の幸ぞ、長生不死の大法たる弥陀選擇の念仏を体得して、歓喜の称名に力強く悪魔外道に障られず、念々刻々故聖人の在す報土の近付く身を喜ばすにはおられません。

茲に亦た面白い話があります。或時香月院講師は妙林尼に尋ねられました。

香　妙林尼々々々如来の御助けを頂きましたか
妙　はい頂きました。
香　どこにある。
妙　身体中に満ち満ちております。
香　出して見せよ。
妙　南無阿弥陀佛　南無阿弥陀佛
香　称へてまゐるのか。
妙　称へてまゐるぢゃなけれども、聞く一念に御用済み、出いてミ見せよの御言葉ゆへ、耳がようもの言はぬゆへ、口が代理を致します。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀佛

と喜んださうであります。唯念仏して弥陀に助けらるるのへ教を蒙りて、聞く一念に往生の御用済みであります。遠い所に御助けを眺め、淋しき念仏ではありません。身体中に満ち満ちた如来のお助けが、口に溢れて南無阿弥陀仏の歓喜の称名となるのであります。この妙林尼の味ひを私共今日の法悦に引較べて、これ程の力強き信念に安住して彼佛心光常照是人の妙境に、日々の生活をさせて頂き、世の中安穏なれ、佛法弘まれかしの念願に精進せねばなりません。

南無阿弥陀　弥陀の御宝　我が寶　これで助ける　これで助かる

大正拾三年四月十日記す

（大正十三年四月三日、親鸞聖人六百五十回忌御遠忌法要での寶性實成の法話を、(南砺市)高宮の成川権太郎が筆記したもの）

三　御示談問答

「御講師深励様　安心問答聞書」文化十一年

（南砺市吉江中　南源右衛門氏蔵）

其方当流ノ安心ハ如何領解イタシ候

答曰　善知識ノ教ニ依而、タノム者ヲ助テヤルト有ル、御名号ノ御謂ヲ聞開キテ、カヽル徒者ヲタノムバカリデ、御助ニ間違ナイト御称名ヲ喜申マス

問曰　夫デハ、間違有ト答タライカヽ受ル

答曰　私ノ心ハ間違ガチナレドモ、頼バカリデ御助ニハ間違ナイト御受申テ居マス

問曰　夫ハ、有ガタキ間違有事ハナケレドモ、心見（こころみ）ノ問ヂャ、シカレドモ、間違ナイト御受申タ受心ハドウジャ

答曰　頼ム者助テ遣（や）ルト有御意ヲ聴聞シテ、タノムバカリデ御助ハ阿弥陀一仏ト御受申テ候

問曰　其受ラレタ心ノ気味合ハ何ヂャ、唯一口云テミヨ

答曰　身モ意（こころ）モスガル思デゴサリマス

問曰　左右（そう）ヂャ、縋（スガル）ヲモヒガ一念帰命ノ御信心ジャ、トキニ信心ハ得タトヲモウカ、ヱ（得）ズト思ウカ

答曰　御信心ハ、頼一念ノ時大丈夫ニ得サシメクダサレタト存ジマス

問曰　御喜ハアラハレルカ

答曰　カホドノ御意ヲ蒙（コフム）リマシテ、細々ナガラノ御ヨロコビデゴザリマス

問曰　タノムトハ何ヲタノマレタ

答曰　御名号ノ御イハレノ聞開レタノミト聴聞イタシマシタ

問曰　偖（さて）ハ何トキキヒラカレタゾ

答曰　頼ム者ヲ助ルトアル御意ヲ聴聞シテ、タノム斗リデ御助ハ聞開レマシタ

問曰　タノムト、タノミハ如何聴聞イタサレタ

答曰　タノムハ、初一念タノミ、当流相続ト聴聞イタシマシタ

問曰　改悔（悔悟）ト懺悔トハ、初一念ニ有、懺悔ハ当流相続ニカカルト、聴聞イタシマシタ※

問曰　真実デ助ルカ、名号デ助ルカ、如何聴聞イタサレタ

答曰　真実カラ御成就ノ名号デ助ルト聴聞イタシマシタ

問曰　御慈悲ハ御恩トハ如何喜レマス、返答ニ依心ハサウナリトモ、言葉ノ矢デ法躰ニナル

答曰　御慈悲ノ恵ニアズカリマシテ、ヱガタキ信ヲ得サシメ下ダサレタト思ハ、今広大ノ御恩トヨロコバレマスル

問曰　ホレボレト御恩ノヨロコバルル時ハ、如何思ハレマス

答曰　煩悩ノキレマカラ御信心ノアラハルルヨロコビト存テ、イヨイヨ有ガタク存マス

問曰　不請々々（不承不承）御称名ノ顕ルル時ハ如何思レマス

答曰　御信心アラハル御称名トアレバ、如来御方ニテハヤハリ佛恩報謝ト御受取下サルルト思ハ、イヨイヨ有ガタク存マス

問曰　頼ムトユウカラハ、如来ノ躰ヲタノミ申タカ、名ヲタノミマシタカ、勿論名躰不離ジャニ、依而離タモノデハナケドモ、佛ノ名ト分ケタル時ハ、何ヲタノマレマシタ

答曰　名号ノイハレヲ聞開キテ信心スル一念ノ信ナレバ、名頼レマシタ、帰名ニハ躰ガ備ラセラルルトチャウモンイタシマシタ

問曰　三業ハ善モノカ悪イモノカ、又、イル物カ、イラン物カ、如何ジャ

答曰　三業ハ悪モノハゴザリマセン、ナケレバナラン物デ、心得受ラレタハ意業御恩ノ称名、口業参詣申シ、内佛ヲ御給仕申可不ルカ、身業三業ナフテハナランモノデゴザリマスルユヘニ、イランモノトハ存ジマセン、悪イ物デハゴザリマセヌ、唯三業ノタノミハ御正意ニソムクユヘニ、イラヌ物ト聴聞イタシマシタ

問曰　御勅命ノ受心ハ、マニ合フカアワンカ、如何思レマス、合イマスト云ハ、無念無想、合不ト云ハ自力ナルカ如何

答曰　受心ハ間ニ合ノ可不、私ニ間合セル心ハ、イササカモゴザリマセン

文化十一年正月朔日

（※これは「答」であり「問」の一行がぬけている）

四　越中の妙好人（みょうこうにん）

刊本の「妙好人伝」に採録されている越中の妙好人

赤尾道宗（越中赤尾）

『大乗仏典（中国・日本編）第28巻』　中央公論社
『赤尾道宗心得二十一箇条』行徳寺　昭和四四年
岩見護『赤尾の道宗』永田文昌堂　昭和三一年
高坂貫昭「赤尾道宗のこと」
『民芸』日本民芸協会　昭和三四年七月

越中多平「妙好人伝　五編　巻下　目録」　永田文昌堂

越中国石動郡下中村の多平は常日頃から御法座に参詣するなどして熱心に聴聞し、毎日の粗食にも不服を言わず、多くの子供たちにも法義をすすめていたが、弘化四年にめでたく往生を遂げた。不思議なことに二十六日の灰葬のとき多平の頭の白骨に「聞其名号信心歓喜乃至一念至心回向」などの文字が現れた。

越中九歳児「妙好人伝〔五巻本〕　妙好人伝二編上目録」
『大系真宗史料　伝記編8　妙好人伝』148P法蔵館

越の国に帰ったとき、先日亡くなった人の家を訪ねたところ、まだ九歳の子が重い病で明日をも知れぬ身であった。その子は死を目前にして死を恐れる様子もなく、念仏しつつ息絶えた。極楽往生に何の疑いもなく往生したことは日頃の聴聞の功であろう。

越中佐治兵衛「妙好人伝〔五巻本〕　妙好人伝三編上目録」
『大系真宗史料　伝記編8　妙好人伝』203P法蔵館

越中国富山中野町佐治兵衛が、高祖聖人の五五〇回忌に上京した折、御影堂の前で杉の屋根板一枚が目の前へ落ちたのを見て、これはきっと自分に屋根板を募縁せよとの思し召しであろうと思い、すぐに越中へ帰り、婦負郡新川郡の同行とともに献金を募り飛騨の国でネズ板と材木を求めて京へ運び用立てした。善智識（法主）が喜ばれて両郡にねんごろな御書を下され、一同は喜んだ。

越中幼女「妙好人伝〔五巻本〕　妙好人伝四編上目録」
『大系真宗史料　伝記編8　妙好人伝』242P法蔵館

越中国塩村大永寺の七歳の幼女が病気を患い、もう死ぬであろうその時に、看病していた母親が往生の覚悟をさせようと「死んだらどこへ行く」と問うと、幼女は「阿弥陀様に負われて極楽へゆく」と答えた。その話を聞いた僧が「なぜに阿弥陀様が負うて行くのか」と聞くと、幼女は「私もわけはわからないけれど、阿弥陀様はわたしがかわいくてかわいくてならぬそうです」と答えた。

越中能与「妙好人伝〔五巻本〕　妙好人伝四編下目録」
『大系真宗史料　伝記編8　妙好人伝』263P法蔵館

越中国射水郡一羽村ののよという娘は、父も亡くなり独り身で細々と暮らしていたが、大病をわずらい亡くなった。生前従弟に、自分が死んだら葬儀の時に灯籠の竹を灰塚にさしてほしい。その竹に芽が出たら自分は浄土に生まれたと思ってほしいと言い置いておいた。遺言の通りすると竹から芽が出てどんどん伸び、青々と栄えた。奇瑞として、方々から見学に来る人が群れをなした。

（各人の内容を要約したもの）

五　聖徳太子絵伝

(一)　讃文

第一幅
「大慈大悲本誓願　愍念衆生如一子
是故方便従西方　誕生片州興正法」

第二幅
「我身救世観世音　定恵契女大勢至
生育我身大悲母　西方教主弥陀尊」
「真如真実本一体　一体現三同一身
片域化縁亦已盡　還帰西方我浄土」
「為度末世諸衆生　父母所生血肉身
遺留勝地此廟崛　三骨一廟三尊位」

第三幅
「過去七佛法輪所　大乗相応功徳地
一度参詣離悪趣　決定往生極楽界」
「昔在霊山名法花経　今在西方名弥陀尊
為利生故示現女身　産生法王還帰西方」

第四幅
「銅蓋銘曰　吾為利生彼出衡山
此入日域　降伏守屋之邪見
終顕佛法之威徳」

第五幅
「狐非獅子類　燈非日月明
池無巨海納　丘無嵩岳栄」
「法雲垂世界　善種得開萌
顕通希有法　処々化群生」

第六幅
「我身本来空　為弘佛法故
幻陽応化身　盡空還本土」
「敬礼救世観世音　伝燈東方粟散王
従於西方来誕生　皆演妙法受衆生」

第七幅
「名号称揚七日已　此是為報広大恩
仰願本師弥陀尊　助我済度常護念」
「一日称揚無恩留　何況七日大功徳
我待衆生心无間　汝能済度豈不護」

第八幅
「一切諸法　本来常住　愚夫顛倒　生死流転
大聖救世　慈悲方便　機興即生　縁謝離滅」
「非生現生　我身大覚　化縁能盡　終帰本覚
仰願同生　上宮浄土」

(二) 裏書

（第一幅　裏書）

利賀村字下原
寄附　長原平藏
長原幸助　昭和五年四月十七日

昭和五十七年五月二十六日改装
井波町木崎野
六代　長原正行

天保八年十一月十二日　釋　哲　現　弘化二年八月十九日　釋　順　誓　昭和二十九年七月二十三日　春明院釋清閑
明治廿五年九月六日　釋　圓　明　嘉永元年七月十日　釋尼妙順　昭和三十七年十二月四日　春珠院釋尼妙躯
昭和六年十月二十六日　聖德院　釋　良　知　安政四年七月五日　釋　諦　音　昭和四十三年五月十九日　春光院釋尼妙言
安政六年九月八日　釋尼妙意　安政四年十月廿五日　釋　恵　燈　昭和五十四年七月四日　淨法院釋聞説
明治廿六年八月廿六日　釋尼貞悦　文久二年七月廿三日　釋　頼　力　昭和五十六年四月十二日　大信院釋長生
昭和十三年七月二十九日　明信院　釋尼妙恩　明治廿五年八月廿七日　釋尼妙敬
明治三十二年八月廿一日　釋尼妙修　大正七年六月六日　釋尼妙親
大正十四年十一月十日　釋尼孝恵　大正七年十二月十日　釋　信　教
大正十四年十一月七日　釋　信　順　明治三十一年九月三十日　釋　晃　章
明治四十年六月十九日　釋　現　順　大正元年二月廿八日　釋　荘　嚴
明治十二年六月十九日　釋　顕　秀
明治三十一年六月廿九日　釋尼唯誓
大正元年十二月二十日　釋尼妙恵
天保九年十一月五日　釋尼妙境

（第二幅　裏書）

寄附人　東礪波郡利賀村字長崎
自岡部次郎八六代目岡部平千

法名　利　貞　先祖
明治七年八月廿日　釋　専　淨　昭和五十七年五月改装　岡部勝二
明治十一年十一月十五日　釋　證　道
明治十九年六月廿二日　釋　導　教
明治廿三年三月十七日　釋
明治三十八年十月六日　釋尼妙陵
明治四十年九月九日　釋尼妙見
明治四十年八月廿五日　釋尼智慶　平九郎妻
明治四十四年八月十四日　釋　明　徳
大正七年十一月二日　澤　至　信　平九郎
大正十二年十一月廿日　釋　俊　誓
大正十四年十一月十七日　釋　秀　寶
昭和八年七月廿八日　釋　誓　願

明治九年十月十八日　釋　観　道　平右ェ門
明治十八年八月十二日　釋尼妙章　平右ェ門妻
明治二十四年八月二十二日　釋　秀亮
明治二十六年九月二十九日　俗名すず
明治三十二年十二月十四日　釋尼妙慧
大正元年八月十四日　釋　智　行
昭和四年二月二十九日　女
昭和六年三月十七日　男
昭和七年四月一日　女
昭和八年五月十六日　男
昭和十二年三月一日　釋　勝仁
昭和十四年八月二日　釋尼證華
昭和十六年十一月十四日　釋尼妙悦
昭和十九年四月九日　釋　良順
昭和二十九年十二月二十六日　淨修院　釋尼妙和　平千妻
昭和三十五年四月二十九日　淨行院　釋正映　平千
昭和五十八年八月二十五日　願正院釋順諦
釋尼貞修

（第三幅　裏書）

井波町山見
寄附　山本かす

大正八年七月五日　釋　信　順
昭和五十一年十二月十九日　釋尼貞良

金澤市上近江町
寄附　丸井源太郎
先祖代々

昭和五十七年六月改装
井波町山見
山本　威

昭和三十五年十一月十一日　釋　明　證
昭和五十七年五月二十日　釋尼芳香

（第四幅　裏書）

昭和六年七月　東砺波郡柳瀬村
寄附人　無極院釋良善　関口太三郎
同村　釋乗願　塚田久太郎

明治十七年二月二十八日　釋尼妙好
明治廿五年一月六日　釋　好願
明治廿六年九月十四日　釋　教念
明治三十年九月廿八日　釋　道味
明治三十九年九月廿八日　釋尼妙好
明治四十一年一月廿一日　釋尼證専
明治四十三年九月十六日　釋尼知法
大正八年六月十四日　釋尼知了
大正八年十月十五日　釋尼妙智
大正十三年九月九日　釋　堅住
昭和二十八年一月三十日　釋尼妙徳
昭和六年十二月十四日　釋　良善
無極院
明治十四年十月七日　釋　大悟
明治四十二年三月廿五日　釋尼妙哲
大正十四年九月九日　釋　乗願
昭和四年十一月九日　釋尼壽豊
昭和六年九月六日　釋　恵證
昭和五十七年六月改装
砺波市柳瀬
関口啓三
東京都世田谷区野毛
塚田俊久
遊行院　釋　清閑
願行院　釋尼法善　啓三妻
光乗院　昭和四年九月四日　釋　超念
国明院　昭和四十年四月一日　釋尼妙秀
能信院　昭和五十四年十一月十五日　釋尼静覚
真徳院　昭和五十五年六月二十五日　釋　俊治

（第五幅　裏書）

寄附人
東砺波郡柳瀬村
藤井太八郎

明治三十五年十一月二十九日
釋尼誠賢

明治四十一年八月二十七日
釋　速入

明治四十二年七月四日
釋尼妙遵

明治四十三年二月二十七日
釋　浄圓

明治四十四年七月一日
釋尼妙得

大正元年十一月八日
釋　智聞

大正十一年五月十八日
釋　自慶

昭和十年二月二十日
釋尼清恵

昭和十年六月一日
釋尼妙満

昭和十一年十二月二十六日
釋尼妙純

昭和十七年十二月十七日
釋　良善

昭和五十八年七月改装
砺波市柳瀬
藤井太八郎

昭和二十年九月九日
釋　皆導

昭和二十六年十一月二十日
釋　信界

信力院　昭和三十年十月三日
釋尼慧聲

大行院　昭和四十年一月五日
釋　良善

（第六幅　裏書）

寄附人
東砺波郡柳瀬村柳瀬
堺井佐吉

明治三十二年十一月二十日
釋尼妙蓮

大正六年十月二十九日
釋　修道

昭和四年七月二十六日
釋　向西

釋尼妙観

昭和六年一月八日
釋　善隨

昭和六年十月六日
釋　慈聲

寄附人
東砺波郡柳瀬村柳瀬
北宮外次郎

大正六年九月六日
釋　善祐

大正六年九月二十二日
釋　敬善

昭和三年五月十九日
釋　示雲

昭和四年四月二十六日
釋　観喜

昭和五年一月十七日
釋　高彌

昭和十一年七月二十日
釋　影哲

昭和十一年七月二十二日
釋尼称意

昭和十八年十月七日
釋　為徳

昭和五十八年七月改装
東砺波郡福野町森清
中井久雄

明治三十一年五月八日
釋　摂受

明治三十三年一月七日
釋尼妙聲

昭和五年九月十九日
釋尼正為

浄念院　昭和十年四月十一日
釋　義周

重誓院　昭和三十六年五月二日
釋　久遠

釋尼貞壽

昭和五十八年七月改装
砺波市柳瀬
北宮外治

昭和二十年四月二十九日
釋尼妙澄

明願院　昭和五十五年七月十日
釋尼朝恵

（第七幅　裏書）

寄附人
東礪波郡太田村
西藤和平

明治二年二月十五日
釋　浄信

大正五年七月廿七日
釋妙光信女

明治二年六月十四日
釋尼教信

釋良善

釋尼永壽

大正七年四月五日
釋　宗成

大正十二年十二月廿一日
釋尼智恵

昭和五十八年七月改装
東砺波郡庄川町青島
小西久夫

昭和三十四年三月二十二日
常信院　釋尼茂壽

昭和五十三年七月二日
釋　栄心

（第八幅　裏書）

寄附人
東砺波郡太田村
吉田はつ

大正二年六月五日
釈　良知

釈尼妙可

存命俗名　はつ

明治三十年九月十七日
釈　順故

明治二十六年九月十二日
釈尼示法

大正十二年七月十九日
釈　順故

昭和六年八月十八日
釈　良由

明治四十二年四月十一日
釈　浄順

釈尼慈恵

大正六年六月十日
釈　浄教

釈　昭恵

存命俗名　政治郎

昭和五十八年五月改装
東砺波郡井波町沖
細川伊三

願生院　釋清閑

慈光院　釋尼貞保

六　真寿寺を訪れた説教者一覧（昭和年代）

年	月	説教者名	住所
昭和二	二月中旬	東明信	金沢
	二月下旬	山岸泉肇	奈良県北葛城郡
	三月上旬	齊藤順明	井波町
	三月上旬	関根圓超	福井県大野郡
	三月上旬	齊藤順明	金沢
	三月中旬	深谷賢立	
	三月中旬	藤田誓成	神島
	三月下旬	本林勝二	金沢
	四月上旬	瀬川勇教	氷見
	四月上旬	山岸泉肇	奈良・北葛城郡
	四月上旬	森田教眞	小矢部・石坂
	四月中旬	山崎専證	金沢
	四月中旬	南部岡	能美
	四月下旬	中堂深仲	鳳至
	五月上旬	寺尾賢應	河北
	五月中旬	野村憲成	金沢
	五月下旬	佐々木正弘	羽咋
	六月上旬	磯部教證	国吉
	六月中旬	関根圓超	福井
	六月下旬	和泉実城	中田・滝
	七月上旬	岩城速成	北海道上川郡
	七月上旬	狐野徳遵	金沢
	七月中旬	石川恵成	中新川郡五百石
	七月下旬	小串恵浄	岐阜・海津郡
	七月下旬	松下研正	愛知・知多郡
	八月上旬	園　大然	井波別院
	八月中旬	和田洗塵	愛知・幡豆郡
	八月下旬	黒川鳳了	東京
	九月上旬	諏訪信城	新潟・南蒲原郡
	九月中旬	日向順照	鳳至
	九月下旬	長澤隆照	羽咋
	九月下旬	久保善策	金沢
	十月上旬	森本鉄栄	能美
	十月中旬	川岸苔巌	能登
	十月中旬	川岸允	金沢
	十月下旬	樋口大蔵	下中
	十月下旬	吉江法眼	金沢
	十一月上旬	山田廣宜	三重・桑名郡
	十一月中旬	山田智孝	河北
	十一月中旬	本田徳圓	福光町土生新
	十一月下旬	梅原暁俊	三重・桑名郡
	十一月下旬	山田智孝	氷見
	十二月上旬	小林智圓	加賀・大聖寺
	十二月中旬	宮瀬勇精	小矢部・福町
	十二月下旬	片岡香言	中新川郡弓庄
	一月上旬	石川恵成	
昭和三	一月上旬	湯上寶憧	中新川郡
	一月中旬	上瀧順憲	国吉・頭川
	一月下旬	土屋教順	井波町
	二月上旬	山岸泉肇	奈良・北葛城郡
	二月上旬	清原貫恵	魚津
	二月中旬	中根専敬	愛知
	二月下旬	中堂深仲	鳳至
	三月上旬	大瀧咸	金沢
	三月上旬	黒田廣恵	名古屋
	三月中旬	樋口大蔵	金沢
	三月下旬	磯部教證	国吉
	四月上旬	寺西正道	河北
	四月中旬	東　正	羽咋
	四月下旬	土屋豊成	砺波・鹿島
	五月上旬	松下是	河北
	五月中旬	寺尾賢應	金沢
	五月下旬	松金持法	氷見
	六月上旬	藤原松陰	能美
	六月中旬	菅谷教専	河北
	六月下旬	関根圓超	福井・大野郡
	七月上旬	松本得政	羽咋
	七月中旬	和泉実城	庄川町三谷
	七月下旬	佐竹円誓	中田・滝
	八月上旬	鳥山寛道	能美
	八月中旬	園　大然	愛知・幡豆郡
	八月下旬	小野世雄	井波別院
	九月上旬	松下研正	福岡町小野
	九月中旬	森井勇憲	愛知・知多郡
	九月下旬	日向順照	井波町
	十月上旬	黒川鳳了	鳳至
	十月中旬	森本鉄栄	東京
	十月下旬	小林智圓	能美
	十一月上旬	本林勝二	氷見
	十一月中旬	干場教昭	金沢
	十一月下旬	岩城速成	鳳至
	十二月上旬	吉江法眼	金沢
	十二月中旬	寶田覚導	河北
	十二月下旬	片岡香言	三重・桑名郡
	一月上旬	土屋教順	津幡
	一月中旬	上瀧順憲	北海道・上川郡
	一月下旬	廣橋東洋	東京
	二月上旬	大地原文了	下中
	二月中旬	磯部教證	庄川町天正
	二月下旬	荒川徳證	蓮花寺
	三月上旬	中根専敬	小矢部・福町
	三月上旬	臼井賢雄	井波町
	三月上旬	福江誓成	国吉・頭川
	三月中旬	舘慈巌	
	三月中旬	松下是	
	三月上旬	藤田秀英	
	三月中旬	南部岡	
	三月下旬	荻正傳	
	四月上旬	吉藤孝順	
	四月中旬	月見洪受	
	四月下旬	伊東順二	
	五月上旬	土屋豊成	
	五月中旬	野村文雄	
	五月下旬	松金持法	
	六月上旬	寺尾賢應	
	六月中旬	園　大然	
	六月下旬	菅谷教専	
	七月上旬	森本鉄栄	
	七月中旬	関根圓超	
	七月下旬	石畠観宗	
	八月上旬	高山誓成	
	八月中旬	佐々木諦蓮	
	八月下旬	笠原康雄	
	九月上旬	高橋龍音	
	九月中旬	加藤有教	
	九月下旬	東　正	
	十月上旬	藤田鑓壽	
	十月中旬	片岡香言	
	十月下旬	三浦教観	
	十一月上旬	土屋豊成	
	十一月中旬	松本得政	
	十一月下旬	高木元秀	
	十二月上旬	佐竹円誓	
	十二月中旬	一楽信成	
	十二月下旬	石川恵成	
昭和四	一月上旬	鳥山寛道	
	一月中旬	秋知賢城	
	一月下旬	小野世雄	
	二月上旬	福江誓成	
	二月中旬	小林智圓	
	二月下旬	小西照榮	
	三月上旬	中堂深仲	
	三月中旬	寺西正道	
	三月下旬	畠山勇精	
	四月上旬	日向順照	
	四月中旬	氷見	
	四月下旬	能登鹿島郡	
	五月上旬	国吉	
	五月中旬	津幡	
	五月下旬	愛知・東加茂郡	
	六月上旬	金沢	
	六月中旬	岐阜・安八郡	
	六月下旬	富山市	
	七月上旬	河北	
	七月中旬	魚津	
	七月下旬	能美	
	八月上旬	金沢	
	八月中旬	津幡	
	八月下旬	上新川郡	
	九月上旬	朝日町泊	
	九月中旬	砺波・鹿島	
	九月下旬	福野・高堀	
	十月上旬	氷見	
	十月中旬	金沢	
	十月下旬	井波別院	
	十一月上旬	河北	
	十一月中旬	能美	
	十一月下旬	福井・大野郡	
	十二月上旬	森本鉄栄	
	十二月中旬	関根圓超	
	十二月下旬	菅谷教専	
	一月上旬	河北	
	一月中旬	能美	
	一月下旬	福井・大野郡	
	二月上旬	上新川郡	
	二月中旬	四月下旬	
	二月下旬	土屋豊成	
	三月上旬	松金持法	
	三月中旬	月見洪受	
	三月下旬	大河地文了	
	四月上旬	四月中旬	
	四月中旬	能登・鹿島郡	
	四月下旬	上新川郡	
	五月上旬	砺波・鹿島	
	五月中旬	氷見	
	五月下旬	金沢	
	六月上旬	庄川町三谷	
	六月中旬	能美	
	六月下旬	河北	
	七月上旬	井波別院	
	七月中旬	金沢	
	七月下旬	羽咋	
	八月上旬	名古屋	
	八月中旬	滋賀・伊香郡	
	八月下旬	滋賀・栗田郡	
	九月上旬	河北	
	九月中旬	大阪市	
	九月下旬		
	十月上旬		
	十月中旬		
	十月下旬		
	十一月上旬		
	十一月中旬		
	十一月下旬		
	十二月上旬		
	十二月中旬		
	十二月下旬		
	一月上旬		
	一月中旬		
	一月下旬		
	二月上旬		
	二月中旬		
	二月下旬		
	三月上旬		
	三月中旬		
	三月下旬		
	四月上旬		
	四月中旬		
	四月下旬		
	五月上旬		
	五月中旬		
	五月下旬		
	六月上旬		
	六月中旬		
	六月下旬		
	七月上旬		
	七月中旬		
	七月下旬		
	八月上旬		
	八月中旬		
	八月下旬		
	九月上旬		
	九月中旬		
	九月下旬		
	十月上旬		
	十月中旬		
	十月下旬		
	十一月上旬		
	十一月中旬		
	十一月下旬		
	十二月上旬		
	十二月中旬		
	十二月下旬		
昭和五	一月上旬	森本鉄栄	
	一月中旬	佐々木正弘	
	一月下旬	本林勝二	
	二月上旬	小西栄誠	
	二月中旬	廣橋東洋	
	二月下旬	土屋教順	
	三月上旬	蓬茨口正	
	三月中旬	藤田秀英	
	三月下旬	東　正	
	四月上旬	三村常念	
	四月中旬	廣橋東洋	
	四月下旬	上瀧順憲	
	五月上旬	土居憲雄	
	五月中旬	寶田覚導	
	五月下旬	松下研正	
	六月上旬	笠原康雄	
	六月中旬	古松了	
	六月下旬	松下研正	
	七月上旬	秋知賢城	
	七月中旬	荻正傳	
	七月下旬	横荻慶予	
	八月上旬	武村治	
	八月中旬	森本鉄栄	
	八月下旬	小野世雄	
	九月上旬	森本鉄栄	
	九月中旬	伊東順二	
	九月下旬	横荻慶予	
	十月上旬	野村憲成	
	十月中旬	干場教昭	
	十月下旬	佐々木正弘	
	十一月上旬	井上祐邦	
	十一月中旬	高橋龍音	
	十一月下旬	小山進	
	十二月上旬	高山誓成	
	十二月中旬	小西栄誠	
	十二月下旬		
	一月上旬		
	一月中旬		
	一月下旬		
	二月上旬		
	二月中旬		
	二月下旬		
	三月上旬		
	三月中旬		
	三月下旬		
	四月上旬		
	四月中旬		
	四月下旬		
	五月上旬		
	五月中旬		
	五月下旬		
	六月上旬		
	六月中旬		
	六月下旬		
	七月上旬		
	七月中旬		
	七月下旬		
	八月上旬		
	八月中旬		
	八月下旬		
	九月上旬		
	九月中旬		
	九月下旬		
	十月上旬		
	十月中旬		
	十月下旬		
	十一月上旬		

十一月中旬	日向順照	鳳至
十一月中旬	藤谷義泉	滋賀・犬上郡
十一月下旬	春国敢	北海道
十二月上旬	本林勝二	金沢
十二月中旬	武田経丸	津幡
十二月下旬	廣橋東洋	氷見
一月上旬	土屋教順	井波町
一月中旬	上瀧順憲	国吉・頭川
一月下旬	横荻慶予	福岡町土屋
一月下旬	藤田秀英	福井・丹生郡
二月上旬	三矢恵覚	氷見
二月上旬	土居憲雄	福光町松木
二月中旬	三村常念	魚津
二月下旬	三村常念	魚津
二月下旬	伊東順二	朝日町泊
三月上旬	藤條正嵩	朝日町泊
三月中旬	松下是	河北
三月下旬	月見洪受	上新川郡
三月下旬	東正	羽咋
四月上旬	守城照雄	高岡・守山
四月上旬	泉口竟了	鳳至
四月中旬	福江誓成	小矢部・名畑
四月下旬	笠原康雄	滋賀・伊香郡
五月上旬	土屋豊成	砺波・鹿島
五月中旬	松金持法	氷見
五月下旬	園大然	井波別院
五月下旬	星川芳雄	名古屋
六月上旬	森田教信	小矢部・石坂
六月中旬	菅谷教専	河北
六月中旬	松下研正	愛知・知多郡
六月下旬	黒田廣恵	名古屋
六月下旬	三本善正	岐阜・大野郡
七月上旬	松下研正	愛知・知多郡
七月上旬	船見智秀	小矢部・水島
七月中旬	泉口竟了	鳳至
七月下旬	中根専敬	東京
七月下旬	松下研正	愛知・知多郡
七月下旬	高桜薫	下新川
七月下旬	武村治	滋賀・栗田郡
八月上旬	黒川鳳了	東京
八月上旬	和田洗塵	愛知・幡豆郡
八月上旬	神保慶善	東京
八月中旬	森本鉄栄	能美
八月中旬	内村文龍	婦負
八月中旬	田島満英	婦負
八月下旬	高桜薫	下新川
八月下旬	武村治	滋賀・栗田郡
八月下旬	横荻慶予	福岡町土屋
九月上旬	鞍馬亮恵	福岡町一歩二歩
	樋口大蔵	金沢

昭和六

昭和七

九月中旬	樋口得圓	津幡
九月下旬	松本得政	庄川町三谷
十月上旬	日向順照	鳳至
十月上旬	持田徳明	河北
十月中旬	小野世雄	福岡町小野
十月下旬	藤谷義泉	滋賀・犬上郡
十月下旬	森田教信	小矢部・石坂
十一月上旬	持田徳明	河北
十一月上旬	喜多山稱善	総会所
十一月中旬	澤出龍拳	石川・江沼郡
十一月中旬	寺崎松丸	石川・江沼郡
十一月下旬	今井勲	福井市
十二月上旬	中堂深仲	鳳至
十二月上旬	森田教信	小矢部・石坂
十二月中旬	佐々木正弘	羽咋
十二月下旬	井上祐邦	名古屋
一月上旬	土屋教順	井波町
一月中旬	荒木速悟	氷見
一月中旬	上瀧順憲	国吉・頭川
一月下旬	武田経丸	津幡
二月上旬	土居憲雄	福光町松木
二月中旬	三村常念	魚津
二月下旬	三村常念	魚津
二月下旬	松下是	河北
三月上旬	松金持法	氷見
三月中旬	月見洪受	上新川郡
三月下旬	小野世雄	福岡町小野
三月下旬	守城照雄	高岡・守山
三月下旬	田中見正	金沢
四月上旬	三矢恵覚	氷見
四月中旬	伊東率	朝日町泊
四月下旬	土屋豊成	砺波・鹿島
五月上旬	福江誓成	小矢部・名畑
五月中旬	三矢恵覚	氷見
五月中旬	福江誓成	小矢部・名畑
五月中旬	園大然	井波別院
五月下旬	三本善正	岐阜・大野郡
五月下旬	松本得政	庄川町三谷
六月上旬	菅谷教専	河北
六月中旬	神保慶善	婦負・四方
六月下旬	森本鉄栄	能美
六月下旬	小野世雄	福岡町小野
七月上旬	干場教昭	金沢
七月中旬	小野世雄	福岡町小野
七月中旬	黒川鳳了	東京
七月中旬	龍樹法	七尾
七月下旬	今井勲	福井
八月上旬	藤條正嵩	朝日町泊
八月中旬	国門量記	羽咋
八月中旬	大瀧咸	金沢

昭和八

八月下旬	高桜薫	下新川
九月上旬	長崎慶澄	下新川
九月中旬	泉口竟了	鳳至
九月下旬	佐々木正弘	羽咋
十月上旬	小野宣明	石川郡
十月中旬	稲垣徳秀	鳳至
十月下旬	森田教信	小矢部・石坂
十一月上旬	伊藤浄鏡	三重・員弁郡
十一月中旬	三本善正	岐阜・大野郡
十一月下旬	樋口徳円	津幡
十二月上旬	本林勝二	金沢
十二月上旬	北口照憲	金沢
十二月中旬	持田徳明	河北
十二月下旬	寺崎松丸	石川・江沼郡
一月上旬	土屋教順	井波町
一月中旬	上瀧順憲	国吉・頭川
一月下旬	武田経丸	津幡
二月上旬	西村寿覚	高岡
二月中旬	木村教念	城端・上見
二月下旬	田中見正	北海道
二月下旬	佐々木正弘	羽咋
三月上旬	松金持法	氷見
三月上旬	齊藤順明	井波
三月中旬	神保慶善	東京
三月下旬	月見洪受	上新川郡
四月上旬	三矢恵覚	氷見
四月上旬	園大然	井波別院
四月中旬	藤田観秀	魚津
四月下旬	国門量記	羽咋
土屋豊成	砺波・鹿島	
四月下旬	金村憲三	高岡
四月下旬	朝日観雲	城端・北野
五月上旬	藤條正嵩	朝日町泊
五月上旬	長澤隆照	羽咋
五月中旬	寺尾賢應	金沢
五月下旬	森本鉄栄	能美
六月上旬	松金持法	氷見
六月上旬	三本善正	岐阜・大野郡
六月上旬	上田憲融	井波町
六月中旬	守城照雄	高岡・守山
六月下旬	福江誓成	小矢部・名畑
七月上旬	武田宣聞	高岡
七月中旬	長崎教済	下新川
七月下旬	辰澤昇道	金沢
大瀧咸	井波別院	
八月上旬	園大然	大阪市
八月上旬	稲葉	庄川町三谷
八月中旬	松本得政	能美
八月下旬	南部冏	高岡
九月上旬	香城智山	

昭和九

九月中旬	小野世雄	福岡町小野
九月下旬	三本善正	岐阜・大野郡
九月下旬	小野世雄	福岡町小野
九月下旬	土屋豊成	砺波・鹿島
十月上旬	干場教昭	金沢
十月中旬	森田賢了	小矢部・石坂
十月下旬	樋口徳圓	津幡
十一月上旬	北口照憲	金沢
十一月中旬	小野宣義	石川郡
十一月下旬	稲垣徳秀	鳳至
十二月上旬	野上戀南	魚津
十二月中旬	青木唯信	庄川町金屋
十二月下旬	朝日龍雲	城端・北野
十二月下旬	松島玄成	小矢部・平桜
十二月下旬	持田徳明	金沢
一月上旬	土屋教順	井波
一月中旬	上瀧順憲	国吉・頭川
二月上旬	武田経丸	津幡
二月上旬	加藤明圓	津幡
二月中旬	西村寿覚	高岡
二月中旬	廣橋東洋	氷見
二月下旬	木村教念	城端・上見
二月下旬	守城照雄	高岡・守山
三月上旬	金村憲三	高岡
三月上旬	長村大圓	
三月中旬	寺崎松丸	加賀
三月中旬	関智壽	高岡
三月下旬	金村憲三	高岡
三月下旬	長村大圓	
四月上旬	月見洪受	上新川郡
四月中旬	三矢恵覚	氷見
四月下旬	土屋豊成	砺波・鹿島
五月上旬	藤田観秀	魚津
五月上旬	園大然	井波別院
五月中旬	寺尾賢應	金沢
五月下旬	松金持法	氷見
六月上旬	神保慶善	四方町
六月中旬	三本善正	岐阜・大野郡
六月中旬	芳岡勇玄	羽咋
六月下旬	西村寿覚	高岡
七月上旬	小野世雄	福岡町小野
七月中旬	松島玄成	小矢部・平桜
七月下旬	藤田観秀	魚津
八月上旬	藤條正嵩	朝日町泊
八月中旬	森本鉄栄	能美
八月下旬	日向順照	鳳至
九月上旬	福江誓成	小矢部・名畑
九月上旬	武田経丸	津幡
九月上旬	朝日龍雲	城端・北野
	香城智山	野々市

九月上旬	小野房堅正	富山市	十月上旬
九月中旬	三村常念	魚津	十月中旬
九月中旬	光琳寺（宮江法眼）	小矢部・下中	十月下旬
九月中旬	密山理圓	砺波	十一月上旬
十月上旬	松本得政	庄川町三谷	十一月中旬
十月上旬	森田賢了	小矢部・石坂	十二月上旬
十月中旬	朝日龍雲	城端・北野	十二月中旬
十月中旬	持田徳明	石川郡	十二月下旬
十月中旬	土屋豊成	砺波・鹿島	昭和十一
十月中旬	森田賢了	小矢部・石坂	一月上旬
十月下旬	干場教昭	金沢	二月中旬
十一月上旬	西村制以	高岡	三月上旬
十一月中旬	玉木晴信		三月中旬
十一月下旬	野村文應	福野町高堀	四月上旬
十二月上旬	国門量記	羽咋	五月上旬
十二月中旬	持田徳明	石川郡	六月下旬
十二月上旬	長谷大玄	金沢	一月上旬
十二月下旬	武田宣聞	高岡	昭和十八
昭和十	上瀧順憲	国吉・頭川	一月下旬
一月中旬	武田経丸	津幡	一月中旬
一月下旬	青木唯信	庄川町金屋	二月上旬
二月上旬	藤條正嵩	朝日町泊	二月中旬
二月中旬	守城照雄	高岡・守山	二月下旬
二月下旬	土屋徳静		三月上旬
三月上旬	樋口得圓	津幡	三月中旬
三月中旬	密山理圓	砺波	四月上旬
三月下旬	野上戇南	魚津	四月中旬
四月上旬	月見洪受	上新川郡	四月下旬
四月中旬	荒川徳證	津幡	五月上旬
四月下旬	土屋豊成	砺波・鹿島	五月中旬
五月上旬	小野宣明	金沢	五月下旬
五月中旬	寺尾賢應	金沢	六月上旬
五月下旬	稲垣徳秀	鳳至	六月中旬
六月上旬	森本鉄栄	能美	六月下旬
六月中旬	加藤明圓	津幡	七月上旬
六月下旬	松金持法	氷見	七月中旬
七月上旬	森本鉄栄	能美	七月下旬
七月上旬	稲葉了證		八月上旬
七月中旬	疋田慧深	大阪	八月中旬
七月下旬	小野世雄	福岡町小野	八月下旬
八月上旬	寶田覚導	庄川町天正	九月上旬
八月中旬	山田俊守	愛知・海部郡	九月中旬
八月下旬	野村文應	福野町高堀	九月下旬
八月下旬	南部岡	能美	九月上旬
八月下旬	小野房堅正	富山市	九月中旬
九月上旬	香城智山	野々市	九月下旬
九月中旬	小野世雄	福岡町小野	十月上旬
九月中旬	森本鉄栄	能美	十月中旬
九月下旬	朝日龍雲	城端・北野	十月下旬
九月下旬	松本得政	庄川町三谷	十月上旬

十月上旬	北口照憲	金沢	十月中旬
十月中旬	福江誓成	小矢部・名畑	十月下旬
十月下旬	木村教念	城端	十一月上旬
十一月上旬	山田純圓	小矢部・宮島	十一月中旬
十一月中旬	脇坂賢教	滋賀・長浜市	十一月下旬
十二月上旬	園諦然	小矢部・平桜	十二月上旬
十二月中旬	松島玄成	氷見	十二月中旬
十二月下旬	廣橋東洋	津幡	十二月下旬
昭和十一	加藤明圓	朝日町泊	昭和十九
一月上旬	藤條正嵩	金沢	一月上旬
二月中旬	斉藤正信	高岡	一月中旬
三月上旬	武田宣聞	小矢部・石坂	一月下旬
三月中旬	森田賢了	羽咋	二月上旬
四月上旬	芳岡勇玄	福岡町小野	二月中旬
五月上旬	小野世雄	津幡	二月下旬
六月下旬	加藤明圓		三月上旬
一月上旬	若山蓮成	金沢	三月中旬
一月中旬	橋瑞順		三月下旬
一月下旬	能浦真隆		四月上旬
二月上旬	千羽秀学		四月中旬
二月中旬	綱村静信	福光町綱掛	四月下旬
二月下旬	山本龍音	福井市	五月上旬
三月上旬	深谷良矣		五月中旬
三月中旬	川岸後稠	輪島	五月下旬
三月下旬	船田鉄城	鳳至	六月上旬
四月上旬	徳本方周		六月中旬
四月中旬	棚瀬信順		六月下旬
四月下旬	土屋豊成	砺波・鹿島	七月上旬
五月上旬	園大然	井波別院	七月中旬
五月中旬	寺尾賢昭	石川郡	七月下旬
五月下旬	安江健堂		八月上旬
六月上旬	橋瑞順	金沢	八月中旬
六月中旬	長谷大玄	金沢	八月下旬
六月下旬	太田順道	河北	九月上旬
七月上旬	小野宣明	金沢	九月中旬
七月中旬	臼井賢雄	金沢	九月下旬
七月下旬	伊東率	朝日町泊	十月上旬
八月上旬	藤條正嵩	滋賀・長浜市	十月中旬
八月中旬	脇坂賢教	福光町土生新	十月下旬
八月下旬	梅原暁俊	福光町能美	十一月上旬
九月上旬	石川宗應	富山市	十一月中旬
九月中旬	竹澤秀賢	小杉・西高木	十一月下旬
九月下旬	葉室文海	金沢	十月上旬
十月上旬	橋瑞順	河北	十月中旬
十月中旬	龍口隆照	朝日町泊	十月下旬
十月下旬	伊東率	河北	十一月上旬
十一月上旬	朝日龍雲	小矢部	十一月中旬
十一月中旬	松島玄成	福光町松木	十一月下旬
十一月下旬	近藤欣一		十二月上旬
十二月上旬	土居憲雄		十二月中旬

十二月下旬	寶田覚導	庄川町天正	十一月下旬
十月上旬	干場教昭	金沢	十二月中旬
十月中旬	山本龍音	福井市	十二月下旬
十月下旬	秋田光圓		昭和二十
十一月上旬	佐竹玄成	河北	一月上旬
十一月中旬	持田徳明	庄川町三谷	一月中旬
十一月下旬	松本得政	金沢	一月下旬
十二月上旬	木下信成		二月上旬
十二月中旬	小野宣正	津幡	二月中旬
十二月下旬	樋口満丸	津幡	三月上旬
一月上旬	加藤明圓		三月中旬
一月中旬	千羽秀学		三月下旬
一月下旬	若山蓮成	津幡	四月中旬
二月上旬	荒川徳證		四月下旬
二月中旬	若山蓮成		五月上旬
二月下旬	綱村静信		五月中旬
三月上旬	山田純圓	福光町綱掛	五月下旬
三月中旬	川岸後稠	小矢部・宮島	六月上旬
三月下旬	山本龍音	輪島	六月中旬
四月上旬	藤條正嵩	福井市	六月下旬
四月中旬	葉室文海	朝日町泊	七月上旬
四月下旬	棚瀬信順	小杉町	七月中旬
五月上旬	佐野即誠		八月上旬
五月中旬	土屋豊成	砺波・鹿島	八月中旬
五月下旬	土居憲雄	福光町松木	八月下旬
六月上旬	園大然	井波別院	九月上旬
六月中旬	木下信成		九月中旬
六月下旬	土居憲雄	福光町	九月下旬
七月上旬	木下信成		十月上旬
七月中旬	浅井真念	輪島	十月中旬
七月下旬	梨谷了栄		十月下旬
八月上旬	小野宣明	金沢	十一月上旬
八月中旬	脇坂賢教	滋賀・長浜市	十一月中旬
八月下旬	大田順導	河北	十一月下旬
九月上旬	藤條正嵩	朝日町泊	十二月上旬
九月中旬	船田鉄城		十二月中旬
九月下旬	清水教信	金沢	十二月下旬
十月上旬	樋口満丸	小矢部	昭和二十一
十月中旬	竹澤秀賢	河北	一月上旬
十月下旬	佐藤山正行	朝日町泊	一月中旬
十一月上旬	臼井賢雄		一月下旬
十一月中旬	松島玄成	金沢	二月上旬
十一月下旬	朝日龍雲	小矢部	二月中旬
十二月上旬	伊東率	庄川町天正	三月上旬
十二月中旬	白藤圓明	金沢	三月中旬
十二月下旬	寶田覚導	庄川町三谷	三月下旬
昭和二十六	橋瑞順	福光町能美	四月上旬
一月上旬	松本得政		四月中旬
一月中旬	石川宗應		四月下旬

五月上旬	松本得政	庄川町三谷	十一月下旬
五月中旬	竹澤秀賢	富山市	十二月中旬
五月下旬	持田徳明	河北	十二月下旬
六月上旬	加藤明圓	津幡	昭和二十二
六月中旬	若山		一月上旬
六月下旬	棚瀬信順		一月中旬
七月上旬	山本龍音		一月下旬
七月中旬	臼井		二月上旬
七月下旬	千羽秀学		二月中旬
八月上旬	木田弘憲		三月上旬
八月中旬	船田鉄城		三月中旬
八月下旬	小野宣正		三月下旬
九月上旬	土屋豊成		四月中旬
九月中旬	木下信成		四月下旬
九月下旬	干場教昭		五月上旬
十月上旬	大田順導		五月中旬
十月中旬	小野宣明		五月下旬
十月下旬	地藤昭賢		六月上旬
十一月上旬	持田徳明		六月中旬
十一月中旬	脇坂賢教		六月下旬
十一月下旬	橋瑞順		七月上旬
十二月上旬	南部岡		七月中旬
十二月中旬	竹澤秀賢		七月下旬
十二月下旬	黒田廣恵		八月上旬
昭和二十五	秋田光圓		八月中旬
一月上旬	寶田覚導		八月下旬
二月上旬	加藤明圓		九月上旬
二月中旬	臼井賢雄		九月中旬
三月上旬	白藤圓明		九月下旬
三月中旬	朝日龍雲		十月上旬
三月下旬	井上祐邦		十月中旬
四月上旬	土屋豊成		十月下旬
四月中旬	範浄文雄		十一月上旬
四月下旬	加藤明圓		十一月中旬
五月上旬	藤條正嵩		十一月下旬
五月中旬	岩井専精		十二月上旬
五月下旬	山本龍音		十二月中旬
六月上旬	福井市		十二月下旬
六月中旬	国吉		昭和二十三
六月下旬			一月上旬
七月上旬	朝日町泊		一月中旬
七月中旬	津幡		一月下旬
七月下旬	羽咋		二月上旬
八月上旬	砺波・鹿島		二月中旬
八月中旬	名古屋		二月下旬
八月下旬	河北		三月上旬
九月上旬	白藤圓明		三月中旬
九月中旬	朝日龍雲		三月下旬
九月下旬	井上祐邦		四月上旬
十月上旬	土屋豊成		四月中旬
十月中旬	範浄文雄		四月下旬
十月下旬	加藤明圓		五月上旬
十一月上旬	臼井賢雄		五月中旬
十一月中旬	白藤圓明		五月下旬
十一月下旬	朝日龍雲		六月上旬
十二月上旬	井上祐邦		六月中旬
十二月中旬	土屋豊成		六月下旬
十二月下旬	範浄文雄		七月上旬
昭和二十四	加藤明圓		七月中旬
一月上旬	藤條正嵩		七月下旬
一月中旬	岩井専精		八月上旬
一月下旬	山本龍音		八月中旬
二月上旬	福井市		八月下旬
二月中旬	国吉		九月上旬
三月上旬			九月中旬
三月中旬	鹿島		九月下旬
三月下旬	北海道・苫前郡		十月上旬
四月上旬	金沢		十月中旬
四月中旬	北海道・苫前郡		十月下旬
四月下旬	庄川町三谷		十一月上旬
五月上旬	福井市		十一月中旬
五月中旬	津幡		十一月下旬
五月下旬	金沢		十二月上旬

一月下旬	鳥越知慶	福光町砂子谷	
一月下旬	天井		
二月上旬	臼井		
中旬	宝性實成	福光町高宮	
三月中旬	島田幸照		
三月下旬	橋瑞順		
四月下旬	宝性實成	金沢	
五月中旬	土屋豊成	福光町高宮	
五月下旬	範浄文雄	砺波・鹿島	
六月上旬	卜部法浄	羽咋	
六月中旬	修田玄□	砺波・秋元	
六月下旬	真栗専證	北海道・苫前郡	
七月上旬	藤條正嵩	朝日町泊	
七月中旬	碓井賢章	鳳至	
七月下旬	山本龍音	福井市	
八月上旬	出見世法観	羽咋	
八月中旬	井上祐邦	名古屋	
八月下旬	船田鉄城		
九月上旬	廣橋		
九月中旬	磯部教證	国吉	
十一月下旬	臼井賢雄	金沢	
十二月上旬	松本得政	庄川町三谷	
十二月中旬	山本		
昭和二十七	白藤圓明		
一月上旬	加藤明圓	津幡	
一月下旬	天井順導	金沢	
二月上旬	臼井賢雄	金沢	
二月下旬	鳥越知慶	福光町砂子谷	
三月上旬	舟田		
三月中旬	藤井一光		
三月下旬	宝性實成	福光町高宮	
四月上旬	藤條正嵩	朝日泊	
四月中旬	吉本		
四月下旬	土屋豊成	砺波・鹿島	
五月上旬	範浄文雄	羽咋	
五月中旬	真栗専證	北海道・苫前郡	
五月下旬	卜部法浄	砺波・秋元	
六月上旬	徳本方周	鳳至	
六月中旬	滝岡徳什	羽咋	
六月下旬	橋瑞順	金沢	
七月上旬	藤田良沼	福岡町大滝	
七月中旬	梅原儆	鳳至	
七月下旬	加藤真明		
七月下旬	碓井賢章		
八月上旬	鳴海教導		
八月中旬	北上芳秀		
八月下旬	出見世法観		
九月上旬	山本	羽咋	
九月中旬			

九月下旬	臼井賢雄	金沢	
十月下旬	梅原暁俊	福光町土生新	
十一月中旬	松本		
十一月下旬	碓井賢章	庄川町三谷	
十二月上旬	山本龍音	鳳至	
十二月下旬	範浄文雄	羽咋	
昭和二十八	宝性實成	福井市	
一月上旬	加藤明圓	福光町高宮	
一月中旬	天井順導	津幡	
一月下旬	橋瑞順	金沢	
二月上旬	臼井賢雄	金沢	
二月下旬	梅原暁俊	福光町土生新	
三月上旬	藤井一光		
三月中旬	佐竹誓		
三月下旬	船田鉄城		
四月上旬	符波諦教	金沢	
四月中旬	鳥越		
四月下旬	藤條正嵩		
五月上旬	土屋豊成	朝日町泊	
五月中旬	上野慶宗	砺波・鹿島	
五月下旬	梅原儆	輪島	
六月上旬	宮川	鳳至	
六月中旬	徳本方周		
六月下旬	東天幸		
七月上旬	宝性實成	福光町高宮	
七月中旬	加藤真明		
七月下旬	真栗専證	北海道・苫前郡	
八月上旬	藤田良沼	福岡町大滝	
八月中旬	松本法順	津幡	
八月下旬	滝岡徳什	羽咋	
九月上旬	春岡順正		
九月中旬	碓井賢章	鳳至	
九月下旬	範浄文雄	羽咋	
十月上旬	山崎		
十月中旬	卜部法浄		
十月下旬	臼井賢雄	砺波・秋元	
十一月上旬	経森伸昭	金沢	
十一月中旬	畠山秀円	門前	
十一月下旬	碓井賢章	鳳至	
十二月上旬	山本龍音	鳳至	
十二月中旬	鳥越智章	福井市	
昭和二十九	加藤明圓	金沢	
一月上旬	上瀧順憲	津幡	
一月中旬	若山蓮成	高岡・頭川	
一月下旬	臼井賢雄		
二月上旬	橋瑞順		
二月中旬	梅原暁俊	金沢	
二月下旬	佐竹	金沢	
三月上旬	斉藤	福光町土生新	
三月中旬	原平教穏		

三月下旬	春岡順正	鳳至	
四月上旬	碓井賢章	朝日町泊	
四月中旬	藤條正嵩	砺波・鹿島	
四月下旬	土屋豊成	羽咋	
五月上旬	範浄文雄	金沢	
五月中旬	香城教道	高岡	
五月下旬	卜部法浄	鳳至	
五月下旬	長尾淳證	金沢	
六月上旬	天井順導	金沢	
六月中旬	符波諦教	金沢	
六月下旬	黒川幸信	北海道・苫前郡	
七月上旬	真栗専證	輪島	
七月上旬	上野慶宗	福岡町大滝	
七月中旬	藤田良沼	輪島	
七月下旬	川岸後稠	石川・鹿島郡	
八月上旬	朝倉義照		
八月中旬	中西智圓		
八月下旬	橋瑞順	金沢	
九月上旬	鳥越智章		
九月中旬	池村龍導	金沢	
九月下旬	東天幸	鳳至	
十月上旬	梅原儆	名古屋	
十月中旬	横井円諦		
十月下旬	高森		
十一月上旬	寺島		
十一月中旬	碓井賢章	鳳至	
十一月下旬	山本		
十二月上旬	松本法順	津幡	
十二月中旬	宝性實成	福光町高宮	
昭和三十	天井順導	金沢	
五月上旬	香城教道	金沢	
七月上旬	藤田良沼	福岡町大滝	
七月中旬	範浄文雄	羽咋	
七月下旬	上野慶宗	輪島	
七月上旬	佐々木伸麿		
昭和三十一	長柄勝円	河北	
七月上旬	藤田良沼	福岡町大滝	
七月中旬	山下正勝	奈良・宇陀郡	
七月下旬	干場教昭	金沢	
八月中旬	長尾淳證	鳳至	
八月中旬	香城学	野々市	
九月上旬	梅原儆	鳳至	
九月下旬	伊藤澍	金沢	
十月上旬	萬澤慧真	羽咋	
十月中旬	浅井真念	輪島	
十月下旬	畠山秀円	鳳至・門前	
十一月上旬	平田環樹	大阪市	
十一月中旬	寺島立峰	魚津	
十一月下旬	碓井賢章	鳳至	
十二月上旬	吉本明児	河北	

十二月上旬	山本龍音	福井市	
十二月中旬	美濃静江	河北	
十二月中旬	大野正平	金沢	
十二月二十一日	川岸不退	輪島	
十二月二十一日	萬澤慧真	羽咋	
十二月二十一日	吉本寿寛	津幡	
十二月二十一日	経森伸昭	門前	
十二月二十一日	福谷祐恵	羽咋	
十二月二十一日	川岸不退	輪島	
十二月下旬	加藤明圓	津幡	
昭和三十二	永藁信昭	金沢	
一月上旬	成田正麿	珠洲	
一月中旬	臼井賢雄	金沢	
一月下旬	上瀧順憲	頭川	
二月上旬	梅原暁俊	福光町土生新	
二月中旬	山田純圓	小矢部・石動	
二月下旬	寺島立峰	魚津	
三月上旬	桃井励壽	富山市	
三月中旬	池村龍導	金沢	
三月下旬	香城教心	野々市	
四月上旬	藤岡賢治	北海道・日高郡	
四月中旬	長田照顕	鳳至	
四月下旬	川岸不退	輪島	
五月上旬	藤條正嵩	朝日町泊	
五月中旬	斉藤琢	滑川	
五月下旬	香城学	野々市	
五月下旬	美濃静江	河北	
五月中旬	森金法安	羽咋	
五月下旬	金剛静樹	石川・鹿島郡	
六月上旬	滝岡徳什	羽咋	
六月上旬	荒川徳證	津幡	
六月中旬	鳥越知慶	津幡	
六月中旬	西尾常信	福光町砂子谷	
六月下旬	卜部法浄	福光町	
六月下旬	石黒秀学	高岡	
七月上旬	真栗専證	小杉町黒川	
七月中旬	上野慶宗	北海道・苫前郡	
七月下旬	藤田良沼	輪島	
七月下旬	山下正勝	福岡町大滝	
八月上旬	西山和順	奈良・宇陀郡	
八月中旬	朝倉静雄	能美	
八月下旬	橋瑞順	石川・鹿島郡	
九月上旬	長柄勝円	金沢	
九月中旬	萬澤慧真	羽咋	
九月下旬	鳥越研章	金沢	
十月上旬	範浄文雄	羽咋	
	出見世法観	鳳至・門前	
	経森伸昭		

十月上旬	伊藤澍	金沢
十月中旬	松本法順	津幡
十月中旬	符波諦教	金沢
十月下旬	平田環樹	氷見
十一月上旬	梅原儆	鳳至・穴水
十一月中旬	大橋賢正	加賀・大聖寺
十一月下旬	横井円諦	名古屋
十一月上旬	碓井賢章	鳳至・穴水
十二月上旬	山本龍音	福井市
十二月下旬	稲澤勝憲	砺波・三合
一月上旬	加藤明圓	津幡
一月中旬	川岸不退	輪島
一月下旬	西尾常信	福光町
二月上旬	平田環樹	氷見
三月上旬	臼井賢雄	金沢
三月下旬	寺本明親	河北
三月上旬	山下正勝	奈良・宇陀郡
四月上旬	石川宗應	福光町能美
四月中旬	畠山秀円	鳳至・門前
四月下旬	長田照顕	鳳至・宇出津
五月上旬	藤條正嵩	朝日町泊
五月中旬	天井順導	金沢
五月下旬	碓井賢章	鳳至・穴水
五月下旬	木田弘憲	鶴来
五月中旬	真栗専證	北海道・苫前郡
六月上旬	滝岡徳什	羽咋
六月上旬	卜部法浄	高岡
六月中旬	成田正麿	珠洲
六月中旬	東静信	小松
六月中旬	青木明透	大阪市
六月下旬	本居愛邦	滋賀・伊香郡
六月下旬	光林義山	羽咋
七月上旬	山田純圓	小矢部・石動
七月上旬	上野慶宗	輪島
七月中旬	藤田良沼	福岡町大滝
七月下旬	高森顕徹	高岡・伏木
八月上旬	寺島立峰	魚津
八月上旬	畠山賢心	高岡・蓮花寺
八月中旬	荒川徳證	津幡
八月中旬	上瀧利正	頭川
八月下旬	上瀧順憲	頭川
八月下旬	西尾星明	魚津
八月下旬	堀信誠	金沢
九月上旬	香城学	野々市
九月上旬	伊藤澍	金沢
九月中旬	鳥越研章	金沢
九月中旬	吉藤孝順	津幡
九月下旬	梅原儆	鳳至・穴水
十月上旬	橋瑞順	金沢
十月中旬	萬澤慧真	羽咋

昭和三十四

十月中旬	真栗良照	小矢部
十月下旬	経森伸昭	門前
十一月上旬	安田智玄	津幡
十一月中旬	大橋賢正	加賀・大聖寺
十二月上旬	滝本重誓	羽咋
十二月中旬	山本龍音	福井市
十二月下旬	松本法順	津幡
一月上旬	美濃静江	河北
一月中旬	山本顕正	羽咋・志雄
一月下旬	加藤明圓	津幡
一月下旬	高平幸真	高岡
二月上旬	持田文雄	金沢
二月中旬	細川行樹	氷見
二月下旬	山本龍音	福井市
三月上旬	臼井賢雄	金沢
三月中旬	長柄勝円	河北
三月下旬	西尾常信	福光町
四月上旬	梅原暁俊	福光町土生新
四月中旬	石黒秀学	小杉町黒川
四月下旬	本居愛邦	滋賀
五月上旬	藤井恵隆	羽咋
五月中旬	吉藤孝順	津幡
五月下旬	石田香道	新潟・糸魚川市
六月上旬	西山和順	能美
六月中旬	寺島立峰	魚津
六月下旬	山田純圓	小矢部・石動
七月上旬	斉藤琢	滑川
七月中旬	鳥越知慶	福光町砂子谷
七月下旬	真栗専證	北海道・苫前郡
八月上旬	木田弘憲	福光町
八月中旬	土居康正	鶴来
八月下旬	青木明透	高岡
八月下旬	龍川法真	頭川
九月上旬	成田正麿	石川郡
九月中旬	東静信	福光町湯谷
九月下旬	碓井賢章	大阪市
十月上旬	山下正勝	入善町
十月中旬	石田香道	大阪市
十月下旬	橋瑞順	富山市
十一月上旬	畠山賢心	珠洲
十一月中旬	美濃静江	小松
十一月下旬	島越研章	鳳至
十二月上旬	香城教	奈良
十二月中旬		新潟
十二月下旬		金沢
一月上旬		高岡・蓮花寺
一月中旬		河北
一月下旬		金沢
二月中旬		野々市
三月上旬		
三月中旬		
三月下旬		
四月上旬		
四月中旬		
四月下旬		
五月上旬		
五月中旬		
五月下旬		
六月上旬		
六月中旬		
六月下旬		
七月上旬		
七月中旬		
七月下旬		
八月上旬		
八月中旬		
八月下旬		
九月上旬		

昭和三十五

九月中旬	竹澤秀賢	富山市水橋
九月中旬	西村暁勝	小松
九月下旬	梅原儆	鳳至・穴水
十月上旬	伊藤澍	金沢
十月中旬	森金法安	羽咋
十月中旬	畠山秀円	鳳至・門前
十月下旬	長田照顕	鳳至
十月下旬	松本法順	津幡
十一月上旬	上野慶宗	輪島
十一月上旬	萬澤慧真	羽咋
十一月下旬	横井円諦	名古屋
十二月上旬	川岸不退	輪島
十二月上旬	石川宗應	福光町能美
十二月中旬	藤田良沼	福岡町大滝
十二月下旬	本居愛邦	滋賀
一月上旬	山本顕正	羽咋
一月中旬	加藤明圓	津幡
一月下旬	吉藤孝順	津幡
二月中旬	萬澤慧真	羽咋
三月上旬	山本龍音	福井市
三月上旬	若山竜俊	羽咋
四月上旬	山田純圓	小矢部・石動
五月上旬	山下正勝	奈良・宇陀郡
五月中旬	滝本重誓	羽咋
五月下旬	安多正樹	津幡
五月下旬	範浄文雄	羽咋
五月中旬	寺島立峰	魚津
五月中旬	真栗専證	北海道・苫前郡
五月下旬	鳥越知慶	福光町砂子谷
六月上旬	卜部法浄	滑川
六月上旬	高木元秀	高岡
六月中旬	成田正麿	滋賀・高島郡
六月中旬	川岸不退	珠洲
六月下旬	美濃静江	輪島
七月上旬	西尾常信	河北
七月上旬	長柄勝円	福光町
七月中旬	上野慶宗	鶴来
七月下旬	木田弘憲	輪島
八月上旬	藤田良沼	河北
八月中旬	土居康正	福光町
八月下旬	本居愛邦	滋賀
九月上旬	土居康正	福光町
九月中旬	星子恵真	熊本
九月下旬	長谷川信成	福光町湯谷
十月上旬	碓井賢章	鳳至
十月中旬	香城学	野々市
十月下旬	細川行樹	氷見
十一月上旬	国門量記	羽咋
十一月中旬	梅原儆	鳳至・穴水
十一月下旬		
十二月上旬		
十二月中旬		
十二月下旬		
一月上旬		
一月中旬		
一月下旬		
二月上旬		
三月上旬		
三月中旬		
三月下旬		
四月上旬		
四月中旬		
四月下旬		
五月上旬		
五月中旬		
五月下旬		
六月上旬		
六月中旬		
六月下旬		
七月上旬		
七月中旬		
七月下旬		
八月上旬		
八月中旬		
八月下旬		
九月上旬		
九月中旬		
九月下旬		

昭和三十六

十月上旬	伊藤澍	金沢
十月上旬	竹澤秀賢	富山市水橋
十月中旬	北山教令	羽咋
十月下旬	道元宏忍	井波町飛騨屋
十一月上旬	大橋賢了	北海道・上川郡
十一月中旬	長田照顕	鳳至
十一月下旬	天井順導	金沢
十二月上旬	石川宗應	福光町能美
十二月中旬	長谷川俊順	井波別院
一月上旬	山本龍音	福井市
二月下旬	梅原暁俊	福光町土生新
三月上旬	長柄勝円	河北
三月中旬	山本顕正	羽咋
三月下旬	寺島立峰	魚津
三月下旬	長田照顕	鳳至
四月上旬	本居愛邦	滋賀
四月中旬	鳥越知慶	福光町砂子谷
四月下旬	藤條正嵩	朝日町泊
五月上旬	山田	
五月上旬	長谷川信成	福光町湯谷
五月中旬	西尾常信	福光町
五月下旬	畠山覚至	鳳至・門前
五月下旬	龍川法真	富山市
六月上旬	西尾常信	福光町
六月二十六日	卜部法浄	高岡
六月二十六日	玉池流灌	入善町
六月二十六日	浦田秀栄	入善町
六月二十六日	青木明透	大阪・守口市
六月二十六日	佐々木裕証	大阪・河内市
六月下旬	永生康信	福野・田屋
七月上旬	真栗専證	北海道・苫前郡
七月下旬	藤田大了	高岡・中保
七月下旬	西川義慶	福光町才川
八月上旬	美濃静江	河北
八月中旬	安多正樹	津幡
八月下旬	道岡善信	愛媛・大洲市
八月下旬	国門量記	羽咋
九月上旬	萬澤慧真	滋賀・高島郡
九月中旬	高木元秀	羽咋
九月下旬	福谷祐恵	加賀
十月上旬	清水賢恵	富山市水橋
十月中旬	竹澤秀賢	滋賀・高島郡
十月下旬	高木元秀	福岡町大滝
十二月下旬	藤田良沼	氷見
三月下旬	平田環樹	羽咋
四月上旬	山本顕正	鳳至・門前
四月中旬	畠山秀円	津幡
四月下旬	松本法順	小矢部・石動
五月上旬	山田純圓	井波町飛騨屋
	道元宏忍	

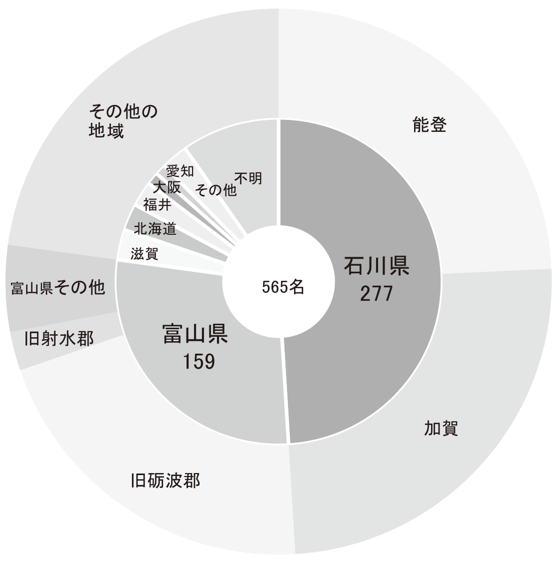
昭和三十七

	五月上旬	天井順導	金沢
	五月中旬	稲澤勝憲	砺波・三谷
	五月下旬	畠山覚至	鳳至・門前
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月上旬	卜部法浄	高岡
	六月上旬	平野賢章	河北
	六月中旬	香城学	野々市
	六月下旬	藤田良沼	福岡町大滝
	六月下旬	範浄文雄	羽咋
	六月下旬	川岸不退	輪島
	七月上旬	林円精	加賀・山中温泉
	七月上旬	上野慶宗	輪島
	七月中旬	龍川法真	富山市
	七月中旬	美濃静江	河北
	八月上旬	国門量記	羽咋
	八月中旬	馬川頼徳	福光町徳成
	八月中旬	本居愛邦	滋賀
	八月下旬	西川独笑	金沢
	八月下旬	道岡善信	愛媛・大洲市
	九月上旬	黒川幸信	金沢・森本
	九月中旬	長田照顕	鳳至
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月上旬	伊藤澍	金沢
	十月中旬	涛了恵	珠洲
	十月下旬	西村暁勝	小松
	十一月中旬	荒川徳證	津幡
	十一月下旬	平田教了	高岡
	十二月上旬	石川宗應	福光町能美
	十二月中旬	菅野憲正	石川・鹿島郡
	十二月下旬	藤田良沼	福岡町大滝
昭和三十八	一月上旬	土居康正	福光町
	一月上旬	本居愛邦	滋賀・伊香郡
	一月中旬	福谷祐恵	羽咋
	二月下旬	梅原暁俊	福光町土生新
	三月下旬	平田環樹	氷見
	四月上旬	西村暁勝	石川郡美川
	四月中旬	山本顕正	羽咋
	四月下旬	山田純圓	小矢部・石動
	四月下旬	伊藤澍	金沢
	五月上旬	平野賢章	河北
	五月上旬	天井順導	金沢
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月上旬	卜部法浄	高岡
	六月上旬	森金法安	羽咋
	六月中旬	扇原豊順	金沢
	六月中旬	範浄文雄	羽咋
	六月下旬	川岸不退	輪島
	六月下旬	藤田良沼	福岡町大滝
	七月上旬	真栗専證	小矢部
	七月上旬	上野慶宗	輪島
	七月中旬	條田立恵	北海道・網走郡
	七月中旬	橋本勝栄	新湊
	七月下旬	桑谷観宇	
	七月下旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	七月下旬	龍川法真	富山市
	八月上旬	高木元秀	滋賀・高島郡
	八月中旬	扇原豊順	金沢
	八月下旬	道岡善信	愛媛・大洲市
	八月下旬	坪井高才	羽咋
	九月上旬	国門量記	羽咋
	九月中旬	鳥越知慶	福光町砂子谷
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月上旬	黒川幸信	金沢
	十月中旬	涛了恵	珠洲
	十月中旬	畠山秀円	鳳至・門前
	十一月中旬	本居愛邦	滋賀・伊香郡
	十一月下旬	川岸後稠	輪島
	十二月上旬	石川宗應	福光町能美
	十二月中旬	林円精	加賀・山中温泉
	十二月中旬	道元宏忍	井波町飛騨屋
	十二月下旬	菅原教亮	福井・大野市
昭和三十九	一月上旬	土居康正	福光町
	一月中旬	本居愛邦	滋賀・伊香郡
	一月中旬	今井善信	福光町土生新
	一月下旬	萬澤慧真	羽咋
	二月中旬	吉井白幢	高岡・吉久
	二月下旬	梅原暁俊	福光町土生新
	三月下旬	石川宗應	福光町能美
	四月中旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	四月中旬	鳥越知慶	福光町砂子谷
	四月下旬	山田純圓	小矢部・石動
	四月下旬	滝岡徳什	羽咋
	五月上旬	伊藤澍	金沢
	五月上旬	松下享道	金沢
	五月中旬	本居愛邦	滋賀・伊香郡
	五月下旬	天井順導	金沢
	六月上旬	卜部法浄	高岡
	六月上旬	平野賢章	河北
	六月中旬	佐々木伸麿	輪島
	六月中旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	荒川徳證	津幡
	七月上旬	橋本勝栄	新湊
	七月上旬	上野慶宗	輪島
	七月中旬	山本顕正	羽咋
	七月中旬	桑谷観宇	
	七月下旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	七月下旬	平田教了	輪島
	八月上旬	横井円諦	名古屋
	八月上旬	福谷祐恵	羽咋
	八月中旬	西村暁勝	石川郡美川
	八月下旬	道岡善信	愛媛・大洲市
	八月下旬	道元宏忍	井波町飛騨屋
	九月上旬	平田環樹	氷見
	九月中旬	国門量記	羽咋
	十月上旬	黒川幸信	金沢・森本
	十月中旬	涛了恵	珠洲
	十二月上旬	坪井高才	羽咋
	十二月中旬	林円精	加賀・山中温泉
昭和四十	一月上旬	本居愛邦	滋賀・伊香郡
	一月中旬	国門量記	羽咋
	一月下旬	山本龍音	福井市
	二月上旬	金法義正	羽咋
	二月中旬	道元宏忍	井波町飛騨屋
	二月下旬	竹田教観	
	二月下旬	梅原暁俊	福光町土生新
	三月下旬	石川宗應	福光町能美
	六月下旬	松下享道	金沢
	六月下旬	藤田良沼	福岡町大滝
	七月上旬	藤井成己	金沢
	七月上旬	符波諦教	金沢
	七月中旬	高橋専雄	愛媛・松山市
	七月中旬	美濃静江	金沢
	七月下旬	桑谷観宇	
	七月下旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	七月下旬	本居愛邦	滋賀・伊香郡
	八月上旬	国門量記	羽咋
	八月上旬	荒川徳證	津幡
	八月中旬	石川宗應	福光町能美
	八月下旬	稲葉道善	香川・高松市
	八月下旬	高橋泉野	戸出・横越
	九月上旬	山本顕正	羽咋
	九月中旬	畠山秀円	鳳至・門前
	九月中旬	平田教了	輪島
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月中旬	菅原教亮	福井・大野市
	十月中旬	横井円諦	名古屋
	十月下旬	稲葉道善	香川・高松市
	十一月中旬	北口恩憲	金沢
	十一月中旬	林円精	加賀・山中温泉
	十一月下旬	芳野広照	羽咋
	十一月下旬	木村正樹	金沢
	十二月中旬	平田環樹	氷見
	十二月下旬	藤田良沼	福岡町大滝
昭和四十一	一月上旬	本居愛邦	滋賀／金沢
	一月中旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	一月下旬	山本龍音	福井市
	一月下旬	符波諦教	金沢
	二月中旬	国門量記	羽咋
	二月上旬	藤井成己	金沢
	二月中旬	国門量記	羽咋
	二月下旬	梅原暁俊	福光町土生新
	三月上旬	橋瑞順	金沢
	三月下旬	石川宗應	福光町能美
	四月上旬	残井海□	
	四月上旬	清水弘康	
	四月中旬	土居康正	
	四月下旬	平田環樹	氷見
	五月上旬	松尾仙寿	
	五月上旬	福谷祐恵	羽咋
	五月下旬	天井順導	金沢
	六月上旬	卜部	
	六月上旬	竹内静観	
	六月中旬	廣岡兼純	門前
	六月中旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	松下享道	金沢
	六月下旬	荒川徳證	津幡
	七月上旬	川岸不退	輪島
	七月上旬	橋本勝憲	
	七月中旬	坪井高才	羽咋
	七月中旬	高橋専雄	愛媛・松山市
	七月下旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	七月下旬	佐々木伸麿	輪島
	八月上旬	美濃静江	金沢
	八月上旬	本居愛邦	滋賀／金沢
	八月中旬	武田恵明	
	八月中旬	山田純圓	小矢部・石動
	八月下旬	稲葉道善	香川・高松市
	八月下旬	菅原教亮	福井
	九月上旬	山本顕正	羽咋
	九月中旬	藤田良沼	福岡町大滝
	九月中旬	高橋義明	
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月上旬	黒川幸信	金沢
	十月中旬	畠山秀円	鳳至・門前
	十月中旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	十月下旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	十一月中旬	北口照憲	金沢
	十一月下旬	高屋順五	
	十二月上旬	横井円諦	名古屋
	十二月中旬	林円精	加賀・山中温泉
	十二月下旬	高平幸真	高岡
昭和四十二	一月上旬	本居	金沢
	一月中旬	藤井成己	金沢
	一月下旬	山本龍音	福井市
	二月上旬	本居	金沢
	二月下旬	梅原暁俊	福光町土生新
	三月上旬	橋瑞順	金沢
	三月中旬	高平幸真	高岡
	三月下旬	林円精	加賀・山中温泉
	四月上旬	山田純圓	小矢部・石動

	四月中旬	土居康正	福光町
	四月下旬	平田教了	輪島
	四月下旬	松尾仙寿	
	五月上旬	平田環樹	氷見
	五月下旬	稲葉道善	香川・高松市
	五月下旬	山本龍音	福井市
	六月上旬	卜部法浄	高岡
	六月上旬	道元宏忍	井波町飛騨屋
	六月中旬	範浄真了	羽咋
	六月中旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	美濃静江	金沢
	七月上旬	竹内静観	
	七月上旬	高屋順五	
	七月中旬	経森伸昭	門前
	七月中旬	清水弘康	
	七月下旬	高橋専雄	愛媛・松山市
	八月上旬	横井円諦	名古屋
	八月上旬	橋本勝憲	
	八月中旬	藤井成己	金沢
	八月中旬	符越	
	八月下旬	福谷祐恵	羽咋
	八月下旬	宮永教壱	
	九月中旬	坪井高才	羽咋
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月上旬	山本龍音	福井市
	十月上旬	本屋	
	十月中旬	山本顕正	羽咋
	十月下旬	本屋	
	十一月中旬	稲葉道善	香川・高松市
	十一月中旬	源証淳	
	十一月下旬	林円精	加賀・山中温泉
	十二月上旬	荒川徳證	津幡
	十二月中旬	石川宗應	福光町能美
	十二月下旬	藤田良沼	福岡町大滝
昭和四十三	二月上旬	林円精	加賀・山中温泉
	二月中旬	稲葉道善	香川／広島
	二月中旬	横井円諦	名古屋
	二月下旬	梅原暁俊	福光町土生新
	三月上旬	竹内静観	
	三月下旬	山田純圓	小矢部・石動
	四月中旬	高平幸真	高岡
	五月上旬	山本	
	五月下旬	福谷祐恵	羽咋
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月上旬	卜部法浄	高岡
	六月上旬	範浄真了	羽咋
	六月中旬	天井順導	金沢
	六月中旬	美濃静江	金沢
	六月下旬	森金法安	羽咋
	六月下旬	道元宏忍	井波町飛騨屋
	七月上旬	橋本勝憲	
	七月上旬	菅原教亮	福井
	七月中旬	山本顕正	羽咋
	七月下旬	稲葉道善	香川／広島
	八月上旬	広岡	能登
	八月上旬	滝本重誓	羽咋
	八月中旬	藤田良沼	福岡町大滝
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月上旬	林円精	加賀・山中温泉
	十月中旬	経森伸昭	門前
	十一月中旬	稲葉道善	香川／広島
	十二月中旬	平田環樹	氷見
昭和四十四	一月上旬	本居愛邦	金沢
	一月下旬	林	加賀
	三月中旬	木下	
	三月二十一日	稲垣	砺波・苗加
	四月上旬	稲葉道善	広島
	四月中旬	菅原教亮	福井
	（四月）中旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	四月下旬	本居	金沢
	五月上旬	山本	
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月上旬	紆沢悑玫	
	六月上旬	範浄真了	羽咋
	六月中旬	金沢順導	
	六月中旬	藤井	三重
	六月下旬	美濃静江	金沢
	七月上旬	広岡	能登
	七月上旬	岩井	滋賀・伊香郡
	七月中旬	林	
	八月上旬	藤田良沼	福岡町大滝
	八月上旬	辻秀光	奈良
	八月中旬	稲葉道善	広島
	八月中旬	辻秀光	奈良
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月上旬	山本顕正	羽咋
	十月中旬	本居	金沢
	十一月中旬	柏葉	広島
	十一月下旬	林	
	十二月上旬	横井円諦	名古屋
	十二月中旬	平田	
昭和四十五	一月上旬	藤田良沼	福岡町大滝
	一月中旬	本居愛邦	金沢
	二月上旬	梅原	
	四月中旬	菅原教亮	福井
	四月中旬	稲澤勝憲	砺波・三合
	四月下旬	藤井静樹	
	四月下旬	範浄真了	羽咋
	五月上旬	山本龍音	福井市
	五月下旬	本居愛邦	金沢
	五月下旬	天井	金沢
	六月上旬	南塚	福光町
	六月中旬	横井円諦	名古屋
	六月中旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	稲葉道善	広島
	七月上旬	林	
	七月中旬	冨田正導	名古屋
	七月中旬	藤岡	
	八月上旬	上杉	
	八月中旬	山本龍音	福井市
	八月中旬	美濃静江	金沢
	九月下旬	梅原	
	九月下旬	？	
	十月上旬	大島	高岡
	十月上旬	永生	
	十月中旬	大島一声	高岡
	十一月中旬	稲葉道善	広島
	十一月下旬	林	
	十二月上旬	藤田	
	十二月中旬	山田	
昭和四十六	一月中旬	本工	金沢
	三月下旬	石川	
	四月上旬	梅原暁俊	福光町土生新
	四月上旬	藤田良沼	福岡町大滝
	四月中旬	菅原教亮	福井
	四月下旬	範浄真了	羽咋
	五月上旬	山本龍音	福井市
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月上旬	鳥越	福光町
	六月中旬	冨田正導	名古屋
	六月中旬	稲葉道善	広島
	六月下旬	南塚昭純	福光町
	七月上旬	林円精	加賀・山中温泉
	七月中旬	菅原	福井
	八月上旬	上杉思朗	小松
	八月中旬	山本龍音	福井市
	八月中旬	藤田秀雄	福岡町
	八月中旬	高橋	高岡市
	九月下旬	梅原	鳳至
	十月上旬	横井円諦	名古屋
	十月上旬	大島	高岡
	十一月下旬	稲葉道善	広島
	十一月下旬	藤田	
	十二月上旬	藤田	
	十二月中旬	美濃静江	金沢
	十二月中旬	山田	
昭和四十七	一月中旬	本江	金沢
	三月上旬	梅原暁俊	福光町土生新
	三月中旬	石川	
	四月中旬	林	加賀
	五月上旬	山本龍音	福井市
	五月下旬	稲葉道善	広島
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月上旬	範浄真了	羽咋
	六月中旬	鳥越知慶	福光町砂子谷
	六月下旬	藤田良沼	福岡町大滝
	六月下旬	南塚	福光町
	七月上旬	冨田正導	名古屋
	七月上旬	林円精	加賀・山中温泉
	七月中旬	美濃静江	河北
	七月下旬	稲葉道善	広島
	（七月下旬～八or九月）	菅原	
	（八or九）月中旬	藤田秀雄	福岡町
	九月下旬	梅原	
	十月上旬	山本	
	十月中旬	横井円諦	名古屋
	十一月下旬	林円精	加賀・山中温泉
	（十二月）中旬	稲葉道善	広島
昭和四十八	一月中旬	本居	金沢
	三月上旬	梅原	
	（三月）中旬	石川	
	四月上旬	藤田良沼	福岡町大滝
	四月中旬	美濃静江	河北
	四月下旬	稲葉道善	広島
	五月上旬	山本龍音	福井市
	（五月）下旬	横井円諦	名古屋
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月上旬	天井順導	金沢
	六月中旬	冨田光林	名古屋
	六月中旬	鳥越	
	六月下旬	南塚昭純	福光町
	七月上旬	梅原顕雄	鳳至
	七月中旬	菅原教恵	福井
	（八or九月）中旬	山本龍音	福井市
	九月下旬	大島一声	高岡
	九月下旬	梅原	
	十月上旬	稲葉道善	広島
	十一月下旬	林円精	加賀・山中温泉
	十二月中旬	大島	高岡
昭和四十九	一月上旬	大島一声	高岡
	三月中旬	藤田秀雄	福岡町
	（三月下旬）	寺西	荒高屋
	四月一日	寺西	荒高屋
	四月中旬	藤田良沼	福岡町大滝
	（五月）上旬	山本	
	五月下旬	横井円諦	名古屋
	五月下旬	西尾常信	福光町
	（六月）中旬	冨田正導	名古屋
	（六月）下旬	大島一声	高岡
	（六月）下旬	南塚	福光町

	七月上旬	梅原	
	(七月)中旬	鳥越知慶	福光町砂子谷
	八月中旬	菅原	
	八月下旬	直栗	
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月上旬	山本龍音	福井市
	(十or十一月)中旬	美濃静江	金沢
	(十or十一月)上旬	林円精	加賀・山中温泉
	(十一or十二月)25日	長谷川	
	(十一or十二月)下旬	今井	
昭和五十	一月上旬	大島	高岡
	三月中旬	寺西	
	(三月)下旬	今井善信	福光町土生新
	(四月)上旬	菅原	
	(四月)中旬	藤田	
	五月上旬	山本	
	五月下旬	天井順導	金沢
	(五月)下旬	西尾常信	福光町
	(六月)中旬	富田	
	六月中旬	横井円諦	名古屋
	(六月)下旬	南塚昭	福光町
	(七月)上旬	梅原顕雄	鳳至
	(七月)下旬	藤田秀雄	福岡町
	八月上旬	上杉	
	八月中旬	山本	
	八月中旬	大島一声	高岡
	八月下旬	菅原	福井
	九月下旬	梅原	
	十月上旬	林円精	加賀・山中温泉
	十月中旬	美濃静江	金沢
	十月下旬	今井善信	福光町土生新
昭和五十一	一月上旬	大島一声	高岡
	四月中旬	菅原	福井
	四月下旬	真栗良照	小矢部
	五月上旬	山本先生	
	五月下旬	天井順導	金沢
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月中旬	冨田	名古屋
	六月下旬	横井円諦	名古屋
	六月下旬	南塚昭純	福光町
	七月上旬	梅原顕雄	鳳至
	七月中旬	稲葉道善	広島
	八月上旬	上杉	
	八月上旬	住田	名古屋
	八月中旬	山本	
	八月中旬	大島	高岡
	八月下旬	寺西	砺波・荒高屋
	十月上旬	林円精	加賀・山中温泉
	十月中旬	美濃静江	金沢
	十月下旬	今井	
昭和五十二	一月上旬	大島一声	高岡
	三月下旬	藤田秀雄	福岡町
	四月上旬	菅原	福井
	四月中旬	真栗良照	小矢部
	五月中旬	大島一声	高岡
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月中旬	冨田正雄	名古屋
	六月下旬	横井円諦	名古屋
	六月下旬	南塚昭純	福光町
	七月上旬	梅原	
	八月中旬	鳥越	
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十月中旬	美濃静江	金沢
	十一月下旬	林円精	加賀・山中温泉
昭和五十三	一月上旬	大島	高岡
	四月中旬	菅原	福井
	五月上旬	山本	
	六月中旬	冨田正導	名古屋
	六月下旬	南塚昭純	福光町
	八月中旬	南塚昭純	福光町
	九月下旬	梅原徹	鳳至・穴水
	十一月下旬	杉谷	
昭和五十四	一月上旬	大島	高岡
	三月中旬	大島	高岡
昭和五十五	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚	福光町
	七月上旬	大島一声	高岡
	八月中旬	桑谷	
	八月中旬	山本	
	八月下旬	梅原	
	十一月下旬	福井	
昭和五十六	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	大島	高岡
	六月下旬	南塚昭純	福光町
	九月下旬	梅原	鳳至
	九月下旬	林	加賀
昭和五十七	一月上旬	大島	高岡
	四月中旬	大島	高岡
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚昭純	福光町
	七月中旬	大島一声	高岡
	九月下旬	梅原徹	鳳至
	十一月下旬	南	
昭和五十八	一月上旬	大島	高岡
	四月中旬	大島	高岡
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚	福光町
	七月上旬	大島一声	高岡
	九月下旬	梅原	
	十月下旬	南塚昭純	福光町
	十一月下旬	南	
昭和五十九	一月上旬	大島一声	高岡
	四月中旬	大島一声	高岡
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚	福光町
	七月上旬	大島一声	高岡
	九月下旬	梅原徹	鳳至
	十月下旬	南塚昭純	福光町
昭和六十	一月上旬	大島	高岡
	四月中旬	大島	高岡
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚	福光町
	七月上旬	大島	高岡
	七月上旬	上杉	
	九月下旬	梅原	
	十月下旬	南塚	福光町
	十一月下旬	大島	高岡
昭和六十一	一月上旬	□□	
	四月中旬	大島	高岡
	四月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚	福光町
	七月上旬	大島一声	高岡
	九月下旬	梅原徹	鳳至
	十月下旬	南塚昭純	福光町
	十一月下旬	大島一声	高岡
昭和六十二	一月上旬	大島	高岡
	四月中旬	大島	高岡
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚	福光町
	七月上旬	大島	高岡
	九月下旬	梅原	鳳至
	十月下旬	南塚	福光町
	十一月下旬	大島	高岡
昭和六十三	一月上旬	大島	高岡
	四月中旬	大島	高岡
	五月下旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚	福光町
	七月上旬	大島	高岡
	七月中旬	上杉恩郎	小松
	九月下旬	梅原徹	鳳至
	十月下旬	南塚昭純	福光町
	十一月下旬	大島一声	高岡
	十月下旬	大島一声	高岡
	十一月下旬	大島一声	高岡
昭和六十四	一月上旬	西尾常信	福光町
	六月下旬	南塚	福光町
	十月下旬	南塚昭純	福光町
	十一月下旬	大島一声	高岡

全国から出町・眞壽寺を訪れた説教者の延べ人数（昭和25年から40年）



（砺波市永福町 眞壽寺蔵「約定帳」、「御芳名」、「（記録帳）」による）

七　説教テープ・CD・DVD一覧

ビデオ	川岸不退「蓮如とお露」	「川岸不退の節談説教」第一巻	NHK	
ビデオ	川岸不退「親鸞と玉日姫」	「川岸不退の節談説教」第二巻	NHK	
ビデオ	川岸不退「義経初音鼓」	「川岸不退の節談説教」第三巻	NHK	
ビデオ	川岸不退「蓮位の夢想」	「川岸不退の節談説教」第四巻	NHK	
ビデオ	川岸不退「木下籐吉郎と婆」	「川岸不退の節談説教」第五巻	NHK	
DVD5枚組	佐々木高彰「三十三間堂棟木の由来」「親鸞聖人をお偲びして」	節談説教布教大会全記録2　築地本願寺	方丈堂出版	平成19年7月3日
カセットテープ	祖父江省念「親鸞聖人ご出世の御恩」		すねいる	
8ミリ	寶性實成のお説教		個人蔵	
DVD5枚組	谷口璽照「東保流十方諸有讃説教　第一席」	節談説教布教大会全記録1　築地本願寺	方丈堂出版	平成19年7月3日
8ミリ	土屋豊成のお説教		個人蔵	昭和35年12月7日
DVD5枚組	直林悠照「お念仏一つ」	節談説教布教大会全記録7　築地本願寺	方丈堂出版	平成19年7月3日
CD	範浄文雄4「親鸞聖人　大満の行」	甦る名説教選[節談説教1]	すねいる	
CD	範浄文雄5「大原問答」	甦る名説教選[節談説教1]	すねいる	
CD	範浄文雄6「二河白道」	甦る名説教選[節談説教1]	すねいる	
CD	範浄真了8「五劫のねがい」	甦る名説教選[節談説教1]	すねいる	
カセットテープ	範浄真了「信は光」		すねいる	
CD	廣陵兼純「弥陀の誓願不思議に助けられ」	小沢昭一が訪ねた能登の節談説教	ビクター	平成2年6月11日
DVD5枚組	廣陵兼純「立撮即行」「如来ひとり共なりき」	節談説教布教大会全記録6　築地本願寺	方丈堂出版	平成19年7月3日
DVD3枚組	廣陵兼純「弥陀の本願」第一座	節談説経報恩講1　淨宗寺	方丈堂出版	平成19年11月23日
DVD3枚組	廣陵兼純「兆載永劫のご修行」第二座	節談説経報恩講2　淨宗寺	方丈堂出版	平成19年11月23日
DVD3枚組	廣陵兼純「御開山様のご苦労」御満座	節談説経報恩講3　淨宗寺	方丈堂出版	平成19年11月23日
DVD5枚組	府越義博「明治護法録－大教院の明如上人」	節談説教布教大会全記録8　築地本願寺	方丈堂出版	平成19年7月3日
DVD5枚組	藤野宗城「母情仏心「真実の母の姿」	節談説教布教大会全記録3　築地本願寺	方丈堂出版	平成19年7月3日
DVD5枚組	松島法城「蓮如上人讃仰虎斑名号由来之記」「和泉式部回心のこと」	節談説教布教大会全記録5　築地本願寺	方丈堂出版	平成19年7月3日
CD	茂利宗玄「信心獲得」	小沢昭一が訪ねた能登の節談説教	ビクター	平成2年6月11日
DVD5枚組	茂利真正「ご聖人ご流罪」「命は光陰に移されて」	節談説教布教大会全記録4　築地本願寺	方丈堂出版	平成19年7月3日
DVD	吉澤孝譽「聖徳太子伝」	『日本歴史と芸能』第六巻中世遍歴民の世界	ビクター	
DVD2枚組の内	吉澤孝譽「聖徳太子伝」	小沢昭一の新日本の放浪芸　訪ねて韓国インドまで	ビクター	
8ミリ	吉澤孝譽「聖徳太子伝　太子御前々生と御前生と御入胎」		個人蔵	
8ミリ	吉澤孝譽の太子絵伝絵解き		個人蔵	昭和51年1月8日

「第34回郷土先人展　真宗の説教者たち」展示品目録

砺波郷土資料館
会期　平成22年10月15日(金)～11月28日(日)

真宗王国　砺波　―砺波地方への真宗の広まり―

1	砺波地方の真宗年表	パネル		
2	越中三大御坊の成立―瑞泉寺・善徳寺・勝興寺の足跡―	パネル		
3	仏教系寺院に占める真宗寺院の割合　全国・富山県・砺波地方の比較	パネル		
4	行徳寺文書解説	パネル		
5	『五箇山上平村地区古文書目録』南砺市教育委員会編刊　平成20年11月	書籍	砺波郷土資料館蔵	
6	(延宝5年（1677）5月）「（蓮如上人）御物語」（行徳寺文書702）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
7	文化2年（1805）4月15日「阿弥陀経玄談題号随記第一沙門智浄」（行徳寺文書724）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
8	文化3年（1806）3月「雑集法談　越中砺波郡五ヶ山赤尾町村　角淵山行徳寺　智秀殿之時分」（行徳寺文書727）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
9	文化4年（1807）3月21日「亀州講師法談聞書　行徳寺」（行徳寺文書730）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
10	文政2年（1819）2月22日「金津大講師御法話聞書　越中砺波郡西赤尾町行徳寺　智伝」（行徳寺文書738）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
11	文政12年（1829）9月26日「両華院嗣四席演説集　行徳寺」（行徳寺文書749）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
12	文政13年（1830）9月7日「円満寺嗣講師法話」（行徳寺文書752）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
13	(嘉永3年（1850））「説教本」（行徳寺文書768）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
14	安政2年（1855）2月「御絵伝指図道引品　行徳寺鳳龍」（行徳寺文書776）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
15	明治28年（1895）5月「説教不忘記」（行徳寺文書796）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
16	(年未詳）「説教山海録　道宗風龍」（行徳寺文書846）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
17	(年未詳）（法話）（行徳寺文書886）	文書	南砺市西赤尾	行徳寺蔵
18	文政10年（1827）「文政十年仲秋下旬　廻寺厳命之刻　江州成満寺様講師より就御焼失御再建引立座　拾五ケ条法話　雲龍山麓　願慶寺」	文書	南砺市吉江中	南源右衛門氏蔵
19	明治18年（1885）「江州　安野成満寺　拾五ヶ条」	文書	南砺市吉江中	南源右衛門氏蔵
20・21・22	御示談の問答集　文化11年（1814）正月・明治7年（1874）10月・昭和15年（1940）4月	文書	南砺市吉江中	南源右衛門氏蔵
23・24・25	チョンガレ台本「目連尊者地獄巡り段」「仮名手本忠臣蔵」「大しょくかん」	文書	南砺市吉江中	南源右衛門氏蔵
26	砺波地方の常設説教場　写真と位置図　高岡光楽寺、石動称名寺、戸出光林寺、出町真寿寺、津沢正安寺、福光西別院・知源寺・願全寺、福野本福寺、井波瑞泉寺、城端善徳寺	パネル		
27	出町の常設説教場　真寿寺　日本全国から真寿寺を訪れた説教者の一覧とグラフ	パネル		
28・29・30・31・32	説教者の記録「昭和2年2月改正　布教師日割簿」「自昭和8年度　約定誌」「昭和18年　約定帳」「御芳名　昭和31年～昭和40年」「昭和44年1月　賽銭帳」	文書	砺波市永福町	真寿寺蔵
33	高座	実物	砺波市太田	入道忠靖氏蔵
34	賽銭集めの柄付ザル	実物	砺波市太田	専念寺蔵

「鹿島様」と呼ばれて人々から崇敬された鹿島祥雲寺の名説教者土屋豊成

35	祥雲寺　砺波市鹿島	写真	砺波市鹿島　祥雲寺蔵
36	自坊での説教のようす　昭和36年	写真	砺波市鹿島　祥雲寺蔵
37	黒衣と輪袈裟	実物	砺波市鹿島　祥雲寺蔵
38	さまざまな印鑑（豊成の雅号は「黙峰」）	実物	砺波市鹿島　祥雲寺蔵
39	「乗大悲願船浮光明廣海云々」	書（軸装）	砺波市鹿島　祥雲寺蔵
40	「無極尊」	書	砺波市鹿島　祥雲寺蔵
41	豊成の所蔵書籍	書籍	砺波市鹿島　祥雲寺蔵
42	説教テープ	カセットテープ	砺波市鹿島　祥雲寺蔵

特派布教師として全国各地を布教に歩いた（旧福光町）高宮の寶性實成

43	寶性實成の石碑　昭和33年建立	写真	南砺市高宮　善念寺蔵
44	實成没後一周忌に配られた扇子	実物	南砺市高宮　善念寺蔵
45	入院直前に書き残された文章	実物	南砺市高宮　善念寺蔵
46	昭和20年　實成58歳の作品	絵と書	南砺市高宮　善念寺蔵
47	寶性實成の習作	絵と書	南砺市高宮　善念寺蔵
48	「御遠忌法話」	記録	南砺市高宮　成川権士郎氏蔵
49	「説教撮要録　明治二十七年　武種所蔵」	書籍	南砺市高宮　善念寺蔵
50	寶性實成の蔵書	書籍	南砺市高宮　善念寺蔵
51	實成手書きの講義録	書籍	南砺市高宮　善念寺蔵
	「二河白道」の説教本	書籍	南砺市高宮　善念寺蔵
52	・宮部師之口述		
53	・服部三智麿口述		
54	・是山惠覺述		

幕末ごろ善光寺如来をかついで村々を絵解きしてまわった矢木の伝四郎

55	善光寺式三尊仏	実物	砺波市矢木　飛地弘氏旧蔵、砺波市太田　専念寺蔵
56	善光寺縁起三幅	実物	砺波市矢木　飛地弘氏旧蔵、砺波市太田　専念寺蔵
57	厨子	実物	砺波市矢木　飛地弘氏旧蔵、砺波市太田　専念寺蔵

能登の節談説教

58 能登説教者の系譜　森流と川岸流　パネル　石川県輪島市門前町　妙行寺蔵
59 森流の祖　森法啓師の履歴　文書コピー　北陸中日新聞社提供
60 「節談説教の真髄」関山和夫　平成19年（２００７）５月６日・同月13日「北陸中日新聞」　コピー
61 能登で生まれた代表的な説教話「長太ムジナ」『加賀藩史料』『加能郷土辞彙』　パネル　砺波郷土資料館蔵
62 『能登のくに―半島の風土と歴史―』北國新聞社刊　書籍
63 平成19年7月3日収録　節談説教布教大会全記録　ＤＶＤ　南砺市井波　妙蓮寺蔵
64 小沢昭一が訪ねた能登の節談説教　ＣＤ　砺波市中野　小西竹文氏蔵
65 平成19年11月23日収録　滋賀県大津市浄宗寺節談説教報恩講　ＤＶＤ　南砺市井波　妙蓮寺蔵
66 川岸不退の節談説教　節談と法話　全5巻　ビデオ　石川県富来町福浦港　松山宗恵氏蔵
67 範浄真了「五劫のねがい」　ＣＤ　石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵
68 範浄真了「信は光」　カセットテープ　砺波市中野　小西竹文氏蔵
69 祖父江省念「親鸞聖人ご出世の御恩」　カセットテープ　砺波市中野　小西竹文氏蔵

能登節談説教により、親鸞聖人の教えを広めることに一生をささげた　範浄文雄

70 範浄文雄が毎日声をきたえた能登赤住の海　写真　石川県富来町福浦港　松山宗恵氏提供
71 範浄文雄「親鸞聖人大満の行」　カセットテープ　石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵
72 範浄文雄「大原問答」　カセットテープ　砺波市中野　小西竹文氏蔵
73 「大原問答」写本　明治期　文書　滋賀県大津市　浄宗寺蔵
74 範浄文雄「二河白道」　ＣＤ　石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵
75 高橋常雄著『二河白道講話』大正14年刊　書籍　南砺市高宮　善念寺蔵
76 範浄文雄の昭和四十年度布教日程　コピー　石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵
77 袈裟と五条　実物　石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵
78 説教の題材となったさまざまな雑誌・書籍類　書籍　石川県羽咋郡志賀町　善法寺蔵

説教本

79 説教本の版木『勧導簿照巻十四』『成唯識論導巻七』　実物　砺波市庄川町　庄川民芸館蔵
80 木村徹量著『信疑決判』　書籍　節談説教研究会　府越義博氏蔵
81 『福岡徳栄寺義渓述　説教妙弁集全』　書籍　節談説教研究会　府越義博氏蔵

聖徳太子とともに人生を歩んだ「太子様の絵解き僧」　吉澤孝譽

82	井波瑞泉寺大谷支院　瑞泉寺歴代の御廟　瑞泉寺歴代の「灰塚」と呼ばれる墓地	写真	
83	聖徳太子縁起拝読	写真	
84	写本「聖徳太子伝記」	写本	南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵
85	太子絵伝絵解きのテープ　昭和63年7月収録	テープ	南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵
86	小沢昭一の「新日本の放浪芸」	DVD	南砺市井波　妙蓮寺蔵
87	直綴・五条・輪袈裟	実物	南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵
88	感謝状　昭和50年7月25日　井波別院瑞泉寺住職大谷暢道→吉澤孝譽	実物	南砺市井波　瑞泉寺大谷支院蔵
89	『絵解き―資料と研究―』三弥井書店刊	書籍	富山市　富山県立図書館蔵

90	**聖徳太子絵伝　五・六・七・八幅**	南砺市井波　瑞泉寺蔵
91	**親鸞聖人絵伝　文政八年**	砺波市永福町　真寿寺蔵
92	**地獄極楽図　全二幅**	砺波市福山　願成寺蔵

参考文献

関山和夫『説教の歴史　―仏教と話芸』　岩波書店　昭和五三年

関山和夫『仏教と民間芸能』　白水社　昭和六一年

蒲池勢至『真宗と民俗信仰』吉川弘文館　平成五年

林雅彦・渡邊昭五・徳田和夫『絵解き　―資料と研究―』三弥井書店　平成元年

小林一郎『善光寺如来縁起　―元禄五年版』銀河書房　昭和六〇年

『城端別院 善徳寺史』　城端別院善徳寺　平成一一年

『真宗大谷派 井波別院　瑞泉寺誌』真宗大谷派井波別院瑞泉寺　平成二一年

芸能史研究会編『日本庶民文化史料集成　第八巻』三一書房　一九八五年

『音と映像と文字による【大系】日本　歴史と芸能　第六巻　中世遍歴民の世界』平凡社　一九九〇年

節談説教研究会編『節談説教』　第1・2・3・4・5号　㈱方丈堂出版　平成二〇・二一・二二年

富山県［立山博物館］　特別企画展図録『立山と真宗　御絵伝がつなぐ二つの世界』平成一八年

『東本願寺の至宝展』　真宗大谷派・朝日新聞社　二〇〇九年

『聖徳太子展』ＮＨＫ　二〇〇一年

竹部俊恵「井波別院瑞泉寺太子伝絵解きについて」『文藝論叢　第七〇号』大谷大学文藝學會

「井波御坊」第25号　瑞泉寺　平成四年一二月

主な出品者および協力者

願成寺　砺波市福山　　嵐　龍夫

行徳寺　南砺市西赤尾　　伊藤　曙覧

祥雲寺　砺波市鹿島　　小西　竹文

浄宗寺　大津市御幸町　　佐伯　安一

称念寺　南砺市湯谷　　飛地　弘

真教寺　南砺市徳成　　成川権士郎

真寿寺　砺波市永福町　　入道　忠靖

瑞泉寺　南砺市井波　　南源右衛門

瑞泉寺大谷支院　南砺市井波

専念寺　砺波市太田

善念寺　南砺市高宮

善法寺　羽咋郡志賀町赤住

福専寺　羽咋郡富来町福浦港

節談説教研究会　府越義博　東京都八王子市

妙行寺　輪島市門前町

妙蓮寺　南砺市藤橋

第三四回郷土先人展
真宗の説教者たち
編集・発行　砺波市立砺波郷土資料館
〒939－1382
富山県砺波市花園町一－七八
TEL 0763－32－2339
平成二三年（二〇一一）三月